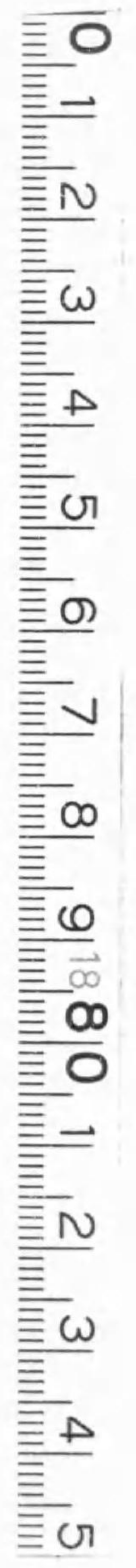




時局と信仰

巫峡千山晴終南萬里春



始



特214
378



時句
信仰



澁柿變成甘柿轉惡成善亦宜哉

松軒伴遊



はしがき

今日我が國は振古未曾有の大聖戦下に在り、我が同胞は緊張其物とも申すべき態度にて戦時體制下の苦難を克服し、皇謨翼賛の實を擧げんと努力してをるのであります。斯うした大切の時局下に、私は古稀の老齡を迎へ、而も昨秋以來の宿痾は未だ全癒せず、それが爲に心身を捧げて御奉公申上ぐることの出來無いことを深く遺憾に存じてをる。併し此の間に於て體力の許す限り應分の御奉公を爲して自ら慰めて居るやうな次第であります。

それにつき私は國民の一人として今次の時局に對し、深甚の考慮を拂ひ、此の大業達成の爲には渾身の至誠を捧げ御奉公申さねばならぬと存じ、事變勃發の當初より全力を傾倒し、筆に口に私の所信を波瀝し道交諸友の奮起を促がし來つて今日に及んでをるのであります。「時局と信仰」は其の私見の一端を申述べたものであります。

私は眞宗教徒の一人として、今次の事變を契機とし、我が宗義の眞精神を發揮して、國家の爲めに盡さなければならぬ、それが爲には宗義の宣揚上に深甚の考慮を拂ひ、清新の意氣を以て傳道しなければならぬと信ずる者であります。「眞宗教徒の使命」は私の其の私見を最も率直

に申述べたるものであります。

私は前上の趣旨を本會館に於て前後數回に亘りて講演し、諸道友の清聽を仰いだのであります。當時時間上の制限もありて、孰れも十分に其の意を盡さざるものゝあり、それにも拘らず近藤館主は之を刊行して諸道友の間に頒ち下さることゝなつた。

回顧すると昭和十年私は濕疹を疾んで、約一ヶ年間病床に在つて靜養した。此時先館主近藤老兄は私の『人生最高の疑問に答へて』の講を刊行して私を慰めて下されたのである。而して今次私が攝護線炎の難症に罹り、昨秋九月以來靜養せる此の時に於て、當館主近藤兄は本書を刊行して私の病軀慰安の好資料として下さる。私は此の不思議の好因縁を追憶し、感謝止むなきの喜びに浸つておるのであります。

昭和十五年十月

樂山莊病床にて

河崎顯了識

目次

時局と信仰

聖戰の完遂	一
時局下の生活	三
生活と信仰	三

眞宗教徒の使命

己を捨て、無碍の大道に歸す	一四
人生を正しく見て禍福に惑はず	一四
報恩の至誠を以て國家に盡す	一五

本講演はいづれも信道會館に於ける講演を伊藤義男氏の速記によるものにして、「時局と信仰」は昭和十五年七月廿七日、同廿八日の兩日に「眞宗教徒の使命」は昭和十二年六月廿六日、廿七日の兩日、親友會講演と日曜講筵に於てなされしものである。

時局と信仰

聖戰の完遂

昨年の秋九月、圖らず健康を損し病人の仲間入りを爲し、當時大した事もなく其中に快くなるんだらうと思つてゐたんですが、それが容易に全快しませぬので、ズツと療養を續けて一切の講演を廢めて専ら靜養にかゝり果てゝ居つたんでございます。ところが、此の夏の初め頃から漸次快方に向ひましたので、最近漸く主治醫の許しを得まして、ぼつ／＼近い所でお話を致して居るやうな始末で、當地へは昨夕初めて出て参りまして、今日は全日休養し、前刻此方へ参つたやうな次第です。丁度、病床に十一ヶ月居りました體が、どうもまだ、もう一つハツキリして居りませんから、甚だ勝手ではありますが、これ迄のやうな工合に立つて力強い話をするといふわけにいかないのであります。醫者の方では腰掛けて居るか坐つてお話をするやうにと注意されてをるのです。實は長い旅行をして始終列車に揺られるのと、それから立つて力強い

講演をするのと、もう一つは夜も晝も體を横にせんと嚴重に坐つてゐたのと、さうした事等が病源となり、それがために攝護腺が腫れて尿が出なくなつたので、尿毒症の手当をするやら大騒ぎをやつたのでございます。幸に主治醫の先生が我が身の事のやうにいつて世話をして下さるので、やつとのことで難關だけは突破したのでございます。只今私は體に病を有つて居り乍ら、兎も角も自分のやるべき事をやつて行かうといふ決心をして居るので、これを私は「帶患健康」といふ言葉であらはして居るのでございます。病氣を有つて居り乍ら、氣を付けて行けばともかく健康體の時と變らぬといふやうな態度であります。私も本年は七十歳ですから、もう長く生きる體でもありませんので、これが戦時でありませんでしたら、スツカリ講演を廢めまして、書齋に籠りましてやりたい仕事が出ないのでございます。現にその仕事の助手を入れまして、正月からそれ／＼抄取らして居るのでございますが、事變の状態は刻々面倒になつて來ますので、この際我が身の上に火が點いたやうに御奉公申さなければならぬ。

陛下の宸襟を休んじ奉るのが、臣民の本義だと考へます。それでありませうから、病狀が許しましたならば、せめて今日迄お親しみのあります所だけでも參つて、肚打明けてお話をし本當にこの際國家に御奉公をしようぢやありませんか、と叫びたい。幸ひ今晚から明日にかけ

まして時間が與へられましたから、思ひ切つて時局問題に對して、私の考へて居ることをいはずして貰はう、と存じまして諒解を得ましたから、茲に大きな題を出して「時局と信仰」と掲げて置きました。内容は今晚と明日の午前と二回に亘つて話すのでございます。尤もこれは前以て申し上げますが、是非終り迄聽いて頂きたい。また或は、無遠慮に私の意見をいひますから、あなた方と一致の出來ぬ點もあるか知れぬ。随分ひどい事をいふなといふ方もあるか知らんが、今の日本の現状を眺めましたら、遠慮をしたり氣兼ねをして居る時でない。國が興廢の岐路に立つて居るんですから、本當に國家を念ふ者は誰に遠慮會釋は無い。かうでなければならぬといふ事を衷心披瀝せなくては、この大きな問題は片付かぬと思ふ。そこで私は私の心に感ずることを申し上げます。只今も申しました通り、まだ十分の健康體でありまぬので、隨つて立つてお話しするといふことは絶対に止められて居りますから、腰を掛けてお話し致します。さうして、長い話をするなといふことで、大體、私見を書きとめて參りましたから、それをもとにして、話を進めて參りますから、豫め御了承を願ひます。

今日この時局の中で、私共のこの信仰がどれだけ役に立つか、といふ問題でございます。私の考へでは、役に立たぬものならばこの際はさういふ呑氣な話をして居る時でないと思ふ。役

に立つものなら誰が何んといつたとて、一番に力を入れて、そこに皆が總立ちをしなければならぬ。茲に私は、今日の時局に於て私共の平常信じて居る念佛がどういふやうな効果を奏するか、といふ事に就て、私の感ずるだけを申述べたい。今晚は第一項として、「聖戦の完遂」といふお話であります。

近時、この戦を「聖戦」と申しますが、どうしても聖戦を仕遂げなければならぬのである。どうしたらこの聖戦を仕遂げられるかといふ問題に就て、私はかう考へて居ります。殊に今月は七月でございます。昭和十三年の七月七日に今次の事變が勃發しまして、それから七月七日といふ日は、全國民が忘るゝことの出来ない意義の深い日で、この事變の繼續して居ります今日では、この日が巡り來たる毎に、お互にこの事變に對する認識を新たに於て居るのでございます。印象の深い七月七日といへば、今事變についての腹をきめた日でありませう。私はこの事變の勃發の當初から、この會でも申しましたが、これは容易に收まるものではない。場合によつては乗るか反るか我が國としては、興廢を賭してでも戦はなければならぬやうな大事變になるかも知れない。私共は一切の私情を振切つて、所謂、滅私奉公の覺悟の下に活躍せねばならぬ、と深く私は感じた。でありますから、私は到る所でその旨を話をして、同信の方々の奮

起を促がし來たつて、今日に及んで居るのであります。私はさうした気分でありますから、七月七日といふ日は殊に意義深く感じます。この日に際會する毎に、いつも私の所感を公開の演壇で私は述べ來たつて居るのであります。即ち昭和十三年の七月七日のこの日は、東本願寺の大師堂で、三千七百名の在郷軍人會の人々に、「皇恩深厚」といふ演題の下に、私の所感を遠慮無く話したことであります。それからまた、昨昭和十四年の七月七日のこの日には、京都の高倉會館で、軍の方からも來られまして、私と二人で話をしたのでございます。その時は「時局と信念」といふ題で……矢張りこの「時局と信仰」と同じやうな題で、私の感懐を述べたのでございます。また、今月の七日の日も高倉會館で、この時は題を「聖戦第三周年に際して」と掲げて、私の感想をこれも遠慮無く述べたのでございます。本願寺としての會に於ては、どういふ廻り合せか私がいづも話を今日迄來つて居ります。今度久し振りで當地に参りましてさつきに申しましたやうに、兎に角この事變に對して、私の思うて居ります點をば述べさして頂きたい、と豫めその旨申入れまして諒解を得たのでございますが、たゞ茲で一つ申しますのは、前にも申した如く、昨年の秋から病症に羅り靜養しなければならぬ身になつて、現に今もそれを繼續して居るやうな次第でありますから、十分なお話が出来ないのは遺憾に存じて居り

ます。

この事變は、繰返して申しますが、三年や五年で終るものでない。尠くとも十年或は二十年或は數十年に亘らなければ本當の事は完遂しない、と私は信じ來たつて居りますので、時局が完遂したといふ歡びは、七十の老境に入つた私としては、迎も見ることは出來ない、時局の中で私は死ぬるだらうと思ふけれども、私はせめて今後十年位どうか生きて居りたい。えらい欲が深いやうですが、何故かといふと、さうしたら多少この事變がどういふ工合に行くかといふ^{めど}目途が付きます。それを見なければ私は死ぬに死ぬぬ、といふ程にこれを重大に考へて居るのでございます。吾々は口に老少不定を談じて居る。また、今日あつて明日の生命はわからないと始終他に説いて居る。それにも拘らず、これから十年も長生きがしたいといふのは、甚だ不都合ではないかといふことになるが、併し私は、不都合でも不都合でなくともどうしても生きて居らなければ、私の腹の虫が承知しないといふのが私の氣分です。尤も私は眞宗教徒でありますから、いま死にましたとて何んともない。それは私は直ぐにもう一遍こゝに生れて來るんですから、私はもう一遍生れて來て、邦家のために御盡したいといふ覺悟を有つて居るのでございます。私は死んだら次の生れた先がわからぬといふやうな、そんなボンヤリした信仰で

はない。死ねばこゝに生れて來る、これが私です。斯様なことを申しますと、君は妙なことを考へて居るナ、かういはれるか知れませんが、私はそれを堅く信じて居る。それが眞宗の教であります。早いことをいふと『正信偈』には、この事がどうあらはれて居るかといふと、あなた方もよく御存知でせう。

得至蓮華藏世界 蓮華藏世界に至ることを得れば

即證眞如法性身 即ち眞如法性の身をさとる

遊煩惱林現神通 煩惱の林に遊んで神通をあらはす

入生死園示應化 生死の園に入つて應化を示す

と、かう書いてあります。淨土に往生した者は佛と同等のさとりを開いて再び人生に出て衆生を濟度する、これが眞宗の信仰である。また、それを簡單にいはれた言葉に、

必至無量光明土 必ず無量光明土に至れば

諸有衆生皆普化 諸有の衆生みな普く化す

とあります。また『和讃』の上には、

南無阿彌陀佛の廻向の 恩徳廣大不思議にて

往相廻向の利益には 還相廻向に廻入せり

宗祖聖人は、斯様にお示しになつて居ります。南無阿彌陀佛を廻向された者は、廣大な恩徳を頂いて往相の廻向として淨土に往生する利益も貰へば、淨土から還相と、また人生に還つて來る利益も貰ふのや。これが南無阿彌陀佛。さうしてみますといふと、眞宗の信者であり乍ら死んだ行先がわからなかつたり、もう一遍生まれて來ることがわからぬやうな信仰であつたらそれは駄目ですよ。私は堅くこれを信ずる。念佛はどうしても往つたら還らなければならぬ。これは往復切符のやうなものです。「往相廻向の利益には、還相廻向に廻入せり」と、また還るんです。かういふ事をいひますと、「そんな事があるのか、變な事だなア」と、或は若い人はいふか知らんが、ひとは何んといふても構はぬ。私は宗祖聖人のこの教を信じますから、それが私の信仰です。だから、再びこゝに生れ出て來るといふことを申すのであります。それを私はハツキリいふ。私の養父が亡くなります時に、枕許へ奇つて居る皆が泣きましたら、「わしが今迄いふて聞かしたことが、お前等はわかんか。わしは往つて直ぐに還るんだ。ちよつとの別れが何がそんなに淋しい、その信仰が無いか……」といふて、養父は死に臨んで皆に注意を與へました。私もその信仰に生きる。「そんなら君、生れて死んだら、また今度生れて來るのな

ら、何も今更十年の命を保たいでもいゝぢやないか、直ぐ來たらいゝ」それはわかつて居る。それは今日死んでも直ぐに生れて來るから何んともないけれども、私は矢張り十年生きたい。何故なら今日死んで明日母の胎内に宿つても、生れて來るのに十ヶ月かゝる。さうして、生れて來ても十三や十四では、まだ國家の事はわからぬので、その間に戦はどこへ行つて了ふか知れん。それで、「マア、同じことなら十年だけどうぞ私を生かしておいて下さい。この大切な事を事ぬと私は死ねませんから」かういひたい。それほど私は今次の事變に對して、重大なところの關心を有して居るのでございます。だから、かうして事變の三周年に際會すると、それに對する考へ方は、更に新たなものが生じて已まないものであり、それをば今回、私は率直に申し上げますから、或は老人の躁言といふことになるか知れませんが、どうかそれだけはひとつ大目に聞き流して頂きたいのでございます。

さて、この時局の前途はどうなるかといふ疑問は、多くの方が抱いて居る疑問でございます。愈々新政權の國民政府が出來たから、或は近き將來に終了するだらうと考へて居る方もあります。私共は明日以後のことは明言することは出來ない。時局の前途はどうなるかといふこの疑問に對しては、何とも判斷を下すことは出來ないが、併し、これだけのことは私、申してよか

らうと思ふ。それは、この度の事變は今後如何なる苦難が到来しても、また、幾ら長い歳月を要してもこれを完遂しなければならぬといふこと、これはいへる。止められぬ戦です。それからまた、今後は益々多事多難を突破しなければならぬといふこと、この二つは只今斷言を致しても、何等憚るところは無いと思ふのであります。殊に今後この事變を處理して行く上に就て私は昨今のヨーロッパのあの戦亂の動きを眺めても、深く／＼考へさせられる。支那事變だといふて居りますが、現在のヨーロッパの大動亂が、これから進んで行くに伴れまして、その動亂の波の動きがこつちの上に来たらぬといふやうなことは、誰も斷言することは出来ない。何と考へたとて支那事變でありますけれども、支那の中へはイギリスの力がグツと這入つて居ります。それと摩擦を起すことは當然で、誰が考へたとて、「そんなことは無い」といふことはいへませんですね。現にやつて居る。それならロシアとはどうだらうといつたら、ロシアとは現に滿洲で兩方から睨み合ひをして居る。これが現在のすがた、一支那事變ぢやないです。アメリカだつてさうです。私は軍事や外交に對しては何等の知識は無いから、さういふ點に就て彼是申すことは出来ませんけれども、併し、海外の列強の動き方なり、また、只今出来た近衛内閣の轉換外交の方針などを、兩三日來よく見て居りますと、歐洲戰亂に對して、斷じて對岸

の火災視することは出来ない。今更申します迄もなく、今次の聖戰の最後の目的は何んだといふなら、日本と滿洲と支那が、それ／＼異つた國であり乍ら異體同心、東洋永遠平和を樹立して共存共榮の實を擧げんとするのであります。これはお釋迦様に説法ですが、それを實現するためには、滿洲が先か支那が先か。さうぢやない。我が國が第一線に立つて百難を排してでも、これは實現して行かなければならぬといふのでございませう。これが日本の信念です。ところで、この異體同心とか共存共榮とかいふことは、言葉の上では容易であります、それが愈々結果を擧げますといふことは、私は容易でなからうと思ふ。何しろ民族が異ひますし、それから支那人なり滿洲人なりの使ふ言語が異ひます。食ふ物から着る物から住む家、風俗習慣がみな異つて居る。その異つた者同志が互に手を執つて事に當るんでありますから、それは幾多の歳月を要することは勿論で、そんなに簡単に觀光團の旅行者が走るやうな工合にはいかぬ。これには時がかゝる。平時であつてもこれは時がかゝりませうが、況してや重慶政權はまだその戈を收めなくして蔣介石が頑張つて居りますし、また、それを後援する第三國の行動も跡を断ちませんから、前途非常の困難を豫想せずには居られないのでございませう。さうした困難を突破しまして、どこ迄もその目的を達成しなければならぬといふ、一大使命を我が國は

有つて居るのである。それは申す迄もなく、神武天皇の大御心を戴きまして、近頃やかましくいはれて居る所謂、八紘一宇の精神、天が下を一つにして皆が共に歡んで暮せといはれた、あの尊い思召をあらはして行かうといふのが今度の戦争で、私共は祖先以来、この萬世一系の尊い恩澤に浴し來つて居るので、今次の事變を契機として、この尊い恩澤を支那四億の民衆の上にも被らしてやらうといふのでございます。これがこの戦争であります。申す迄もなく、今次の事變の目的は第三國が力を入れて日本に双向ひます容共抗日の、あの蔣政権を覆滅して東洋の平和を回復して、日本と支那と滿洲の三國が善隣の交友を結ぶ、これが近衛聲明でありませう。隣が仲好くして行き、共に協力し八紘一宇の理想を輝かせ経済的の提携をするのであります。それがために日本は領土を擴張するとか、戦争の費用の賠償を要求するとかいふことは無いのであります。非常にサツパリして居ります。求めて居りますところは、是等民族と共に手を執つて啓發し共榮の喜びに生きようといふ事より他にありません。だから、これを「聖戦」といふ。私はこの聖戦が、かうした限り無い大慈悲心によつて行はれて居ることを思ふ時、この度の聖戦はたとひ如何なる苦難が到來することがあらうとも、屹度その目的は達成さるべきものである、と堅き自信を私は抱く者でございます。「眞理は最後の勝利」ともいひます。最善の行

爲には必然に最善の果實を結ぶものである。即ち私は佛教徒でございますから、善因善果の大法は斷じて誤ることは無い、と私は堅く信ずるので、かういふことを申したのでございます。先がどうなるといふやうなことは少しも思はぬでよいのです。何んとしたとて善因善果の結果が出なければ、お経が嘘になつて了ひますから、私は深い信念を有つて行きます。併し、それだからといふて、安逸を貪つて居つては、その効果を奏することは出来ません。それを獲ますためには、全國民が一心同體となつて、私共の祖先が身命を賭して、神武天皇の御大業を翼賛し奉つたと同様に御奉公を致さなければならぬのでございます。それに就いて今年の二月十一日紀元節に賜りたる、陛下の御詔書に、

今ヤ非常ノ世局ニ際スルノ紀元ノ佳節ニ當ル爾臣民宜シク思フ神武天皇ノ創業ニ馳セ皇國ノ宏遠ニシテ皇謨ノ雄深ナルヲ念ヒ和衷戮力益國體ノ精華ヲ發揚シ以テ時艱ノ克服ヲ致シ以テ國威ノ昂揚ニ勗メ祖宗ノ神靈ニ對ヘンコトヲ期スヘシ

と仰せ給ひましたが、殊にこの中の「思フ神武天皇ノ創業ニ馳セ」との仰せは、私共は深く感銘して寸時も忘れてはならぬところの御示しである、と私は感佩して居るのでございます。かういふ點を我が同胞の方々はどうぞお考へになつて居るかといふことに就て、私は各位のお考へが

承はりたいと思つてゐるからであります。申します迄もなく、今年は皇紀二千六百年の佳節であります。全國民は擧つて、この意義深い佳節を祝福して居るのであります。それに就き私は、その往古に於て神武天皇があらゆる難關を打破して、この尊い國體を樹立し給ひ御苦勞のほどを窺ひまして、感慨殊に新たなるものがあるのでございます。二千六百年前の多くの御事績に就ては、そう詳細に知ることは出来ませんが、併し古い書物を繕いて見ますと、大體はかうだといふことが拜察出来るのであります。神武天皇が征途に上り給ひて、大和の橿原に都を定め給ふまでには六年の日子を經過し、その間各地に轉戦して幾多の艱難を克服遊ばしたのでございます。そのために多くの勇士が戦場で生命を捧げたことは申す迄もなく、畏れ乍ら御皇族の御方も尊い御生命を捧げ給ふたのでございますが、剛健不屈の大精神によつて肇國の大業が完成されまして、今日の立派な我が國體が出来上つたのでございます。私共は今日かうした有難い生活をさせて頂くに就きましても、この御苦勞のほどを偲ばなければなりません。

ところで、茲に深く考へさせられますのは、神武天皇御創業の當初に下し給ひし、あの八紘一字の宏遠なる御理想を、今次の事變を契機として、隣邦の所謂四億民衆の上に光被せしめんとして居るのでございます。それは我が國にあつては、皇紀二千六百年の佳節を迎へて、全國

民が擧つて慶祝して居るこの時に、それと時を同じくして隣邦に新たなる國民政府が出来て、今次の事變の前途に對して一大光明を與へた。私は彼を思ひ是を思つて、實に言語に盡し難い感慨に浸らざるを得ないのでございます。日本では二千六百年の佳節で、神武天皇の御聖徳を謳歌してゐるその時に、支那の方に於ては、この聖戰完遂に一番大切な新政府が成立したといふことは、奇蹟といふてよいか何んといふてよいか私にはわからない、一つの力強い深い、有難い感じが起るのでございます。繰返して申しますが、今次の事變は神武天皇が、天の下の者と共に歡んで暮せ、と仰せられた八紘一字の思召を、東亞の天地に被らしめんとするのでございます。世界の列強が領土の擴張を圖るとか、その民族の優越感を擅はたらにするのとは、全然その趣を異にして、共に手を執つて啓發し共榮の楽しみに生んとするのであります。その理想は實に崇高にして、その目的は遠大であります。それと同時に、それを達成するためには、私共の祖先が身命を捧げて神武天皇の大業を翼賛し奉つたと同業の意味を以て、皇謨を翼賛し奉らなくてはなりません。私は只今拜讀しました紀元節の詔の中に「思フ神武天皇ノ創業ニ馳セ」との御言葉は、正しくこの點を仰せられたのであると感銘しまして、私の身命を賭して、御奉公を申し上げねばならぬ覺悟を致して居るのでございます。水が至つて渠みせが成る、といふ言葉

がございますが、私は今次の事變に際して更めてこの感を深くする。水が来てたうとう渠が出来た。悠久二千六百年の間堅實な道を辿つて来て、我が國體は益々その精華を發揮し、茲に時を到りまして、隣那の天地に迄この大きな德澤を被らしめんとするのでございます。殊に今年はその花の開く季節が到来したといふ感じが、私の心の中には浮んで已まないであります。それでありますから私共は今日、戦時體制下にあつて、その生活上に平常と異なる幾多の苦難を生じ来たつて居りますが、これに耐へこれに忍んで、聖戦の大業を翼賛し奉る光榮に浴さなければならぬ、と奉公の精神に燃えてゐるのでございます。聖戦の完遂は、蔣政権の潰滅のみでそれが成就するものとは思はれません。成程、蔣政権の潰滅といふことは、今次の事變の中に於ける重要な一段階でありますけれども、決して全分ちやありません。この事變は抗日分子の迷夢を覺ますと共に、一方には隣那の民衆と共に手を取つて、共存共榮の實を擧げんとするの目的でありますから、それに就て蔣政権を中心とする抗日一派は、今日、前線に於て勇戦奮闘する將兵諸士の威力によつて全滅することは明らかでありますけれども、隣那の民衆と手を執つて一家團欒の樂しみを得るのには、銃後の私共として深く考慮しなければならぬ。この點を多くの方がもう一息ハツキリして居らぬやうに私は思ふ。この戦は出征の兵士だけで片が付

くのではない。戦後に吾々は彼れも是れも共に胸を開いて、手を執合つて一家團欒の樂しみをしなければならぬ。茲に吾々の務めがあります。若しこれを誤つたら、この聖戦の崇高なる目的を根柢から覆す。これは今から考へなくてはなりません。これを思ふと今次の聖戦に對しては、私共は深く内觀反省して忠良の臣民としての行動を爲して、皇謨を翼賛し奉らなければならぬといふことを、私は切實に感ずる者でございます。

去る紀元節に支那派遣軍の司令部で發表しました「派遣軍將兵に告ぐ」といふ。あの有名な一つの文章がございます。皆さんもお讀みになつたことと思ひますが、あの一文を讀んでいろいろの感想が浮んで、今に私は深甚に考へさせられて居るのでございます。あの中に「敬、信、愛を以て兩民族を永久に結合せよ」と見出しに書いてある所と、「英靈を冒瀆すべき不良邦人を戒飭遷善せしめよ」あの一章を讀んで、私の心の中には非常な感想が浮んで来て居るのでございます。皆さんはあれをどういふ風にお讀みになつたか知りませんが、幸ひ今茲でそれを朗讀させて貰はうと思ひます。かう書いてございます。

「弱きが故に助ける」といふ氣持(愛)は日本人の傳統的性格である。聖戦の出發點は歐米諸國の策動に利用せられて盲動する抗日政權を膺懲し、虐げられたる良民を救はんとする精神

に立脚して居るものであるが、戦後に期待する日支兩國民族永久結合の爲には、更に一步進んで支那民族の本質を正視し、其の長所を見出し之を尊重し、信を其の腹中に置くの雅量を必要とするものである。

我を騙すかも知れないと用心してかゝれば、對手も亦何時迄も解けない氣持を抱く事は、個人の交際に於ても國家の關係に於ても同様である。四千年の歴史と歐米に先覺せる文化を持ち、我が國と二千年の友好關係にあつた支那であり、兵匪の暴掠や天災地變に脅かされても誰人にも訴へる能はず、又最近に於ては、歐米諸國の資本主義的侵略に搾取せられながらも根強く生存し、致々營々として大地と共に生きて居る支那人を見て、其の韌強と其の忍苦と其の素朴とに美點を認め、一度や二度の背負投げも、喜んで受けるだけの腹で進めば必ずや、兩國民族の精神的結合に到達し得るであらう。

日本を信賴せよ、日本人と提携せよと如何に叫んでも、支那人が心から日本を信賴し、日本人を信用するに至らない限り一方的である。

我等は支那人に呼びかける前に、先づ己を眞の日本人として正しくする事が先決條件である。

と記されてあります。支那人に呼びかける前に、俺は本當の日本人かどうかといふことを、今日の吾々は誰も彼もが一過考へてみなくてはならぬといふので、これは大きな宿題を投付たのでございます。今更かういふ事を申す迄もなく、俺が日本人なれば、本當に滅私奉公以て國家に盡さなければならぬ。出征の將兵は生命迄賭して盡して居るのに、自ら日本人と稱して國策に違反したり、變な事をやる者が尠くないのは、これはどうしたことであらう。私はそれを呼びたい。そこが最も反省しなければならぬ點だと思ふのであります。又かうもいふてあります。これは現地の軍人を目標にして居りますから、随分と思ひ切つて書いてある。

軍に跟随し同胞の先驅として大陸に進出した邦人中には、或は宣撫に、或は看護に献身的犠牲的活動をなし職に殉じたるもの、又現に活動をなしつゝあるものも少しとはしないが、日本人の面汚しも亦少なからざる現状である。法に觸れるものゝ多い事は勿論、觸れないものゝ雖も、道徳的に指彈せられるものゝ甚だ多い現状は遺憾ながら之を認めざるを得ない。

上海、南京、天津、北京等の夜の状況を一巡すれば、如何なる状態にあるかを判断する事が出来よう、遊興の影には不正があり勝ちであり、又支那人を罵して不正に利益を貪り、或は敵側を利用する事を知りつゝも營利の爲敢へて之を爲し、或は外支人の手先となりて我方に

不利となる行爲を敢へてする者、就中外人に對し名義貸をなし不當の利得をなすもの、或は個人の利益のみを圖りて全般的統制指導を拒否するが如き者がある状態では、何時迄経つても聖戦の成果を収める事が出来ないのみならず、日支兩民族を永久抗争に導くものである。派遣軍將兵は先づ身を以て自肅範を示し、不良邦人の反省自覺を促し、十萬の英靈を冒瀆する様な結果を來さしめない心構へを以て足下を淨める事に努力しなければならぬ。

十萬の英靈は不良邦人が懷を肥やす爲に、日支兩國民族を再び抗争に導く様な結果を見たら、地下で何と訴へるだらう、英靈を慰めるの途は單に禮拜供養のみでは足りない、其の骨の上に築かれる日支永久の結合を實現させる事に全力を盡す事が、生残つた將兵一同の義務であり、又英靈に對する最善の供養である。

と派遣軍の將兵に呼びかけて居るのでございますが、これは私は、派遣軍の將兵だけが聞くのではなく、銃後に居る吾々もこれを聞いて深く考へて行かなくてはならぬと思ひます。私はこの一文を再讀し三讀して深く／＼考へさせられるのであります。これはどこ迄も派遣軍の將兵のみが聞くのではなく、私共銃後の者が、殊に今後大陸に於て事を爲さんとする者が深く肝に銘じなければならぬ大切なことだと思ひます。

私共は只今内地の銃後を見渡した時、銃後の國民は本當に滅私奉公して、この大事變のため己を忘れて盡して居るだらうか、私共の見ましたところでは、大事變だ／＼といふては居るが、どうも大部分の人の考へがハツキリして居らないやうに思ふ。大事變は我が身、我が家の大事變だと考へて居りはしないでせうか。これでは商賣が出來ぬとか、こんなことではやりきれないとかいふて騒ぐ。或は外米を食つてゐるので腹工合が悪くて困るとか云ふ。日本の國が引つくり返るよりも、茶碗の方が問題になる、餓鬼の寄合を名譽のやうに思つてゐて、それで戦争がやつて行けるかと私は叱る。百萬の將兵諸士はそれどころでない。若い將兵の人が前線で生命を賭して戦かつて居るのに、それよりも年の行つて居る、世間の酸いも甘いもよく知つて居る四十代、五十代の働き盛りの者が何故にもつとハツキリやらぬのだらう。それでよいのだらうか、といふことを私はいひたい。そんな事をいふたとて私の家がもてぬから、私の商賣がもてぬから、かういふか知らんけれども、前線で戦ふ時に商賣や家があるだらうか。みんなそのやうなものは眼中に無い。たゞ一死報國あるのみである。苦勞は將兵だけ、俺等は勝手に一人やつて居るんだ、といふやうな人は蔣介石一派の味方で、これは日本人の面汚しです。何んと考へたとて、そこに一大反省をしなければならぬ時が私は來て居ると思ふ。だから私は、

氣狂ひのやうにこれをやかましくいふのであります。かういふ點は心配をして居る者は皆やかましくいふ。先月、京都の中外日報社が「時に叫ぶ」の會といふのを主催しました際に、中田緑郎といふ人のいはれた話を聞いて、私は成程と思ひました。これも御参考迄に申し上げます。

「私があちらへ参りました時、丁度滿洲の検事局で熱河の要人達を檢舉して居りました。二十数名檢舉したのでありますが、それは例の共産軍である第八路軍が、國境を越えて熱河省に入つて來まして、共産主義を宣傳した。そして最も高い知識階級の連中を引入れまして、何とか救國運動といふやうなものを組織したのでありますが、これに驚いて滿洲の政府は直ちに檢舉を始め、二十数人といふ有名な人を縛つたのでありますが、縛つて居るところの警察廳の役人——私の友人であります——日本でいへば検事總長といつた人に會つて聞いてみますと、「實に殘念である。かういふ立派な人々を縛らなければならぬやうになつて居るのは誰の責任であるか、日本人の責任ぢやないか。日本人が滿洲を本當に愛し、滿洲のために滿洲國民として考へ、滿洲國の官吏として考へ、滿洲國のために王道樂土を建設しようと思へば、熱河省のやうな邊鄙な所迄も王化を及ぼして、斯様な共産主義が起るやうなことにしないやうにせねばならぬ。然るに何んぞ圖らん。熱河の中に共産主義

義の運動が起り、滿洲國反對の運動が起るといふことは、これは滿洲國民のために、日本人の責任を痛感せざるを得ない。若し日本人が本當に蒙古であるとか、熱河であるとかといふ、滿洲國の邊境に對して公平無視なる王化を潤はせる運動を怠らずして居つたなら、かういふ事は起らなかつたのであらう。檢舉する自身自ら恥かしく思ふ」と、いつて居られたのであります。かういふことを申上げるとは、私共は非常に遺憾である、差控へなければならぬことであると思ひますが、私はあちらへ参つて率直に考へたことは、支那事變の解決は日本人の解決である。日本人自ら反省して自分の中に本當に支那人を愛し、支那人と提携して支那人を尊重する氣分があり、支那人の持つて居る四千年來の傳統に對する相當の理解を持つことが出来るならば、支那人としても決して日本人と共同して東亞の新秩序、或は協同體の建設に邁進することを厭ふものではない。現に蔣介石の幕下になつて居る人でも、徒らに日本を敵とするのぢやない。東洋人は東洋人同士で仲好くしたい。西洋の自由主義或は個人主義的な思想は壓迫せられ、この重壓の中に喘いで居るといふことは如何にも馬鹿々々しいことであるがといふことをよく知つて居る。併し、遺憾乍ら今の日本人では信用が出来ないといつて居るのであります。」(七月五日中外日報)

私は、この中田氏の説に對して、確かに一考しなければならぬものがあると思ふ。私も昭和の九年の秋、滿洲へ参りました。法主のお伴をして参つたのでございますが、昭和九年といふと大分前ですが、その時ですら、彼の地で活動して居る人々の状態を見聞して、甚だ私は不愉快を感じました。どうも滿洲を食ひ荒して金が出来たら日本に歸るといふ風で、滿洲の土になるといふ決心をしてやつて居る人は少くない。横暴を極めて利益を壟斷するといふのでは困るこの戦争の初め頃にも、滿洲は日本の生命線だといふことをやかましくいふたが、その當時にも、さういふ事を頻りに唱へられました。私はそれに對して、滿洲は日本の生命線だと君等はいふが、さうしてみると、滿洲のために盡すのが應て我が祖國のために盡すんでなからうか。日本の一番大切な生命線、これが護られたら日本は永久に發展する。この護りが碎けたら日本は危ない。生命線——さういふ大切な滿洲を喰ひ物にして自分の腹を肥やすといふのでは困る諸君は自分の利害以上に尊い信念を以て事に當らなくてはならぬ。それで無くて自分一人利益のみを考へて無道な事を爲して迷惑を起すやうな事があつては今度の事變に對して生命を捨てた人々に申譯ない。自分が肥ることを考へる前に國家を考へなくてはならぬ、と苦言をいつたことであつた。だから此中田氏の話を聞いて私は同感の念に堪へないのであります。

要するに、この聖戰の完遂といふことは、武力戰以外に尊い精神の發揚が非常に大切であります。私共が日常拜讀する『大無量壽經』の中に、

當に相敬愛して相憎嫉することなく、有無相通じて貪惜を得ることなく、言色常に和して相違戻することなかるべし。

といふ聖訓があります。私はこの聖訓を遵奉して各自が行動すれば、日支兩民族は衷心から手を握ることが出来るものであると信ずるのでございます。どうしても聖戰の完遂には、この宗教的の本當の温かい強い心が國民の間に湧上らなくてはならぬと私は思ふ。聖戰完遂の要素は武力戰の遂行、これが一つと、それから兩民族の融和といふことが一つ、この二つであると考へますが、武力戰に對しては何等私共は憂慮することはない。前線の將兵諸士の奮闘に對しましては感謝の他はありません。この上は私共は、兩民族の融和の實を擧げるために深甚の考慮を拂はなくてはならぬ。而もそれは今直ちに深く考へなければならぬのであります。それが私共同胞の胸の中に深く考へられることになり、如何にもさうだと覺悟をして事に當る時、はじめて聖戰完遂の大目的が達成されるのである、と私は信じます。さうしてみると、この聖戰は隣邦の戰場のみに限られたものでない。よく考へてみると、私共の心の中に横はつて居ります

利欲の妄念を打破することが一大急務でございます。それが拂拭されないと、この聖戦の有終の美を収めることは出来ない、と私は信じて疑はないのであります。茲に私共宗教的の立場に於て、眞宗教徒として聖戦の完遂をどう考へるかといふと、それはどうしても各自が滅私奉公以て本當の力をあらはさなくてはならぬが、その力をあらはすには、妄念煩惱の心の垢が念佛の教によつて、洗ひ去られなければ、これは到底花實を結ばぬと思ふ。斯様な信念の下に現在の世相を眺めると、右を眺めても左を眺めても、これでいふことは思へないのであります。名古屋の状態は一年も参らなかつたので、よくわかりませんが、病床にありましても京都の事情はよくわかりました。多くの人が寄つて來られまして、いろ／＼な話を聞かして呉れますが、私は京都の状態を眺めても満足出来ないのです。「君等は何かいふと滅私奉公といふがやつて居る事は決して己を滅して公に奉じて居りやせぬ。それは闇取引をしてども俺は生きて行かなくてはならぬ、といふやうなことを私かにいふて自ら恥かしいと思はぬ人が多い。それで君等はいゝのか」と私は申しますが、さういふ人が名古屋にあるかどうか知らんが、恐らく名古屋には無い、と私は斷言し得ない。こゝは私共、眞劍になつて叫ばなくてはならぬところであります。陛下は御心配なさつてある。これは明日いひたいが一言申します。近頃になつ

て米が足らぬといふので、外米で補ふ事になりましたが、これは逆も小言が多い。この間、私の所へ出入りする運轉手が、「先生、この頃は外米が八割も遣入りますので、腹は痛むし力はず、どうもやりきれません。先生の所は如何です」「私の所も外米を食べて居る」「腹は痛みませんか」「何ともないよ」「私の所は痛むので困ります」「困るなら、そのやうに勿體つけて、恩に被せて食はいでもいゝぢやないか」といふと變な顔をして居る。「外米を頂く時に、私共は衷心から感謝して居る。よう君考へてみよ。これが今から百年も前なら、これだけに米が足らぬ時に遭つたら、恐らく草の根や木の葉を食つた。餓えて死んだ人が道に横はるといふやうな事もあつた。昔の饑饉はさういふ風であつたが、聖代の有難さには、草を食はず、木の根を食はず、米を食ふことが出来る。而も吾々と平常に何等の關係の無いタイ國の人やラングーンの人や支那の人が、汗水を流して努力して作つた米を分けて呉れる。そのお蔭で吾々は草や木の芽を食はずに生きて居れるではないか、何故それに對して感謝の心が出ないんだ。君等は變な人間だなア、そんなに困るといふなら外米を辭退したらよからう。厭やなら食はんで死ね。生きて居りたければ感謝して食つたらいゝ」「先生、さういはれては何んともいへません」「いはなければいゝ。腹が痛むといふやうな心配は要らぬ。俺ア痛みやせん。外米の硬いくらゐはわか

てゐるから、三遍嚙むのを十遍、十遍嚙むを三十遍といふ風に、よく嚙んでお粥のやうにして食べたなら腹は痛みやせんよ。お茶漬にしてサラ／＼と食べたり、餓鬼のやうに急いで食べるか
らいかぬのだ。もつとゆつくり食ひなさい」かういひましたら、「先生、わかつた」といふ。そ
の次に會つた時に、「どうだ……」といつたら、「あれから、腹は痛みません」といふ。さう行
きたい。私はさういふ考へでございませぬ。私、これに就て實に恐懼の至りに堪へぬことがあり
ます。上御一人はじめ外米を召上るといふことを漏れ承はつて、私は以前から恐懼して居つた
のでございませぬ。

この間石川縣と富山縣へ行つた。石川縣も富山縣も米の國であります。如何なる場合でも外
米は食べませぬ。その代り七分搗きくらゐにして食べますが、それにすら小言が出て居りまし
たので、私は金澤でも富山でも叫んだ。白い米を食ひ乍ら七分搗がどうの、配給が少ないとい
ふやうな者には罰が當る。何んといふ勿體ないことをいふ。陛下が外米を召上る場合、砂を
嚙んでも吾々は黙つて行かなくてはならぬ。私はそこが臣民の本分だと思ひます。然るに、搗
き方がどうか配給がどうかといはれるのは、どういふ氣分でははれるか、私にはわからな
い。そんな氣分で居られるから、去年の米の穫れなかつた問題すらがわからない。みんな考へ

なければなりません。そんな氣分では居られるから、腹一ぱい食はなくては承知が出来な
いといふ風で、まるで餓鬼の親方である。腹一ぱい食はいでいゝ、戦争です。戦争をやつて居
る兵は、腹一ぱい食はずに……どころでない、一日も二日も食はずに戦かつて居る兵がある
ことを忘れてはならない。若い兵だけ苦勞させて、腹一ぱい食うて居る者が、あゝだかうだと
小言をいふ。そんな者に罰が當らずに誰に當る、私はそれがいひたい。二十代の兵があれだけ
苦勞をして居るのに、七十の親爺が小言いふては申譯がない。誰がいひ出したか、四十歳から
上は一日二食でいゝといふ。私はそれでいゝと思ふ。私は七十で一向に間に合はぬから、一食
にしなくては濟まぬと思つて居ります。若い者にこの戦をやつて貰はなくてはならぬから、そ
のくらゐの意氣の下に奮ひ起たなくては、この大事變の解決は付かぬのでございませぬ。吾々は
口に己を滅して公に奉ずると叫び來たつたのであります。滅私奉公は掛聲ではないのでござい
ませぬ。滅私奉公は空念佛ではない。本當に己を捨て、國家に盡すといふ、この氣分で行かな
ければ、この事變の完遂は出来なないといふことを、私は堅く信ずるものであり、願はくは同信の方
々と共に、この意氣に燃え立つて本當にこの聖業を完遂するために努力したい。私はその協
力が得たくて堪まりませぬから、病氣がまだ治りませぬに拘らず、やつて参りました、矢張りこ

れだけのことは申上げたいのでございます。これで動かうと思ひますと、自分の心を餘程ハツキリ叩き直し、焼直さなければこの力は出ません。ところが、その心を叩き直し、焼直すのが宗教でありますから、眞宗教徒と致しましては、念佛の教に對してひとつ認識を新たにし、潑刺たる元氣を以て苦難を乗切つて行かなくてはなりません。この道を説かなければならぬ吾々仲間の中でさへ、「これではやりきれぬ」といふやうな事をいふ者があつて、案外小言が多いので「道を説かなければならぬ者が、何をいふて居るのか」と私はいふんです。私は昔から外米を食べて居りますが、何んともありません。八割の外米は十割でもいい。草の根を食ふことを思つたら有難い。不足をいふたら罰が當つて腹が悪うなる、これだけは保證します。食べる時から胃を害するなどいふて居るから、薬でも毒になる。ちつとは皆が氣分の入替へをして行かなくてはならぬと思ふ。

話は餘談になりました。だから、初めからいづれ老人の繰言だと申しましたが、これほどいふたとて皆さんは肯かれぬことをよく知つて居る。どうせ割引のあることを知つて居りますけれども、割引をさゝぬやうに、明朝も二時間ほどに亘つて、念佛で行くんだといふことを、お話致しますから是非お集りを願ひたいのであります。

時局下の生活

昨晚に引續いて、「時局と信仰」といふ題の下にお話を致します。昨晚おいでにならない方もありますから、或は重複する點があるかと思ひますが、豫め御諒承を願つて置きます。

今日の時局に於きまして、私共の信じて居ります念佛の信仰が如何なるはたらきをするか、言換へれば念佛を信ずるといふことが、この大事變に對して本當に御國のためになるんだらうか、或は御國のためにならぬだらうか、これは一考しなければならぬ問題だと私は考へて居るのであります。ところが、私共はこれでなければならぬといふことを感じて居りますから、「時局と信仰」といふ、かういふ題の下に、私の考へを述べてみたいと思ふのであります。尤もこれは私——河崎顯了一個の考へでありまして、その河崎顯了の考へが皆さんと御一致が出来るかどうか、これは私は何人も出来るといふことはよう斷言をせぬのであります。各自皆それ（信ずる點がありますから、けれども、尠くとも今日、私が二十年來傳道界に立つて、こちら（信道會館）の會を始め、お馴染みを得て居ります方々の中には、私の意見に一致して、「それは、あなたがいふ通りだ。さういふ風に行かなければならぬ。」と奮ひ起つて下さる方が、各方面に

幾らもあるのでございます。さういふ方からは事ある毎に出て来て話をして呉れよ、君の意見をいへ、と催促されるといふ風で、また一方には、さうして病氣になつたら大切に、一日でも長生きして呉れなくては困る。もう諸方を巡るといふやうな事を廢めて、書齋に籠つて居つたらいいぢやないか。聞きたい時はこちらからお質ねに行くし、また質ねて話をするのがうるさければ要點だけ書いて呉れ、それだけでもいい。矢張り闇の夜には光があると脚下が明るうなる。さういふ點で以て、寢て居つて呉れて「イエス」「ノー」といふことだけいふて呉れたらいいから、さうして居つて呉れ、と迄熱心にいつて下さる方がある。決して自慢ぢやありませんが、そこ迄いふて下さると、私は何とかして生きながらへて共に國事が談してみたい、といふ氣分が湧いて止まない。私の交友の方の中にはそれほど迄互に國を憂ひて居る人が到る所にある。茲に私は日本の強い力があると深く感ずるのでございます。さうかと思ひますと一方に、なか／＼そんな風に國を憂ひて居らぬ人もある。甚だ僭越な申方ですが、私は病床に居りましても、聞きます話なり、また新聞などを讀んで世の中の動き方を見て居りますと、「これでいいのかな」といふやうな疑惑が幾らも出て來るんであります。さういふ方がいはれて居る話を聞いてみますと大抵、口には盡忠報國、國家一大事といはれますけれども、實際

は國も何もありやせぬので、それよりは自分の茶碗の方が心配です。「これでは飯が食へぬ」といつてみたり、「これでは店がもてぬ」といふてみたり、國が引ツくり返つても、店がもてなければ承知が出來ない。かう來るんです。もつとひどいになつたら、昨晚申しましたやうに、外米食べて腹が悪くなつたといふて、國家に對して不平を訴へる人がある。これは日本の國が乗るか反るかの大事變の中に居るのに、それより三度食ふ飯の方がもう一つ心配だ。かういふ人はいづれ餓鬼道から飛出して來たんでせう。人間の皮を被つて居る餓鬼だから、朝から晩迄茶碗と喧嘩をして居る、といふと、先生、それ迄いはれると耳が痛い、といふ。私共は、さういふ問題など頭に無い。この大事變に二十代の人があればウソとやつて呉れるのに、生命を捨て、御奉公して居るのに、四十、五十の働き盛り、六十、七十の圓熟した年齢であり乍ら、而も明治時代からの苦難を乗り越えて來た國家の進路を知り乍ら、いま國家が乗るか反るかの大事變に當面して居るのに、國の事など頭に無く、自分の店と自分の茶碗だけ考へて居るやうな者は、これは形の變つたみな蔣介石の一派、これだから國の前途が心配だといふ風に私は感ずる。斯様なことを申しますと、甚だ申過ぎる言葉であります、只今は私は遠慮する時ぢやないと思ふ。あれだけ陛下が宸襟を惱まし給うて、國家の事を憂慮し給うてゐるのに、自ら忠

良の臣民と稱する者が、さういふ事を念頭に置かず、たゞ足下だけ、我が店だけ、我が畑だけ我が田圃だけ見て居るといふのでは、これは相済まぬと私は考へますから、血の涙を振ふ迄に私は説き來たつて居る。中には「またか」といふ人がありますけれども、「それは、さうだ」といふて本當に共鳴して下さる方が到る所にありますので、そこに非常な勇氣を得まして話し來つて居る次第でございます。今回伺ひまして、また病が出ましたら伺ふことが出来ませんから、今回はこの事變を中心にして私の考へて居りますだけを、遠慮無くいはして貰ひたいといふことを、豫め願つたのでございます。で、昨夜は「時局と信仰」といふ題の中に「聖戰の完遂」といふ事に就て、約一時間二十五分に亘つてお話を致しましたが、今日只今からは甚だお暑い中に御迷惑ですが、二回に分けて少し長くお話を致しますから、どうか終り迄聞いて頂きたい。これから小見出しにしました「時局下の生活」といふことに就て申上げます。即ち目下の戦時體制下に暮すに就てどう考へたらいかといふこと、これをひとつ明確に申しまして、前席はそれで終りまして、第二席の最後の結びには、この際本當の忠良の臣民としての徳を發揮する生活は、何んといふても念佛の信仰がなければいかぬと私は思ふ。これは私の考へで、さうぢやないといふ人があれば、私は別に何んとも申しませんが、それを小見出しでは「生活と信仰」とい

ふ題で申してみたい。昨夜からお聞き願つた方には連絡があるわけですが、昨夜お聞き下さらなくとも、昨晚も今日も一項々々獨立してお話を致しますから、左様御諒承願ひたい。で、第二講の「時局下の生活」といふお話に移ります。

佛教の上で使ひます言葉に、「願行具足」といふことがある。願はネガヒ、行はオコナヒ、それが缺目無く具足するといふこと、これは眞宗教徒ではよく使ふ言葉です。今日迄眞宗の説教を平常よくお聞きの方には、願行具足といふことは御承知でありませうが、これから私のいふ話とは多少意味が異つて來る。多く皆さんが聞かれますのは、南無阿彌陀佛の講釋が出る時に「南無は願なり。阿彌陀佛は行なり」といふ風によく聞いて居られる。そこで十願十行が具足して居るから念佛は尊いんだ、といふやうな話が出るのでございます。ところが、その南無阿彌陀佛の講釋をするんぢやありません。私は今日の時局下の生活なり、また、私共が國民として眞の自分の責務を果すのに就ては、願行が具足しなければならぬといふことをこれからいひたい、凡そ何事で願心を仕遂げんとする時は、願と行とが具足しなければなりません。願といふのは、その事柄に對する願望であります。行といふのは、その願望を達するために致しますところの行ひをいふのであります。この二つが完全に一致したのが、これが具足であります。今

次の事變で申しますと、願はといふたら聖戦の完遂であります。これは如何なる難關に當面しても、それを打解して有終の美を收めなくてはならぬといふ、この大願です。聖戦に對してはこの大願を成就するためには、大なる行をしなければなりません……大なるところの務めをしなければなりません。それを行といふのであります。それでは、願は聖戦の完遂、行はといつたら一死報國だ。奮闘努力だ。これは掛聲ぢやありません。前線の將兵は生命を賭してやつて居りますから、これは聖戦完遂のための行であります。即ち前線の將兵諸士の奮闘であります。ところが、聖戦を完遂するには、前線の將兵諸士だけでは出来ません。これにはどうしても銃後の國民が動かなくてはならぬ。前線の將兵諸士は一死報國で動いて居ります。銃後の吾々は滅私奉公、と常に私を滅して公に奉ずるこの活動をしなくてはいかぬ。で、この兩者の行動が完全に遂行せられた時に、聖戦完遂の大願が達成されるのでございます。小學校の講義みたやうですが、これをハツキリして置かなくてはなりません。

私は、かうした見解の下に今次の事變の本質を眺めて居りますから、随つて私は、前線と銃後を二つに分けることを嫌ふのです。銃後の務めだ、前線だといふやうなことは、私は絶対に賛成せぬのです。そんなものぢやない。だから、私はいつもいふて居りますが、前線と銃後と

が一つにならなくてはならぬ。前線の楽しみは銃後の喜び、前線の苦難は銃後も同一に堪へる茲に活躍しなければならぬのであります。私はかうした見解を有して居りますから、前線の人々の行動に對しては滿腔の感謝を捧げます。事變の勃發以來滿三週年を経過しましたが、その跡を顧みますと、私はよくも斯くまで奮闘力闘をして下されたものであると思ひます。で、私はこの上に前線の將兵の方々に對して、かうもあつて欲しいといふ願ひは毛頭無いのでございます。實によく奮闘して下されたといふところの感謝よりほかに私は有たぬのであります。ところで、この前線の活動に對して、他の一面の銃後の國民の行動はどうだらうかといふと、遺憾乍らそれは、前線に伴うて居らないと思ふのであります。盡忠報國滅私奉公とはみな口に叫んで居られるが、それが各自の行ひの上にはあらはれて、日常生活の指造原理となつて居らぬやうに私は見受ける。尤もこの事に就ては、事變の當初より眞に事變の重大性を理解されまして、自分の生活の全分を捧げて國家のために盡して居らるゝ方は幾らもあるのであります。それは私も知つて居るのでありますけれども、これを國民全體の上から眺めますと、その數が甚だ少ないのでございます。これぢやいけない。だから、昨年來頻りに國民の總力戦、或は一億一心といふことが叫ばれて來つて居るのであります。私はそれでなくてはならぬと信する者

でありますから、只今の國內の情勢には私は満足致し兼ねますのであります。マア斯様な事を申しますと、何んだか私は参政者の位置に立つて國民を指導するやうな態度をとつて居るやうに聽取られるかも知れませんが、私は決して斯様な僭越な態度をとるんぢやありません。たゞ今次の事變は一身一家の大事を處理するやうな考へで以て御奉公申さなくては、この聖戰を完遂することは出来ないと思ひます。實は事變の勃發の當初に全國民は奮ひ起ちまして、それに對應しようといふところの各種の行動をするといふ風で、天を衝くやうな意氣があらはれて居つたんであります。勿論、その當初はそれがために生活の脅威を感ずるといふやうなことは餘り無かつたので、この事變の始まつた時は何人も安んじてその運動に従事することが出来て、何等生活に對しては苦難を訴へなかつたのでございます。ところで、事變の進展に伴ひまして、その影響が各方面にあらはれて來まして、殊に日常生活の上にそれが深甚の影響を及ぼすやうになりましたから、當初の意氣が銷沈しまして、戰時體制の生活に銃後として苦難を訴へ出したのでございます。私は病床に居り乍らよく聞いたんでございます。殊に昨年の冬から本年の春にかけて、政府がどん／＼やりだした資源の愛護、物資の配給、價格の統制等、これを嚴重に行

ひますので、さう押かけて來られると、今更のやうに皆が驚きを立てまして騒ぎ立てた。騒ぎ立てるだけぢやない、國策に違反して法網を潜る者すら生じ來つたのでございます。これは事實であります。私はさうした實情を見たり聞たりしまして、これでは事變の將來に對して容易ならぬ事態が生じはしないか、と心配を致しまして、私が平常交つて居ります人々に對してはシツカリしなくてはいけないよ、といふて深甚の考慮を促し來つて只今も居るのでございます。今は戰時體制の生活ですから、平常時の生活とは全然異ふのであります。あらゆる力を戰時の行動の方に振向けて行くのであるから、私共のこの日常生活は逼迫を告げるのは當然であります。それが戰時下の生活ぢやないか。私共はそれを忍び、それに耐へて御奉公しなければならぬ、と力強く人々に勧め來つて居る。尤も私はそれをやつて居るのであります。そこで、この戰時體制下のあらはれを見て居りますと、只今のところ一段、二段となつてあらはれたと思ひますが、實は私は一昨年暮から到る所で、聽て各自の臺所にこの戦争の大暴風雨が襲ふやうなことになるよ。食ふ物も食へぬやうになり、着る物も着れぬやうになる。それだけでなくは本當の戦争でない。豫めその覺悟をしなくてはならぬ。どうせ皆が勝手氣まゝをやらぬやうに切符制度になるよ、とズツといふて來たのでございます。これは私、昭和の二年

から三年に亘つてアメリカからヨーロッパを歩きました結果、殊にドイツの國の状態などを明らかに見、また聞かされたから、若し今度大事變が起つたら日本だつて、この中を行かんければ行けぬのや、といふことを痛切に感じたものですから、この事變が起きてから聽てこれが出るだらうといふことを、大抵想像して今日迄いふて来たのでございます。ところが、それは今年の春から第一段階が明らかに出て來まして、米なり、砂糖なり、マツチなり、これらが思ふやうに求めることが出來ぬやうになつて來まして、遂にそれが切符制度に迄なつたんであります。その他木炭も容易に手に這入らないのです。これが戦争ですよ。愚圖々々いつても仕様がなない。それをよく頭に入れて置かなくてはならぬ。戦争をして居る中に戦争の無いやうな時の暮しをしようと思ふから、それがいけない。まだ、私共の皺だらけの白髪首を呉れ、といふて呉れぬだけが有難い。御用とあればこれでも差出さなくてはならぬ、私はさう考へて居ります。ところが、いまの砂糖やマツチなどを買ふのに、私共、あのすがたを見て厭やになつて了ふ。なぜかといふと、砂糖が無くなるといふて、砂糖屋の前にみな行列をして、こんな時に買つて置かなくては損ぢやといふやうなことで、お互に遠慮會釋無く争つて買つて居る。餓鬼道まで行かずとも、餓鬼がこゝに見えるといふ風で、私共は始終、深い注意を拂つ

たんでございます。ところが結局、行列しても工合よくいかぬので、お前にやるだけのものは分配してやるから後へ退れ、といつてあの切符を出したわけ、切符を出して了ひますとどうなるかといふと、もう砂糖を買ひに行きやあせぬ。京都は六月の初めにこれをやりましたが、私共はいまのやうに砂糖を行列して買ひに行かぬ方ですから、切符を買ふたから差當り砂糖を私の家から買ひに行つた。それは六月一日の午後でしたが、砂糖屋のお内儀さんと主人が居つて「今日は朝から、皆さんがみえると思つて、夫婦と店の者と手を揃へて待つて居りますが、先生の家だけが嚴格においでになります。いつものやうに行列はせぬのです」とかういふんださうです。人間といふものはさういふものです。それに就ても私はしみじみ思ふたことがあります。私がズツと前に中學の教師をして居りました時分に、生徒を卒ひて修學旅行に出て行きます。宿屋に泊まりますと、宿屋によつては小さいお櫃に御飯を入れて女中が上品に持つて來る生徒が食べる所を見てゐますと、さういふ小さいお櫃に御飯を入れて持つて來ると、それはえらい目に遭ふ。こりやア飯が無くなるぞといふので、サア食ふの食ふのウンと食ひよる。後から炊いて行つても追つ付かぬほどえらい目に遭ふ。ところが、馴れた宿へ行きますと、堺邊の宿になりますと今度は、小さいお櫃でなしに、二、三人して抱へて來るやうな大きなお櫃にウ

ンと入れて、生徒の居ります所に「サア」と出す。すると、もうそれを見ただけでケロツとして一向食べやせぬ。面白いものです。話が外れますが、或時も生徒を引率して行きますと、堺で夕方に宿屋に着きましたら、いきなり薩摩薯の蒸したのを澤山に生徒の前に持つて来て、「何んぼなりとおあがり」といふて出したので、生徒は喜んで奪ひ合ふやうにして食べて了ひました。私は後で宿のお内儀に、「どこを歩いて、かういふ事はやつて呉れぬが、よく親切にして下さつた。金を使はして氣の毒をした」と、お禮を申しますと、お内儀さんが、「先生、それまでお禮いふて貰はんかつてよろしい。私の方は得をします。薯を食はれますと御飯は要りませんから……」成程、巧まい事やりをつた」といつて、私は腹を抱へて笑つたことがあります。それが丁度いまの砂糖やマツチを買ふのを見て居りますと、無くなるぞといふから、我れも彼れも子供も、お祖母、お祖父迄が杖をついて買ひに行つて、十錢宛の砂糖の袋を貰うて歸る。變な事をやるんですね。丁度、いまの小さいお櫃で飯を食ふやうなものです。ところが、「砂糖は幾らでもあるよ、その代り切符で公平に分ける」といふと、一向買ひに來ない。今度は砂糖が剩るくらゐださうです。人間は肚の据ゑやうで行ける。自分の肚をシツカリ据ゑることを後にして、眼の前に陳列してある物だけ眺めてかゝると、有るとか無いとかいつて騒いで居る。肚の

無い人間は頭だけ發達して福助のやうなもので、考へるだけはいゝが、よく歩けない。肚が無いからドツシリしない。起上り小法師のやうに頭が小さくて腹がシツカリして居ると、轉けても／＼直ぐ起る。あの力が無いと本當でない。私はどこ迄もこれを呼びかけて行きたいと思ふのでございます。ところが、それが無いから砂糖、マツチ、米といふやうな問題だけに對しても、あゝだ、かうだとやかましく騒ぎ立てることになる。私はこの苦情を聞きます毎に、こんな事をいはれては困るがなア、何んで事變下の生活がわからぬだらう。わからぬにも程があると演壇でも叫んだのでございます。叫びますと聞いて呉れます人の中には、さういふ不様なすがたをせんと、泰然として居る人が幾らも出來たのでございます。で、いはなければならぬといふことを私は感ずるのでございます。

ところが、人々は、「それはさうぢや」と理窟はわかる。「戦争だから無いのは當然だ」ともいふが、さて實行することになると小言が自然出る。尤もだとは思ふが、愈々それをやらうとすると小言が出ます。人間は甚だ力の弱いものです。そこに自分の欲望の方に押されて理性の力が缺けるんです。實はこれは、力が弱いだけではない。事變の脅威が正しく、我が身の上に迫つて來て居らぬからだと思ひます。若し敵の飛行機が飛んで來て頭の上から爆弾の一つ二つも落

したとしたら、サア砂糖買の行列などはして居れぬでせう。不足も小言もあつたものでない、マア命カラ／＼走り廻るだらうと思ふが、弾が當らぬから、爆弾が來ぬから香氣にワイ／＼といふて居るやうな有様を平氣でして居るのでないか。ところで、事變下に於けるこの不満の聲は、非常な影響を前線の將兵諸士に及ぼすのです。だから、これは大いに注意しなければなりません。私はそれを憂慮するのであります。前内閣で厚生大臣をしてゐた吉田さんが、現地の視察から歸られた時の話に、かういふ事をいつて居られます。

「現地に行つて出生將兵各位の、非常な御厚意により、第一線陣地まで出かけて、こちらの使命を全うすることが出来ました。第一に内地の物資不足といふ問題が、該大に前線に喧傳されてゐるのに驚かされた。それが山間の第一線に行けば行くほど誇張されてゐる。さういふ風に唱へられる元は日本人だ。新聞や雑誌や旅行者の傳へることが、奥に行くほど雪達摩を轉がすやうに大きくなつて行くのだ。兵隊さんは口ではいいはないけれども、心の中では心配してゐるのでないかと思ふ。日本はこれだけの大戦争をし乍ら、三度々々飯を食べてゐる。それを愚圖々々いふのは罰當りだ。食ふだけのものは持つてゐる。どうか安心して下さい、といふことをラヂオでもいふたし、兵隊さん達と會ふ度に話をした。ラヂ

オは三ヶ所だけしか放送しなかつたが、第一線に行くと、有難い話を聞いたと喜んで呉れた。東亞建設といふ大理想に向つて邁進しつゝある日本國民が、僅かのことで不平を洩らすなどは、どんな影響を呼起すかといふことを、十分國民全般に考へねばならぬことだ。」

(五月二日、大阪毎日新聞)

とハッキリ述べて居られる。内地で冬から春にかけて、マツチだとか砂糖だとかいふ問題でワイ／＼騒いだのが、第一線に非常な悪い影響を及ぼして居るといふわけ。第一線を考へないで私の臺所が困るといひました。かういふ方は國より自分の家の臺所が大切な人です。臺所はどこやといふたら、三度の飯を食ふのと、暑さと寒さだけに困つて居る。天上界以上の極樂の暮しをこゝでしようと思ふから、いろ／＼と不足小言が出る。ちつとそんな時には下を向いて『横川法語』でも思ひだしたらいい。どれだけ苦勞だ難儀だ思ふやうにならぬといつても、地獄、餓鬼、畜生よりはまし、先づ三惡道をはなれて人間に生れたといふことが大きな歡びであらねばならぬ、と吾々佛教徒は常に力強く叫び來つて居るのでございます。今はそれで動かなければならぬ時機でございますから、よく考へて貰ひたい。何しろ銃後に於けるお互の一舉一動が善惡共に大影響を及ぼすといふことを、御承知ではありませうけれども、尙この上ともお考へ

下さるやうに切にお願ひするのでございます。特に事變下に於ける吾々は一言一行を、大いに慎しまなくてはならぬと思ふのであります。

ところで、この戦時體制下の生活のすがたは、今月に這入りましてから、第二段階に這入りました。諸君も既に御承知の通り、今度出ました奢侈品等の製造販賣規則が、出ますなりその日から實行されましたが、これでございます。これは前の第一段階のものよりズツと嚴格なものになつてゐまして、お互の日常生活はいろ／＼な不便を忍ばねばならぬことになつて來ます。随つて、それらの製造に従事する當業者の方々は、非常な苦難に當面されて居ると思ふ。現に私は京都に居りますが、私共の交はつて居る友人の中にも、殆ど店を畳む所まで行つて居る。さういふ人に會ひますと、「先生、どうしよう」といふことですが、「戦だ、店くらゐ問題ぢやない。生命を捧げて戦かつて居る兵隊さんの話を何んと聞いて居る。店の事業が行當つたくらいで、更に轉回する力が無いやうでは困る。念佛は無碍の一道だ。ハツキリ轉回する道を考へなさい」と私は激勵する。戦時下の國民生活刷新の實を擧げたいからこれをやるわけで、今のまゝではいかぬ。段々とこれは續いて出て來ませうが、いふても／＼背かぬから、かう行くだと法律の力でハツキリしてはうといふのが今度のやり方なんで、もうカフェー、バー、喫茶店

等の營業時間はズツと短縮して、宴會でも今迄のやうにグラ／＼した長い宴會は出來ません。この間も京都の南禪寺の瓢亭で、私の同心會の諸氏と共に朝食を致しましたが、今度の禁令で朝食の時間は朝の七時半に始めて八時半に終る。一時間だけと聞いて居つたんですが、成程七時半にちゃんと行きましたらお膳が一遍に出た。いつも終ひにお粥が出るのが初めにお粥も出るといふ風で、寄つた者はサイダーもビールも酒も飲む暇は無い。愚圖々々して居ると、八時半が來たら遠慮はありません。トットとお膳を持つて行つて了ふ。私は愚圖々々してゐて食ひ残しました。「ハツキリ行つたね」とお内儀にいふと、「ハツキリやらな、こつちが罰金を食ひます」といふてゐました。さういふやうな制限があります。これから諸君のなかには困る方があるでせう。梯子酒の連中は無論締出し、料理屋で自動車を呼んでも來て呉れぬ。來たら自動車が罰金を受ける、さういふ風にこれから行く。第一線のすがたを茲にあはさうといふのです。さうして、いまのカフェー、バー、喫茶店等の營業時間の短縮、待合、料理屋の普請禁止、自動車の使用制限、料理店の贅澤食事禁止、裝飾品及び高級品の禁止、ダイヤモンドや金を使用した物、或は高い織物の帯だ、或は繪羽の着物だ、これは着られぬことになりました。何故かといふと、第一線には繪羽の陣羽織は着て歩いて居らぬ。昔は陣羽織を着たものですが、今日

の戦争は昔とやり方が異つて居るし、軍人は軍服をみんな着て居りますから、第一線の將校が昔のやうに陣羽織を着てゐては、甚だ釣合ひが取れません。で、兎に角あゝいふものは贅澤品として禁止したのであります。さういふ風に行きます。これが本當の戦争のすがたであります。それが、それなら政府はダイヤモンドの指環を嵌めたり、繪羽の羽織を着た者があつたならば監獄に入れるかといふと、これは今のところまだやりません。もつと後にやるかも知れません。その代り贅澤な物を身に着けて居りますと、眞に國を憂ふる者のためにひどい目に遭ひますよ。御参考迄に申して置きますが、現に今月の九日の夕であります。私、大阪の修養會で話をして居りました。集まられました諸君は相當地位ある方々で、その夫人方もみな寄つて來られましたから、その夫人方に、あなたはこれから街に出られますのに、衣服といひ持物といひ、頭飾りといひ、すべての上に於て氣を付けないと、飛んでもないところの侮辱を受けますから、豫め御注意を申上げて置きます、國民は互に自肅自戒するといふ運動が盛んになる。それで餘程氣を付けないではならぬ。かういふ際にこそ、本當の宗教生活をしなくてはならぬ、といふやうな話をして控席へ歸りましたら、或方が來られました、先生、よい注意をして下すつた。實は既に昨晚あつたんですよ。それは阪急のデパートで八日の日であります。或婦人が洋装をし

て頭は例のパーマメントをやつて、いろ／＼持物を持つて華やかな様子で店に立つた。それを見付けて一人の男の人が「若し／＼」と呼んだ。「何んです」といつてその女の人が振向く。「あなた、その着物で、その頭でそれでいゝすか。その持物でそれでいゝですか」と詰問せられて「私のお金で、私が買うたものです。あなた方から干渉を受ける必要はありません」と婦人はキツパリいふた。「さうか、それならひとつ私の意見をいほう」とその方が第一線の苦勞の體驗に基いてグ／＼いふた。「この國家大事變の時に、そんな浮れた姿をしてゐていいか。あなたも教育を受けた人間ぢやないか……」マアその婦人は穴があつたら這入りたいが穴は無し、收まりが付かなくなつたさうですと話された。これは大阪だけにある事でない、この名古屋にも出ますよ。いま戦をして居る中に於て、浮れ飄箏のやうな恰好をしてブラ／＼して居る者や、餘り派手な姿をして居る者は、癪にさはるから黙つて見て居らぬ。で、これは各自が考へなくてはなりません。金澤に参りましたら、さういふ者にいふて聞かす團體が出來て居ります。これから街にそれが動くさうで、それがどの程度に動くかわかりませんが、兎に角、戦時下の生活はさういふ風に段々と深刻になつて來る。あの前線の勞苦を偲んで銃後國民はもつとハツキリせよ、と所謂滅私奉公の大運動が始まるわけです。私は、そこ迄いはなくては皆が氣が付かぬ

から已むを得ぬと思ひますが、願はくは、このやうな一々禁令制限を出して貰はなくは、贅澤が廢められぬといふは、何んといふルーズな國民になつたらう、と洵に寒心に堪へません。政府がいつて呉れなくとも、自分の家に火が燃えついたと思つたらハッキリ出来る。どうしてかういふやうな禁止令が出たかといふことに就ては、藤原前商工大臣の談話が新聞に出ましたから、皆さんも御覽になつたでせう。

「我が國の現状から見ても、消費規制の強化が緊要なることはいふ迄もない。本規則の制定も寧ろ遅かつたと思ふからゐである。この規則の狙つてゐる効果はいろ／＼あるが、戦時經濟上の大切な資財や動力、勞力などが戦時に不急不要なる物品や奢侈品の製造販賣に充てられる事を止めて、これを戦時國民生活上、眞に必要な物品の製賣に振向けることがその第一である。例へば現在の状況では戦時國民生活に必要な物品からざる物品に就ては、大體、公定價格で抑へて居るが不急不要、奢侈贅澤品は公定價格で抑へてない物が多いので、自然、業者はかういふ物を造りたがる傾向がある。その他現在では購買力が奢侈品贅澤品などの購買に向けられてゐるが、これを抑へて剩つた購買力を貯蓄や公債消化に振向けしめやうといふ効果を狙つてゐる。

このやうな立場から見れば今回の指定した物品の範圍は少々不徹底であり、またこれ以上賣つたら奢侈品と見るといふ意味の、一定限度の價格ももう少し高過ぎるといふ感じがあらう。實は私自身もさう思つてゐる。併し一氣に急激な變化を與へることは、業界に與へる影響も大きく無理な點もあるから漸進的に行きたい。即ち引續き第二次、第三次と物品の指定を行なつて不急不要品、奢侈贅澤品として製造販賣を禁止する物品の範圍も増して行き、また一定の限度、價格も漸次引下げて行く積りである。

規格外品の禁止は當然のことで、政府が折角公定價格を定めても、狡猾業者は規格外の物を造つて公定價格を連れて行くといふのでは、公定價格制度が何もならないからである。但、この規格外禁製品には先づ政府に於て適當な規格を定めて置く必要があるから、これを併行して規格外品の販賣を禁止する物品を具體的に、漸次指定して行く方針である。特に最後に一言して置きたいことは、今回の奢侈品などの製造販賣制限は、國民の戦時生活刷新を計る第一段の施設であることである。(七月六日、大阪朝日新聞)

藤原さんはかういふて居られます。これは私共としても當然、さう行かなければならぬと考へるのでございますけれども、只今の七・七禁令ではまだ程度が高過ぎるから、もつと／＼低く

せねばならぬといふ聲が出て居ります。誤りがあるか知らんが、傳へ聞く所によりますと、只今のは月収六百圓の生活限度を標準にして定めたものださうで、月収六百圓といふやうな人は少ないから、月収三百圓限度くらゐを標準にした方がもつとハッキリするのでないかと云ふてゐる人がある。いづれそこら迄出て来るだらうと思ふ。今の程度では濟まぬ世界が聽て來るといふことを、今から覺悟して居らなくてはならぬでせう。私の最も親しくして居る友人の中に貴金屬屋がある。名前はちよつ避けませんが、戦争が始まりまするなり私はその人に注意して、「君も今から商賣を變へて行きなさいよ。戦争はダイヤモンドや、金や、ルビーでは出來ぬ。戦さは鐵と鉛よ。もうかうなれば、くだらぬ所に費ふやうな金は日本に無い」といふて置いたところが、七月七日に禁令が出たので、私は真ぐに手紙を書いて、「たうとう自分の云ふたことが中つて氣の毒だが、何事も國家への御奉公だ。この際、國策違反をしたりして、祖先以來の名譽を毀損してはならぬから、深く注意をなさい」と申送つたのであります。

實は私は、かういふ點は、かうも考へて居るのであります。私の頭を最も刺戟した言葉は、これは皆さんも御承知でせうが、七月六日に今も陸軍次官である阿南中將が、七月七日の事變記念日に對する感想を述べられた其感想談を読んだ私は一夜眠れぬほどの、深い感激に浸つた

それを讀んでみませう。

「事變が今日に至つても未だ解決しないのは、第三國の援助による抗日分子の策動と、我が國が占領した地域を侵略しないためである。この道義的態度をよいことにして、蔣介石が抗戦を續けてゐるのが今の姿である。この際事變を解決する焦眉の要點は、國內體制の強化だといはざるを得ない。政治體制の強化に就ては、わしは軍人だから發言を避ける。だが、かういふことは確信を有つていへる。即ち幾ら政治體制の強化をやつても、今の有様では残念乍ら駄目だといふことだ。三周年に當り國民よ、日本精神に還れ、日本道徳に還れとわしは眞剣に叫びたい。一旦緩急あれば義勇公に奉ずると誓つてゐ乍ら、國民は果してこれを實行してゐませうか。私は實行してゐないものが銃後に澤山存在すると斷言する。實際、戰場に於ける日本人は忠勇無比である。一年間前線の指揮をとらせて頂いた私は、たゞ感泣あるのみであつた。

ところが、國內に於てはどうでせう。米が必要だといふのに米を出さないものがある。闇取引は公然の秘密である。金を持つてゐる人間は遊蕩濫費する。爲政者のちつとして過失も悪口をいふ。少しでも成功しかゝつたらそれを誣る。これはすべて自由主義から生れ

た利己觀念の罪惡だ。即ち義勇公に奉ずるのは戰場ばかりで實行することではない。國內に於てもその分を盡すに勇敢であれといふのだ。

次に戦線に於ける將兵の言葉を聞いて下さい。彼等將兵は曰く、「吾々は戦線で殉國の精神に燃えてゐるのに、銃後は緊張を缺いてゐる。甚だ面白くない」と、その時は、「銃後の國民が派手な着物を着て暢氣に銀ブラの出来るのも、諸君等第一線の將兵の勞苦のお蔭である。即ち光榮ある困難だと思へば、苦勞の仕甲斐があるぢやないか。暢氣に銀ブラがやれないやうなら、日本もおしまひだ」といつて慰めたのだ。だが、闇取引に至つては仕甲斐のある苦勞とは思へない。

最後に繰返して叫びたいことは、三周年を期として國內體制を強化することだ。諸外國も日本の武力と底知れぬ我が經濟力には吃驚してゐる。この際、鐵石の如き國內團結さへ出来たら、日本人の力を完全に發揮し得るのだと信ずる。(七月五日、大阪毎日新聞)

私は、この感想談に同感するのでございます。殊に中將が現地將兵を慰めて、「銃後の國民が派手な着物を着て暢氣に銀ブラの出来るのも、諸君第一線の將兵の勞苦のお蔭である。即ち光榮ある困難だと思へば、苦勞の仕甲斐があるぢやないか。暢氣に銀ブラがやれないやうなら、

日本もおしまひだ」といはれたこの言葉は、これは私は表面にあらはれたまゝには読み流すことは出来ないでございます。その言葉に含まれてあるところの眞實の意味を汲み取らなければならぬと思ふ。古人は「眼光紙背に徹す」といふて居りますが、それではなくてはこの感想談は本當に了解が出来ない。また、藤原前商相が、「今回の奢侈品等の製造販賣制限は、國民の戦時生活刷新を計る第一段の施設である」といはれたが、これも亦私共銃後の國民としまして、深く注意しなくてはならぬ重要な言葉であると思ふのでございます。私は屢々申しました今次の事變が一年や二年で終るなら、銃後の生活に就て彼はいふ必要はありませんが、何んといふたとて長い歳月を要します爲めに、前線の將兵諸士が交代して内地へ還つて來られる。前線で困苦缺乏に耐へあらゆる艱難をして、また、立派な武勳をあらはして歸還されたそれらの勇士が、銃後のお互がどこに戦争があるかといふやうな顔をして、歡樂に浸つたり、奢侈贅澤な生活をして居るのを眺めたら、決してよい気分はしない。その不満な気分が各方面にあらはれて参りますなら、これは由々しき大問題になると私は思ふのでございます。それが前線に響いたら前線と銃後が背中合せになります。前線は苦勞、銀後は逸樂、これでは國が危ない。第三國の兵より、アメリカの軍艦より、この一つの背中合せの方がもつと怖ろしい。一億一心に

なれない。私はそれを案じます。阿南中將が前線の將兵は、「吾々は戦線で殉國の精神に燃えてゐるのに、銃後は緊張を缺いてゐる。甚だ面白くない」といつてゐるといはれた。中將だつてそれはいひたからう。「さうだ」といひたからうけれども、軍の中樞にある中將がそんな事をいふたら、前線の將兵の不滿が一層昂まつて来る。だから、肚を抑へて血の涙を呑んでからに、「銃後の國民が派手な着物を着て暢氣に銀ブラの出来るのも、諸君等第一線の將兵の勞苦のお蔭である。即ち光榮ある困難だと思へば、苦勞の仕甲斐があるぢやないか……」洵に子供に對する親の心持をあらはしてゐるといふか、情あり涙ある言葉を以て慰めてゐられる。併し、その眞意を吾々は汲取らなくてはなりません。實はかうした事は何人もよく理解して居り乍ら、それに注意しないのはなぜかといふと、今迄泰平の世界にあつて自由な生活をして來て、その自由主義が除き去られぬために、事變の重大なることは承知して居り乍ら、而も不注意と不謹慎な行動をして、それがよろしくないといふことに氣が付かぬのだと私は考へます。實は只今申しましたやうな、奢侈品の問題だけでなく、自由經濟から統制經濟に移つた時は、なか／＼やかましい議論があつた。今でもそれを聞くのであります。事變下では統制經濟でなくてはならぬといふ事を、皆よく承知はして居りますが、併し乍ら、自分の事業なり商賣の上に急激な

變化を及ぼしますために不滿を訴へるといふ風で、因習の力は大きい。私は統制經濟に移つた時も、實業家の多くの方々によく申しました。事變だから自由經濟では行けぬのだ。この大事變に當而した以上、すべてを統制して一糸紊れぬ行動を全國民がとらなければならぬのだ。戰場を御覽になつたら、個々の兵隊が勝手な行動をとりません。軍の統率力で進退を決して居るんぢやありませんか。あれが統制なんで、統制が亂れたら戦争は出来ません。實業實の諸君もこの點を考へたら、統制經濟に不足を訴へることは私は出来なかつたと思ふのであります。誰の眼から眺めてみても、今日の世界は自由主義と全體主義との二大潮流に分れて居ります。それは經濟界にも大影響を及ぼして、自由經濟と統制經濟、この二つの傾向があらはれて居ります。が、私は經濟界の事には専門の知識が無いから、その正否に就て批判する資格は無い。併し、世界の大事勢の動きなり、また、我が國の現状を觀察する時、私のやうな素人でも、それに對して意見を述べる事が出来る。而もその述べる意見は決して盲の垣覗きではないと私は信じて居る。劫つて傍目八目おかめでその方がよくわかると思ふ。これに就て私はかう思つて居ります。茲に一つの大きな森林がある。その森林は天惠の雨露に浴して一草一木に至る迄、思ひのまゝに繁茂して居り、四季折々の花開き實を結んで居る。それに對して何等の手入れを行はず、

いづれも思ひのまゝに成育して居る森林である。蔦は蔦、草は草、木は木、灌木は灌木、喬木は喬木として思ふやうに育つて居る。これは自由です。ところが、この森林を理想的の森林に仕直さうとする時は、原始的のまゝにして置けません。そこで下草を刈つたり、枝を拂つたりする。拂はれる枝や刈られる下草は甚だ迷惑であるけれども、理想的な森林にするためには餘儀ない。茲に森林全體のためといふ、矢張り全體主義が動いて來ると私は思ふ。で、私はこの事例を以て國家の事を考慮する。國家が無事泰平の時なら、自由主義の體制が許される。尤も國法は遵守しなければならぬ。併し、一朝事あつて舉國一致してその事に當らなければならぬ時は、それは許されぬ。枝を拂ひ草を刈るが如き行動が始まります。各自はそれを忍び、それに耐へて國運隆昌のために己を捨て、御奉公せねばならぬので、茲に自由主義より全體主義への轉換をしなければならぬといふことになる。それが舉國一致であり、一億一心であり、國民總力戦であると私は信じて居る。私は佛教徒であります。大聖釋尊は、國に事がある時は我が身を捨て、國のために盡せ、と教へて居られるのであります。私は佛教を信ずるんです。佛教を信ずるんだから、釋尊の一言一句を私は遵奉するんであります。國家一大事の時は我が家を我が身を捨て、國家に盡せ、といはれましたから、今日の如き非常時局に際しましては、殊に

この教を頂いて己を捨て、御奉公申さなければならぬ、といふ念願に私は燃えて已みません。國家の大事變はひとり我が國だけではありません。諸君も御承知の通りに歐洲の天地は大動亂をして居ります。それ、國を賭けて眞劍に戦うて居ります。私はその情勢を新聞などで精讀して考へさせられることが幾らもある。茲に私は、ドイツ國民の眞劍味に就ては深甚の考慮を促して居ります。これはいろいろいひたいことがあります、時間の關係上聽ての機會に譲りますが、前ドイツ駐在武官の富田中佐の感想談に、

「ドイツの物資統制は徹底してゐる。國策違反殊に闇取引の如きは死刑、燈火管制に明滅を忘れた者は、五十日乃至百日の禁錮に處せられるが、國民はこの徹底した統制に満足して、勝利を得るまで徹底的にやるといつて居る。」(三月十五日、讀賣新聞)

かういふ氣分でドイツ國民は動いて居る。こゝに行つたら日本國民は、ドイツ國民の前に合す顔が無い人が幾らもあるでせう。それだつたら盡忠報國とか滅私奉公などいはん方がいゝ、盡忠報國滅私奉公が顔をしかめる。吾々は本當に眞劍にこれを叫ばなければなりません。また注意を促がさなくてはならぬ時であると考へるのでございます。

只今商工大臣になつた小林さんは、イタリイからの歸りにドイツを見て來た感想を語つて、

「ドイツで感心した事はいろいろあるが、日本で大いに學ばねばならぬのは、銃後の緊張振りだよ。ドイツのどこを歩いてても白粉、口紅ひとつつけた婦人に會つたことが無かつた僕の帯在中、ベルリンのダンスホールは一齊に禁止された。なぜかと聞いてみると、出征軍人の遺家族が娯樂のために出入するので、このまゝ放置すれば、憂慮すべき事態が起ることを懼れての處置だつた。ダンスは歐洲では生活の一部といつてもいゝくらの娯樂なのだが、危険性を多少とも認めると斷乎として禁止するなど、なか／＼偉いと思ふ。」

(七月十六日、大阪毎日新聞)

といふて居られます。私はこの緊張があつてこそ、ドイツがあつて強いと思ふ。幾ら精銳な武器があつても、これを使ふ魂が鈍つてゐたら駄目であります。國民全體に眞剣な氣分がある。所謂、銃後と前線とが渾無として一體となつて進んで行く所に、今日のドイツが造り上げられたのでありませう。私は徒らにドイツを謳歌する者ぢやありませんが、他山の石をもつて我が璞^たを磨け、といふ言葉があるので、これをよい鏡にして、もつと吾々は自肅^た自戒しなければならぬといふことを申上げるのでございます。

私は昨夜以來、「時局と信仰」といふ題下に、私の所信を率直に申述べて、略その要旨を申盡

したのであります。何んと申しましても今日は、振古未曾有の大國難を打開して國運の隆昌を圖らなければならぬ秋であります。これは非常な苦勞であります。而もこの苦勞は前途暗黒ぢやない、光明が輝いて居ります。大理想が完成された、所謂、神武天皇の八紘一宇の大御心が近くは東亞の天地を光被し、延ひては世界にまで擴がつて行かうといふところの、大なる機運に際會して居るのであります。随つて私共に苦勞の仕甲斐がある。努力の仕甲斐があるわけですから、今後如何なる苦難が生じ來つてもそれに堪へ、それを忍んで邁進しなければならぬ私共お互の今日の生活は随分厄介であります。窮窟であります。重要な食物である米などに對しても、嚴格なる節米をしなければならぬといふ風で、厄介といへば厄介ですが、併し、これを歐洲諸國の現狀に較べましたら、我が國の現狀に對して不足小言をいふては罰が當ります。イギリスなどの有様を新聞で見ますと、ドイツはまだイギリス本土に上陸はしません。が、いつかやつて來るといふので、イギリスの小さい子供は危なくて國內に置いて置けない。それで船に乗せてカナダからオーストラリアまで送らうといふことになつて居る。引放されなその子供の親の心はどうだらうと思ふ。國を擧げてみんな死んで了つたら跡を相續する者が無くなるので、子供だけは安全地帯に移さうといふわけで、そこまで眞剣にやつて居るといふこ

とを吾々は考へなくてはなりません。これに較べると我が國の如きは、一人として逃げることも要らない。戦線で傷ついた將兵は還つて、白衣の勇士として安らかに療養することが出来るといふやうな尊い世界であります。陛下の御稜威の下に吾々は有難い生活をさせて頂いてゐるのであります。然るに、「榮耀に餅の皮を剝く」といふ言葉があるやうに、馴れて來ると手でする事も足でするやうになる。この有難い事を忘れて、茶碗とお箸の事ばかりやかましくいつて、神經衰弱になるやうでは、ちつと男として意氣地の無い話だ、申譯の無い話だ、かういひたい。この點に就ては深き反省を私は致すものでありまして、だから願はくは、私の意見に全部が賛成をして下され、ば有難いが、たとひ賛成をして下されなくとも私は何んともいはぬ。私一人でも佛の前にも神の前にも慚ぢないところの、眞の忠良の臣民として生命を國家に捧げたいと思ふ念願に燃えて已まない。故に、事變下の生活に對して私の感じて居ります所を、率直に申述べまして諸君の御考慮を仰いだ次第で、尙この事變下の生活をするに就ては、何んとしても念佛を要するといふことを、次にもう一席お話致したいと思ひますが、十分間だけ休憩を致します。

生活と信仰

只今、大事變下の生活はかういふすがたで來るんだといふこと。その中を吾々はかう通つて行かなければならぬといふことを、最も率直に私の感じた事だけを申述べましたが、これに共鳴をして頂けば非常に有難い。併し、皆それ／＼考へがあるんですから、一概にかう行つて頂きたいとは思はないが、今日のやうな時には遠慮して居る時でないので、皆が眞剣に意見を述べて、さうしてそこに、如何にしてこの中を突破するかといふ力を出さなくてはならぬ。私にはかういふ風に行かうといふので。この私の考へを私の親しくして居る人には、これを勧めて行かうとしますのでございます。

昨晚も申しましたやうに、本當にこの聖戦を完遂しようとしたら、どうしたとて國民全體が起ち上がつて眞剣にならなくてはならぬ。支那事變の解決は日本人の妄念欲望の解決をしなければ出來ぬといふことは、當局でもドン／＼いふて居るのでありますが、私もさう考へて居るので、昨晚も申しましたが、聖戦の完遂、事變下の生活をするに就ては、宗數の信念の上に立たなければならぬといふことを、小見出では「生活と信仰」といふ題の下に、これから説いて行

かうと思ひます。

私は、聖戦の完遂といひ、また、事變下の生活といひ、その目的を達するためには各自の心の中に確固たる宗教的信念がなくては、これは出来ないと思へて居りますが、中には、宗教的信念など僕は必要無いといふ人があります。現に私はさうした議論を聞いたことがある。また、今も聞かされますけれども、私はそれに對して別に反駁を加へません。今は議論をして居る時ではない。人には自分々の意見があるから仕方がないけれども、私自身としては、宗教的信念がなければ本當の滅私奉公は出来ないといふことを確信するものであります。滅私奉公盡忠報國は叫ばれて居りますけれども、宣傳倒れになつて了つて魂が這入らない。滅私奉公の本當の魂は、宗教的の教養がないと出て來ないと私は信ずるのである。そこで私は「生活と信仰」といふ題を出しましたが、さて、生活と信仰といへば、これは何んでもないが、それならその信仰は何を信ずる信仰だ。といふことになりますと、それはいろ／＼の信仰があります。佛教の信仰もあり、基督教の信仰もある。或は天理教とか金光教とかいふやうな教派神道では、教派神道の信仰がありますが、私が茲に信仰といひますのは、佛教の中でも浄土眞宗の信仰をいふのであります。私は浄土眞宗の信徒でありますから、それ以外の宗教に對する信仰も無け

れば、また、知識も無いんですから、信仰を語れといはれたら自分の信ずる信仰よりいひ得ないので、この際私が信仰といふのは、浄土眞宗の信仰でございます。私共、浄土眞宗の教徒は『大無量壽經』の教を信仰して、この人生を正しく生活して、來世に彌陀同體のさとりを開かんとするのでございます。この信仰が今次の事變に對してどう關係をして居るか、これが説きたいのが只今からの話であります。前に申しましたやうに、事變の第二周年を迎へて、昨年七月七日には、「時局と信念」といふ題で、その事を話したこともあります。こちらへ参りましても、それを話した筈でございます。随つてこれから申述べますことは、多少昨年のお話に觸れる點もありますが、今回は昨年のお話の中に申残した點がございますから、さういふ點を拾ひ上げて話して、昨年のお話と今年のお話とこれをつにしたい。今日茲にお集まりの皆さん方の中には、浄土眞宗の信者方が多数ございますやうに私はお見受け申すのである。すると、私が只今のやうな、この浄土眞宗の信仰などいふことをいひますと、今さら眞宗信仰の講釋なんかせいでもいゝぢやないか、そんな事をこの暑い時は君から聞かなくともわかつて居る、といふ方があるかも知れん。併し、ものは見方によりましていろ／＼變つて参ります。今度の戦争でやかましくなりましたが、あの支那の廬山といふ山は、幾多の連峰から成立つて居りますため

に、眺める所によつてその形が變る。だから、古來から、「廬山眺むる處に依つて巒と成り峰と成る」といふ言葉があります。巒といふのは上の圓い嶺であります。峰といへば上に尖つて居る嶺である。見やうによつて圓い嶺とも見え、或は尖つた槍のやうにも見える所があるといふ風で、眺める所で異ふ。眞宗もこれと同じで、見方によつては、たゞ往生成佛を目的とする未來教のやうに見て居る人もある。現に今日、眞宗教徒の中には眞宗の信仰は、淨土往生であるだけ考へて居る人があります。さうした方に對して人生問題や、殊に今日の時局の問題をお話すると、それは時局談であつて眞宗のお話ではない、とまで極言する人があります。また私も、屢々さういふ批判を受けるのでございます。ところが、眞宗のお話の信仰はさうした未來往生のことに限られたものぢやないんです。この人生の現實問題に對して緊密なる關係を有して居るのであります。それがために私共の一派では、吾々一派の教徒たる者は人生を正しく見て禍福に惑うてはならぬともいふて聞かせ、また、報恩の至誠を以て國家に盡さなければ眞宗教徒ぢやない、とまで吾々は呼び來つて居るのでございます。單に淨土往生だけではないのでございます。かういふ點から私は、眞宗教徒としての時局下の生活に對する、このお話がしたいのでございます。これから問題を三つほど擧げて、眞宗教徒の立場を明らかにしたいと思います。

思ひます。

私が第一に申したいのは、祈願問題でございます。事變が始まりましたからこちらへ、戰勝祈願祭といふ事が到る所で行はれて來ました。今もそれは名古屋でも實行されて居ることだらうと思ふ。私は事變の當初から、この問題に就て深く考へさゝれて居るのでございまして、機會ある度毎に、私はかう思ふといふことを申述べて居るのでございます。今それをいふのは時間許しませんから略して置きますが、殊に私は昨年は、今のやうな祈願祭のやり方では國の將來が案ぜられるといふところから、北は樺太から南は鹿兒島に至るまで、五月から九月まで殆ど一日の休みなく全國を巡廻して、この點に對する反省注意を促したのであります。所でさうした過激の行動をしたために遂に病床に倒れましたが、倒れた時は私は、宗敎家として第一線に倒れたので、これほど光榮な病氣は無いと考へて満足したのでございます。私は祈願といふことに就て、効果があるか無いかといふことをいふんぢやありません。これは別な話です。祈願をする場合は第一に、自分の全生命を捧げても敢て辭さない、といふ堅き宣誓が伴はなければならぬ。自分は何等爲すことなく、一切を神佛にまかせて依頼するといふやうな、甚だ虫のよい祈願では神佛に對して申譯が無いと私は信ずる。「今日は暑いから大儀だ。お前詣つて來

い」といふて子供を代りにやるやうな、あゝいふやり方は神佛の顔に泥を塗るもので、私はそれを嫌ふ。今のやうなやり方で行かれたら、「神様々々」といひ乍ら人間より神様を下にするこ
とになり、容易ならぬ事が始まる、と私はそれを心配するものであります。私共、神に祈る限
り全生命を捧げて國家のために盡すといふ、かうした宣誓を申上げねば本當でない。かういふ
點から祈願祭を、全國を歩いて見て居りますと、どうしてみてもあの祈願祭をなさる中に滅私
奉公の熱意が缺けて居る。これは私いふていゝと思ふ。祈願さへすればよいといふやうな工合
に私には見えます。これでは祈願の所詮が無い。私共は斯くくの事を致しますから、是非こ
の度の戦争には勝利を得させて頂きたい、といふ赤誠の籠つた祈願でなければならぬのであ
る、と私は今日までいふて來たのである。

私が今日まで、かういふ事をいひますのは、私の信仰上からどうしてもこれをいはないと、
私自らが眞宗教徒たるころの、光榮のある位置を没落するんであります。私共眞宗教徒は、
願といふことゝ誓といふことゝ、これを二つに分けてはならぬといふことを堅く信ずるのでご
ざいます。願だけであつて誓の無いやうな事は、本當の願でないと思はれて居る。茲に眞
宗教徒にとつて最も因縁の深いあの『正信偈』の中には、

建立無上殊勝願 無上殊勝の願を建立し

超發希有大弘誓 希有の大弘誓を超發したまへり

とあります。願だけぢやありません、誓がちやんとある。若いお方には『正信偈』よりも、もつ
と馴染んでゐられるあの『歎異鈔』の突ツかゝりの言葉の中にも、

彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛まうさん
とおもひたつころのおこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

と示されてある。此のお言葉は若い方で新らしく、眞宗の話を聞く人はよく味はつて居られる
と思ふが、『正信偈』といひ、『歎異鈔』といひ、いづれも「誓願」といふ言葉で佛の偉大なる力を
あらはしてあります。一體、私共の浄土眞宗は、これは本願の宗教といふてもよいほどに、佛
の大願力を信ずる教であります。その事は『和讃』の中に到る所に説かれてございます。その二
三を拾ひ上げてみますると、

本願力にあひぬれば むなしくすぐるひとぞなき

功德の寶海みちくして 煩惱の濁水へだてなし

本願力といふのは、阿彌陀様の大願力であります。或は、

願力成就の報土には 自力の心行いたらねば

大小聖人みな、如來の弘誓に乗ずなり

これは願力と弘誓、矢張り誓願によつて吾々は淨土往生をするのだといふほどに誓願はよかましい。

信は願より生ずれば 念佛成佛自然なり

自然はすなはち報土なり 證大涅槃うたがはず

これらの『和讃』の如きは、最もその著しいものであります。どうして斯くも願とか誓とかいふことを力説するかと申しますと、我が淨土眞宗は、法藏菩薩の四十八の大願力が根本となつて居ることは、今更申すまでもないことではありますが、その四十八願がいづれも誓と願とで説かれてあります。祈願の「願」だけぢやない、「誓願」であります。四十八願の第一願は、

設我得佛 國有地獄餓鬼畜生者 不取正覺

設我佛を得たらんに、國に餓鬼畜生あらば正覺を取らじ——といふ、この表現の仕方、この中で最初の「設我得佛」といふのは、菩薩が成佛したいといふ願望を述べたものであります。それを御覽になるとわかります。最後の「不取正覺」といふのは、願望を達するために宣誓をされ

たものであります。さうして、その宣誓の條件は「國有地獄餓鬼畜生者」自分の建設する淨土の中に地獄・餓鬼・畜生が存在するやうなことがあれば、自分は正覺のさとりを取らぬ、と誓はれたのでございます。随つて、希望を述べる言葉としては、即ち「願」といふのは、無條件にかうありたいといふ希望だけ、戦に勝ちたいなら戦に勝ちたいといふだけです。ところが、「誓」といふのは、これ／＼の事が出来なかつたら私は最初の希望を撤回します、といふ風に條件附の希望を述べます時に使ふのが「誓」であります。それ故、誓と願とは合一しなければ、その目的は達せられないとするんであります。法藏菩薩の四十八の大願は、いづれもこの願と誓とが合一されてある所に、その大誓願が達せられましたから、私共が念佛で救はれるのでございます。そこで、

信は頼より生ずれば 念佛成佛自然なり

自然すなはち報土なり 證大涅槃うたがはず

あの『和讃』を示されてゐるのでございます。私はかうした教によつて、教養され來つて居る眞宗教徒でありますから、事變の當初から全國に於て行はれて居る祈願祭に對して、一種の疑ひを挟んだんであります。この戦勝祈願に對しまして、前線の將兵諸士は一死報國といふ誓を

立て、奮闘して居ります。實に立派な誓願です。誓が具備して居りますから、非常な大勝を博したわけでありませんが、銃後の人々の祈願には願はあるが、どうも誓が缺けて居るのではないか。若し誓願が具備して居つたならば、今日のやうな國策違反の淺ましい行動は跡を絶つ筈である。「この戦争を勝たして貰ふためには、私を滅して國家に御奉公する事を誓ひます。若しこの誓ひに反きましたら私の生命をお取りになつても結構です。斷じて私は忠良の臣民とは申しません」この誓が無くては本當でない。戦だけは神様にひとつ勝つて貰つて、私は勝手に三度の飯を食つて勝手に遊んで、時には料理屋へも行く……そんな事で神様にまかせるとやうなことをして居る。これは私非常に嫌ふのでございます。若し眞劍に誓があつたら、今日のやうな間取だ何んだといふやうなこと、或は買溜め、賣惜みといふやうな淺ましい行動はあとを絶つ筈であります。口では立派なことをいつてゐても、行つてゐることはスツカリ口と異つたことをやつて居るのでないか。甚だいひにくいですが私は茲に苦言を呈する。誓があつたら、如何なる困難に當面しても、斷じて不足小言は無い筈です。口には滅私奉公とか堅忍持久といふて居り乍ら、言行一致せぬといふことは、願はあるが誓が缺けて居るんだ、と私は痛感するのであります。誓を具備しなければ戦勝祈願の目的は達せられない、と私は今日まで力強く全國に亘つ

て説いて來たのでありますが、この度、私のさうした願望が達せられましたので、私は非常な喜びに浸つて居るのでございます。それはほかでもない、皆さん御承知の如く先月の十九日に總裁秩父宮殿下の台臨を仰いで、全國三十六團體の代表者二千五百名が樞原神宮外苑で擧げた銃後奉公大會は、銃後奉公祈誓大會でありまして、はじめて「願」のほか「誓」が出た。これが出なければ本當でない。神様の前に銃後奉公の堅き信念を誓ふたのでございます。それからまた、同月の二十四日には同じ外苑で總裁梨本宮殿下の台臨を仰いで、全國三百二十萬の警防團の代表者百六十名が同じく神前に額いて、滅私奉公の誓を立てますところの、警防宣誓式を擧げたのでございます。私はこの有難い報を聞いて、これでなくてはならぬ、これで私の年來の宿願が達せられた、と衷心から私は喜んで居るのでございます。魂の抜けた祈願ぢやなくして自己を投出して斷然として起つといふ誓を立てる、かうした祈願でなくては祈願の効は無、といふのが私の信念であります。この堅き誓が各自の腦裏に極印されて事に當つたら、聖戦完遂の大願が必ず達成される。また、前線と銃後がそこで一つになつて了ふことが出来ると私は思ふのであります。私はかうした運動が私共の仲間から始まらなくて、秩父總裁宮殿下の下に寄つた會員によつて、梨本總裁宮殿下の下に寄つた會員によつて、殿下の前にこれが宣べられ

るやうになり、神の前に誓ふやうになつたといふことは、洵に私は尊く有難く感じてゐるのでございます。第三週年に這入つて、そこにはじめて、眞劍に滅私奉公の氣分が、國民の一部の間に湧き出して來たといふことは、上 陛下の御稜威の然らしむる所であり、聖戰の將來に向つて大いなる光を投げかけるものである、と私は躍り上がるほどに喜ぶのでございます。私は今後機會ある毎に眞宗教徒として、この祈願祭に對する眞劍な叫びを續けたいと思ふ。昨年までいふて來ましたけれども、その意味がわからなかつたのが、そこに何んといふ廻り合せか時節が到來して、吾々法衣を着る者のいはないところの祈誓式が執行され、宣誓式が執行されるやうになつたといふことは、實に有難いことだと思ひます。そこで『正信偈』の「建立無上殊勝願、超發希有大弘誓」といふ、そのまゝの事がこの戰爭故に行はれて來るのである、かう私は考へて居るのでございます。

それから次に申したいことは、この時局下の生活に對して、眞宗教徒の生活がどう響いて來るかといふこと、それに就て私はかう考へる。私共の眞宗教徒は、善導大師の説かれた「二河白道」の話をよく聞いて居ります。この「二河白道」の話は、説教にまゐる人はよく聞いて居られる話で、『和讃』の中には、

善導大師證をこひ

定散二心をひるがへし

貪瞋二河の譬喩をとき

弘願の信心守護せしむ

あの一首を擧げてあるがそれでありませう。この貪瞋二河といふのは、貪欲の煩惱を水の河に喩へ、瞋恚の煩惱を火の河に喩へ、その中間の白道を、本願力廻向の信心に喩へたものでございます。私共はこの二河に押流されずして、純一無雜の念佛の大道を歩むものだ、といふことを説いたものでございます。これに就ては眞宗教義の上には詳しい説明がありませんが、私はその説明を茲に話さうとするのではありません。私共が時局下の生活の中にあつて、眞に滅私奉公の實を擧げんとするには、この貪欲、瞋恚の二つの河に溺れぬやうにしなければならぬ。平生、聽聞し來つた信仰のこのお話を、現實の生活の上にピッタリ當て、吾々の行動をしなければならぬ、かう私は思ふ。今日この時局下の生活を爲すに就て深く注意せねばならぬことは何よりも貪欲の煩惱を抑へることでありませう。これが抑へられたら、昨今の逼迫せる生活に就ても、別に大した苦難を感じなくて通れると思ふのでございます。私は去年の秋から今日までの間の世間の動きを見て、殊に貪欲を抑へたらしくんだといふ婆心が湧いて已まぬのでございます。事變の勃發と共に平常時に必要な物は、日を遂うて缺乏して來ますので、多くの方々

自分の身の満足を得んとし、貪欲の心を無遠慮に發揮される。そこに買溜めとか賣惜みをするさういふ事をなされるから、豫期せざる動搖を來たすのである。多くの人々が各自にこの貪欲の心を抑へて、有無相通じて貪り惜まないといふ心掛で來たら、あゝした動搖は私は來たさなかつたかと思ふ。「あなたの所に無ければ、うちの炭を持つて行きなさい」その氣分が出て來たらそんな面倒は或程度まで防げたと思ひますが、併し、濟んだことを今さら繰返しても所詮がありません。私は今後益々お互の生活を緊縮しなければならぬと感じますから、是非この欲望の制御に對して自肅心を教養されんことを、私は望んで已まないものである。お互に貪欲の流れに溺れないやうにしたいのであります。瞋恚の火の河も亦、貪欲の水の河と同様に深く注意しなければなりません。なぜかといふと、それに注意しないと、直ちに不平を訴へて動搖します。大いなる困難に當面し、それを乗切らんとして居る重大な時期に際會して居るのが、今日であるのであります。その事を頭に置かず、たゞ自分の生活が自由にならぬといふことのみを拘泥しますれば、直ちにそれを口にして議論する、といふやうなことになる。これは我が心の瞋恚の煩惱が抑へられぬからである。これを忍んで受けるといふ大精神を喚起して御奉公しなければなりません。

かう考へて來ますと、今日の時局下の生活を最も嚴肅に且つ敬虔に致すためには、物が足るとか足らぬとか、そんな事よりも各自が自分の心の中に抱いてゐるところの、貪欲、瞋恚の煩惱を抑へることが最も重要なものである、と私は感ずるのであります。さうして、それをするにはどうしても、宗教的の教養がなければ本當のものが出来来ないんだと私は思ふ。多くの人々は眞宗教義を勘違ひして聞いて居られるやうです。煩惱成就の凡夫だから抑へて來いの仰せぢやない。そのまゝ阿彌陀様が助けるんだ——といふ風に、甚だ虫のよい解釋をする人が多々あるのみならず、さうと信じて居る人がある。私はそれを嫌ふ。宗祖聖人は斷じてそんな事はいふて居られません。聖人は、かういふ工合に注意を與へてゐられます。

「まづをの／＼の昔は、彌陀のちかひをもしらず、阿彌陀佛をもまふさずおはしまし候まじらひしが、釋迦彌陀の御方便にもよほされて、いま彌陀のちかひをききはじめておはします身にて候なり。もとは無明の酒にゑひて、貪欲、瞋恚。愚癡の三毒をのみこのみしあふて候つるに、佛のちかひをききはじめしより、無明の酔もやうやうすこしづゝさめ、三毒をもすこしづつこのまづして、阿彌陀佛のくすりを、つねにこのみめす身となりておはしましあふて候ぞかし、しかるになをゑひもさめやらぬに、かさねて酔をすすめ、毒もきえやら

ぬに、なを毒をすすめられ候らんこそ、あさましく候へ。煩惱具足の身なればとて、ころにまかせて、みにもすまじきことをもゆるし、くちにもいふまじきことをもゆるし、ころにもおもふまじきことをもゆるして、いかにもこのままにてあるべしと、まふしあふて候らんこそ、返々不便におぼえ候へ。えひもさめぬさきになを酒をすすめ、毒もきえやらぬにいよ／＼毒をすすめんがごとし、くすりあり毒をこのめと候らんことは、あるべくもさふらはずとこそおぼえ候。」

とまで聖人は断定を下して居られる。これは聞かなければならぬ點でございます。説く者としては、どうもそこらはいふのは、ちよつといひにくい。いふたらこちらが實行しなければならぬ。聞く方でも、聞いたら明日から肚の据ゑどころを變へなくてはならぬから、なるべくそこらは出さぬやうにソツとそのまゝにして置いて、この身このまゝで極樂まゐり——そこらが落ちらしい。それでは本當でない。私共はかうした教誡を蒙り來つて居るものであります。この教誡を服膺して今日の生活の根本觀念を確立したら、必ず國策に順應してよく貪瞋煩惱を制御して、正しき生活が出来るのであると私は信ずる。随つて私は同信の諸友に對して、この教誡をよく讀みなさいといふて、これを説明し來つて居るのであります。尤もさうした理論はよく

了解は出来る。それは一通りは頂けませんが、そのまゝに實踐して行かうといふことになる、環境の事情がなか／＼許さない。周囲の事情で自分の今日迄の生活が持続し得られないといふことになり、折角、思ひ立つた欲望制御の心が痲痺して、衣食住の問題に引ずられてついで不足小言がいひたくなつたり、變な事がやりたくなつて來る、これは人間の弱點で多くの事實であります。人の肚の中を見るやうな事を申しますが、私の肚がさうだから……とところが、これには藥がある。さうした氣の弱い心が出ました時は、私は蓮如上人の教を聞きます。上人はそれに對してハッキリした注意を與へてられます。

「衣裳等にいたるまで、わが物と思ひ、踏たくること、淺間敷事なり。悉く聖人の御用物にて候間、前々住上人は、めし物など、御足にあたり候へば、御いたゞき候由、うけたまはりおよび候。」

といふがこれで、蓮如上人は、これは私一人の物ではない、佛の御用物を頂いて居るから尊いものであるといふので、お召物に足がさはつても、罰が當るといふて戴かれたといふ。その氣分であつたら不足無しに行ける。御飯も頂かれる度毎に、如來聖人の御用で頂くのである、かういふて兩掌を合はせて頂かれた、といふやうな尊い物語もあります。吾々も掌を合はして御

飯を頂くだけの習慣は有つて居りますが、その習慣を有つてゐ乍らも、外米に小言をいふといふのは、一體これはどういふことでせう。すると、佛様まで瞞してゐることになる。本當に心から有難いと喜んでゐたら、外米はおろか、どんな御飯であらうと雑炊の残であらうと、何んの不足小言無く頂いて食へる、そこ迄行かなくては本當の眞宗信者とはいへないと私は考へます。

「蓮如上人、御廊下を御とほり候て、紙切のおちて候ひつるを、御覽ぜられ、佛法領の物を、あだにするかやと、仰られ、兩の御手にて、御いたゞき候と云々。」

これが蓮如上人です。紙屑一つ、紙切一片迄が勿體ない、尊い、粗末に出来ないといふ、この氣分で行つたならば、今のやうな贅澤な生活は出来ない。この氣分で生きる所に、國策順應の剛健なる生活が出来ると思ふ。眞宗は單に未來の淨土だけを説くのではなくあります。この強い教訓を日常生活の上にあらはし、在家宗教の眞生命を發揮しようといふのが私共眞宗教徒の信じて居る尊い教だ、と今こそこの世へ此の寶を出さなければならぬ時、この尊い教を頂いてそれを我が生活の料としたならば、今日の如き物の不足の中にあつても不満を訴へず、また、七・七禁令に對しても、別にあんな風に指示されずとも、自肅自戒が出来ると私は信じます。

どんなものでせう……かう申しますと諸君は、眞宗の教徒はすべてみな宗祖や蓮師のいはれた教訓を、その日常生活の上に實踐して居るか、と、かう反問をされるかも知れませんが、これは私はいふ。すべての信徒がそれをやつて居るとは申し上げぬ。さうやつて居らぬ者がある。私の知つて居る中でもそれをやらぬ者が多い。併し、私が交はつて居ります人の中には、この教訓を實際に行ひまして、何等不足をいはずして、今度のやうな事變下の生活の中に力強く生きて、臣民の本分を盡して居られる方が幾らでもあります。私は過去二年かゝつていふて來たので、その結果は各方面にあらはれつゝある。三百人、五百人使つて居ります者が、その話を聞いた翌日から一言の不足をいはずして緊張してやりだした、といふやうな報告も得たのでございます。各方面にその効果はあらはれて來て居るといふ風で、人間の魂はそんなにまだ腐つて居らず麻痺して居りやしない、これは一つの藥の注射の仕方で潑刺たる意氣を以て進む、堅忍持久の力が湧出ると私は考へる。だから私は、遠慮無く申上げるのでございます。最後に私のいひたいのは、私がかうした話をする、それは御尤もである。よくわかるが、併し、さういふ心掛で國策に順應して私が行かうとすると、私一人ならいゝが、迎もぢやない私の店は面倒になつてゐるから、やり切れぬやうになる。ところが、國策に違反して闇をやり

無茶をやつて、法律の網の目を潜つた者ほど、段々金を儲けて樂にやつて行く。言換へると、正直な者ほど苦勞して、横着な者だけ今の世の中は樂にやつて居りますが、一體これはどうだらうかといふ人があるので、私はそれに對してハツキリいひます。「近所隣りで泥棒する者があるから、俺だけ正直にやつて居つては馬鹿を見るから俺も泥棒をする、といふなら、やつたらよろしい。ひとに相談せんでい。落ち着く場所はちやんと定まつて居る。刑務所……戸籍は汚れる、その覺悟ならしなさい。終ひにはそんな人は日本の國に居つて貫つては困るから、早う片づけるならドイツみたやうにするかなア、それまで私は國を念ふよ。君他人が泥棒をするから自分もそれをしなければならぬ、といふやうな變な考へは持たんでおきなさい。何んでそんな淺間しい心が出るか」と、私はそんな事をいふ人の氣がわからぬ。私共は他人の事は彼はいふに及ばない。自分は眞に忠良の臣民として滅私奉公の信念の下に生きなくてはならぬ、かう私は考へるのであります。また、人間は金が無ければ樂が出来ぬとか、金が無いから苦だとかいふが、私はそんな一面的なものではないと思ふて居る。孔子は不昧いものを食つて、水を飲んで肘を枕として横に成る、そこにも大きな楽しみがあるよ。俺は不義で金持になつたり尊い位置に登るといふやうなことは、浮いた雲のやうなものだと思ふてゐるから何んともない

わい、といはれた話があります。人間は純潔にして崇高なる氣分の下に生きなければならぬといふのが、これが『論語』の生命でございます。さういふ教訓を與へることが、今の若い者に對しては缺けて居る。大體、今迄の教訓は、成功せよ……金を儲けよ、高い位置に登れといふことだけいふた。それよりほかに人の道は無いやうに一面的な教育をしたので、それが出来な時は蛭に鹽したやうな變な人間になつて了ふ。「なアに水を飲んで野菜を食つてゐても樂だわい」この大きな氣分をもつてゐたら、この國策に反かぬやうに易々と生きて行く力があると私は思ひますので、愈々茲に『論語』の教が有難く、蓮如上人の教と相通するものがあると考へるかういふ教を常に頂いて居りさへすれば、決して狡い他人の行動に比較して、自分一人は歩の悪い事をするんだ、といふやうなさもし根性は浮んで來ぬでせう。前線の將兵諸士は、他人の行動を眺めて自分の行動を二、三には致さない。「彼等は樂して居るから、俺は戦は止めた」そんなことはいはぬ。そこになると、孔子や蓮如上人が出て來ないでも、生きて居る兵士を見たらい。前線の將兵は前後左右を顧みず一心一向に、義勇奉公の大精神をもつて奮闘して居るんぢやないか、私共はこれを見習はなければならぬ、と私は今迄よく人々にいふて來て居るのみならず。私は自分でやつて居る積りです。私は病氣のために滿十一ヶ月家に寢んで居りま

したので、實に何んとも申譯ないといふて恐懼して居る。あれだけ若い者がみな生命を賭して戦かつて居るのに、病氣とはいひ乍ら、七十歳といひ乍ら、毎日床の中で榮養食を攝つて薬を飲んで寝て居る、何んといふ國家に對して勿體ないことだと考へまして、この中でも時間の許す限り自分の考へを筆にし、人にも談じて來ました。そこ迄行かなくては私のこの胸が承知しません。そんな事をしては命が危ないといふが、これがチツとして居れるかと私はいふのです。

陛下は日夜宸襟を惱ませ給ふ、若い兵は生命を賭して戦うて居る、俺が一人蒲團の中に寝て居つて、こいつに罰が當らずに誰に當るか、と私は自ら叱つて居る。私はさう行きます。だから私は、他人の行動を俟つて起ち上がるといふやうな、そんな變な氣分は無いんであります。私一人がこの大國難を背負うて起ち、屹度これを打開してみせるといふくらゐな意氣に燃え立つて已まないでございます。ひとの足下を見るんぢやありません。私は全國民が各自にこの意氣に燃え立ち、一億一心になつて事に當らんことを切望して已まぬのでございます。それにつけても我宗では「報恩の至誠を以て國家に盡す」といふ實踐要項を規定しましたが、我が一派の人は率先以てこれを實行しなくては、私は眞宗信徒である、といふ名を附けることは出来ないと私は考へて居るのでございます。實は私一人がこの大國難を背負うて起つんだといふやう

な、かうした強いことを述べますのは、何も私がえらぶつて獨りよがりをするんぢやありません。私は宗祖聖人が、「彌陀の五却思惟の願をよく／＼案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり」と頂かれたあの言葉、これでなくてはいかぬと思ふのであります。佛は十方衆生と呼びかけられたけれども、十方衆生の一分としては聖人は受けられない。前後左右は見ず、私が呼びかけられて居るんだと受取られた。教育勅語に

朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

と仰せられてある御言葉を頂く時も、私は一億の國民と一緒並に頂くんでない。「爾臣民」の臣民は、河崎顯了一人を御呼び遊ばされたものである、と、かう私は頂くのであります。ひとの足下を見て忠良の臣民になるのではない。ひとはどうであらうとも私は忠良の臣民で行くんだ、と、この意氣を以て起ち上がるんです。宗祖聖人は十方衆生と呼びかけられて、十方衆生の足下を見るのでなく、親鸞一人にこの念佛を下されたのである、と頂かれた時、疑ひなくおもんばかりなく彼の願力に乗ず、といふあの強い信念が出たのである。この眞諦の信仰を私の生活の上にはあはして、私は何としても國家に御奉公したいと切に念ずるのであります。

ところで、世の中には十人十色の觀察をするから、いろ／＼の議論があります。議論を聞け

ばいづれも一理あります。折角、思ひ立つた自分の意見も、ひとの議論に覆されて碎けるやうなことがあります。だからこの際、私共は他から出て来る雑音に耳を藉してはなりません。『和讃』の中に、

九十五種世をけがす 唯佛一道きよくます

菩提に出到してのみぞ 火宅の利益は自然なる

といふのがあります。大聖釋尊の時に九十五通りの異端邪説が行はれたので人々が皆迷ふたがその時、佛の教を聞いた者は、佛の教だけをハツキリ掴まへて行つたから、はじめて火宅の人生の中に正しきさとの道が歩かれた、かういふことが歌つてございます。今日、各方面のすがたを眺めてみますと、戦時體制下の中に於て、表には出さずとも内に不平をいふたり、變な事をいふたりする者がありますが、私共はさうした雑音に耳を傾けてはいけません。各種の説に惑はされずどこ迄も滅私奉公の態度を以て、盡忠報國の一道を辿り皇謨を翼賛し奉らなければならぬと思ひます。

私は昨夜以來、「時局と信仰」の題下に私の信ずる所を率直に申上げて、略その要旨を盡したんでございます。かうしたお話を申し來ると、今次の事變の解決、即ち聖戰完遂のためには各

自が、各自の心中に不純なる欲望を除去し純一無雜に、滅私奉公の大義の行動を爲すといふことが、最も大切な要務であるといふことになるのであります。さうしてみると私共は周囲の事情に對して、いろ／＼な願望を満足せんとするに勞苦するよりも、先づこの自己の心の中の欲望制御に力を盡しまして、至誠至純の心を以て事に當るといふ、崇高なる信念を樹立しなければならぬ。この信念が樹立されるれば、如何なる苦難の中にあつても何等躊躇することなく、それに耐へそれを忍んで臣民の本分を全うすることが出来るのであると私は信ずるのでございます。

お互にこの人生にあらん限りは、日常生活を閑却して行くことは出来ませんが、この必須缺くことの出来ない生活を淨化して、滅私奉公の實を擧げしむるには、正しき宗教の教養によつて、心の垢を洗はなければなりません。従つて私は、正しき信仰こそは正しき生活の出現せしむる核心であると信ずるものであります。この時局下の生活に對しても、特にこの點を力説するものであります。

甚だ長談義を致しまして、御靜聽を仰ぎましたことを有難く御禮を申し上げます。(完)

眞宗教徒の使命

第一講

同朋箴規

己を捨て、無碍の大道に歸す
人生を正しく見て禍福に惑はず

報恩の至誠を以て國家に盡す

この十數年來、私共の一派の上には於ては「如何に教法を説くべきか」といふことに就て、いろ／＼と議論が闘はされて來たのであります。それは何しろ社會の狀態が刻々變化して參り、すべてのものがズツと變つて參りますのに、この人間にはたきかけてその日その日の生活指導の力となつて、人生の根柢を支配して行くところの教法が、時代と人生と離れましては、折角の話が天井から目薬を差すやうで意義をなさぬ、効果が擧がらないといふことが一つ、もう一

つはどうも在來の説き方で行きますと、決して悪いといふのではないけれども、餘りに複雑煩瑣になつて三年や五年聞いたとてわからぬ、といふやうな面倒なことになつて了ふた、それが安心が細かいとか、親切な教法だ、といふやうな勘違ひまで起きて居りますので、それをもうひとつ引戻しまして、もつと直截簡明に眞宗の精髓をハッキリ説かう、それを時代相應にしながら、ひとつ基本的の例を示したらどうか、といふやうなことに就てなかく議論があつたのでございます。それが爲に吾々は積んだり碎いたりして來たのであります。何しろ七百年の長い傳統を有つて居りまして、宗門だけでありまして八百萬の信徒を抱いて居るものから、その教法を説く上に於て多少でも相違がありますと、そこには大變な動亂を來たしますので、やれ異安心、それ異義者といふことになつて、容易ならぬ問題を起さぬとも限りませんし、無責任な地位にある人第三者の批判的な態度ではなかくいきませんので、世間の方々が想像をなさることも出來ないやうな、容易ならぬ苦心を以て今日迄參つたのであります。それからといつて、時は容赦なく移り元のまゝでは段々時代の人と離れてしまふて、たゞ専門の眞宗學をする者にあつては、疑問もわかりませんが、一般の人々が信じて實行する上には、容易にそれが行へないといふことに、事實がさうなつて居るんだから「近來、どうも若い者がなかな

か詣つて來ぬ」とかういひつつも、事實、詣つて來たとて話がわかりやせんのですから、これは困つたものですと云ふ外はありません。尠くとも、もう少しわかるやうていふたらどうか、といふ事實にぶつかるとはありますが、それならといふてこれは、この頃の新興宗教のやうに時代人の欠陥をそのまま利用して手軽に誰か考へてちやんと巧まいこといふやうに、自由に行けるんです。これはやり方がまたありますが、何しろそこには、一言一句動かしてならぬところの、所依の經典があるのですから、また、それに對して宗祖はじめ歴代の宗門の中に居る學者方、所謂講者といふやうな人が、親切な註釋書を澤山書いて居るので、それを除けて置いて話すといふことも出来ないわけでありまして、非常な困るのでございます。併し、困つたといつて居る間に、説く人と聞く人々は離れて了ひますから、「どうも困つた」といふて居るだけでは仕方がない、議論はよい加減にして直ちに時代にぶつかつて行かなくてはならないといふことに、かう押詰まつて來まして問題が頭を擡げましたのは昭和六年でございます。所謂滿洲事變を契機として國情は急轉直化ともいふべき大變化を來たして、國家非常時に入つたのでありますから、ひとつこの場合は宗門が一致して起ち上がらなくてはならぬといふことになり、同信報國の念の己みがたひものがあり、一面には世間では蕩々として邪惡な迷信もあつて國家

の大なる問題となつて來たのであります。その際に吾々は國家とか社會を離れまして、後生の一大事をあだにしてはならない、といふことだけをいふて居ては通れなくなつた。國家は後生でなく現生ですから……すると、「眞宗のやうな未來教が何になる、現在の國家の爲にならぬぢやないか」といふやうな聲を耳にする。さりとて吾々は未來の淨土といふやうな問題を構はぬと疎略にして置いては、眞宗の眞生命を失ふことになりまして、そこに吾々傳道者は行きつ戻りつの悩みを有し來つたのであります。

だから、さういふ問題を一面社會の問題として考へてみると、兎に角、根本の問題は何れにしても、教の中に國家に對する働きが無いのならば別ですが、現に眞俗二諦の立場に立つて進んで來たのであるから、時機相應の法として起たなくてはならぬので、第一の皮切りをしましたのが、あの滿洲事變の直後に吾々やかましくいひまして、「精神立國」といふ標題の下に、眞宗教義を活かしてゆく、かういふことを主張したわけで、さうして参ります間に「舉國一致」といふ聲もなかくやかましくなつた。それに就きまして眞宗の教義の中に、十分の榮養を與へる教義があるので、それを表現する言葉として用ひたのが「協力不退」これと呼びかけました。さうして、聯盟離脱の問題が生じた後に、もう一つ上上がつて「同信報國」だ、同じ信

心の者が國に報ゆるといふことが眞宗教徒の使命だといふので、話をズツとしてこゝ迄進めて来て居つたのであります。ところで、これに對して宗の内外からの批判があつた。「近頃、本願寺は宣傳上手になつて、時代に迎合するやうな名目を掲げてやつて居るが、今更さういふことはせんでいゝではないか」といふやうな議論も出て参りました。さうして、内部からも「大體、三經もあるし、また宗祖の種々なるお聖教もあることであるから、今更そんな新しいものを持つて來なくてもいゝ」といふ強い議論も出たのであります。それならといふて元のままで参つて居りますと、どうも眞宗の話は世間とピッタリ合はぬといふことになる。國家非常時だといふ時に『改悔文』を持つて來て、「もろ／＼の雜行雜修自力のこゝいをふりすてゝ……」かうやつたところで、結局ききめがありません。その雜行雜修なんといふものは、飛んでもないむつかしい講釋になる。雜行雜修だけのわかつて居る信者が何人居るだらうか。これを通常人に講釋せねばならぬとなると迎も面倒なことになります。私共考へますのに、餘りに宗學が進んだ時には宗の傳統の生命を失ふから氣をつけねばならぬ、理論だけに這入つて理論で夜が明けて了ふて、實行に移る機會を失ふからであります。そこに吾々は大きな缺陷を認めます。これは一つの佛教の通弊であり、それがまた佛教の長所でもあると云へませう。佛教は

まことに深い哲學を有つたり理論を有つて居るものですから、得てしてその方へ行かうとする。また一方から、かういふ議論が出て來ます。「世の中は常識だけではあぶない常に深い哲學を有たねばならない、それぢやから佛教の學問が要るんぢや」これが一つあります。また、一方からは、「七百年の間、傳統されて居る念佛の教、信心の教、淨土の教を、時代が變つたとて別に變へなくていい、眞理は一でないか」かういふやうな強い議論がある。これは内輪話でありませんが、事實はさういふ所に、局外のお方の御承知の無いところの一つの苦しみを有つて居るところは、これは恐らく一派だけでなからうと思ふ。既成宗團の中には、その宗團が深い學的の背景を有つて居るほど、これが出て参ります。それは内部の悩みですが、外はそれに頓着無くして刻々の變化をしますのが現状であります。相談に夜が明けて居る間に船が出て了ふといふ風になるので、いろ／＼の問題が今日の「同朋箴規」を産み出す迄には生じ來り生じ去つたのであることを豫め御承知がいたのでございます。私はいま京都に居りますが、内外交渉關係を有つて居りますので、「この話をするには君が行つた方がいゝ、一番内外ようわかつて居るから」といはれるやうなわけで、今度その籤が當りましたので、各所に参つてお話し來つたのでございます。

これから「同朋箴規」の話に入るのでありますが、皆さんに御考慮を願はなくてはならぬのは、近來多くの人は「親鸞に還れ」とやかましくいふ。何かといふと直ぐ親鸞聖人を出して来て話をし、親鸞教に觸れて一つの核心を握らうと致します。吾々から見ても居りますと、甚だ御無禮であります。正しく親鸞聖人を理解するといふことは逆もむづかしい。専門の學者は別であります。一般の宗學をしない人達では、天上に梯子を掛けて登らうとするやうなものです。大體、聖人の著書は難解であります。「和讃」などを拜讀しましても「業」などに關して、

清淨光明ならびなし 遇斯光のゆへなれば

一切の業繋ものぞこりぬ 畢竟依を歸命せよ

と仰せられて居り、或は、

道光明朗超絶せり 清淨光佛とまうすなり

ひとたび光照かふるもの 業垢をのぞき解脱をう

とありまして、あゝいふ言葉が自由自在に使つてあります。ところが「業」といふ文字を一字だけ正しく理解しようと思ひましても容易ではありません。私共が講義しましても、どれだけ急いでも二年間かゝる。私も『業報論』といふものを書きましたが、而もあの書いたものだけ

ではわからぬ。そこにはやはり直観といふものがないとも必要です。云はばそんなに佛教は面倒なのです。そんな簡単な朝飯前に、よなべ仕事にわかるやうなものではない。佛教には八千餘卷の大なる經典を有つて居り、それを研鑽推究され體得された上から、親鸞聖人の胸に入り、その胸の中からズツと出されたものでありますから、聖人の著書はわかつたやうでなか／＼わからぬのです。尠くとも聖人の著書を読みますだけの豫備知識を有つて居つたらよろしいが、さやうでなかつたら取違へます。「歎異鈔」一つ繕きましてもわかりませんが、豫備知識を有つて居らぬ者が、直ぐにあれに觸れて行つたとて、決して核心を掴むことは出来ないのに、近時頻りにこれを説く人がありますが、私共はその大膽さに驚く。幼稚園の園児に大學でする話をすると同じことで、どうもおかしいぢやないかと云ひたいほどであります。それほど聖人の書はむづかしいのであります。親鸞聖人は決して、一般民衆に對して、傳達するといふやうな態度で語られた方ぢやありません。御自身みづから深く々々道を求めて行かれました。而もそれが感激や感情から這入つた人でなくして、冷靜な批判で、強い意志で經典を讀破して、そこに自分の大きな體驗を造り上げられたのですから、教法と人生が餘りに深いところに結ばれてゐるのでちよつと簡單には解らない。だから、聖人の一番眞宗教義の専門書である、『教行信證』

(六卷)などは、初めの『華嚴經』から終りの『涅槃經』に至る迄六十有餘の經典を羅列してありますから、一切經の知識の無い人では讀めません。所依の經典を讀まなくて、書いてある言葉だけ見たとて、これは批判が出来ない。恐らくかういふ聖教などは、數學でいひましたら答案だけ書いてあるのでせう。だから運算の出来る人でなくては、答はハッキリ解らぬ答です。運算をせずして答をそらで覚えて居るだけです。自分の生活にちよつとも觸れないのでせう。聖人が九十年間の大なる運算をした結果の上の結論が出て居りますから、さう簡単に聖人の教義がわかる筈はありません。それで、私は思ふ、聖人の教義を多少わかるやうにして下されたのは、これは蓮如上人でございます。若し眞宗に蓮如上人の御出世が無かつたならば、今日のやうな眞宗は出来てゐないでせう。深くかくれて世に出でないか、むつかしい理論だけで終るのでないかと思はれます。例へば奈良に華嚴宗があります。佛教の最も高い教義ですが、むつかしい學問として残つて居るが、これは宗旨としては小數です。法隆寺に法相宗がありますが、これもまた、唯識の學問で残つて居るだけです。學問としては残つて居るが、教として一般の生活に浸潤してゆくやうな強い力にはなかり得ないのでございます。法は深くしてまた一面直接でなくてはならぬ。だから道を傳へる者はそれに非常に苦心をしまして、どうす

ればこのことが一般によく傳へられるだらうかといふ點をよく、深き注意を拂ひ仔細に検討して、これをあらはして行くべきであります。その道を最も明確に把持せられたのが、八代目の蓮如上人であると思ひます。實は、親鸞聖人によつて開かれた宗旨は流れ、約三百年から四百年に近寄らうとした時に、殆ど火が消えやうと致したのです。聖人の教義が時代に合はぬのでなく、聖人のお膝元で聞いた當時はわかりませんが、年代の経過と共に、何しろ高遠な理想が述べてあり、含蓄の深い言葉で書いてありますから、それを拜見しても容易にその核心に觸れることが出来ないのですから、自然そこに於て、書は高閣に束ねられて了つて、一般民衆の上に人生の事實となり、糧となつて下りて來て動く力が失はれんとしたのであります。これが蓮如上人の當時でございました。そこへ蓮如上人があらはれて、これではいかぬと考へられて、聖人の仰せをもつと何といひますか、實際化し簡易化して誰にでもこれがわかるやうにし、しかしてこの核心を世間に傳へなければならぬとして活動せられたのであります。蓮如上人は御一生をかけて非常に力を注がれたのはこの點であらうと思ふのであります。私はどうも、親鸞聖人の聖教と、蓮如上人のお聖教とを比較して讀んでみて居る間に、最も著しくわかるのは、親鸞聖人の上に於ては、原理精細を極めて居り、論議委曲を盡して居るの

で、その玄淵を汲めばどこまで行つても果てがない感じがする。「教行信證」に於ける「信」の字訓釋だけでも簡単なものでなく、云はゞなかく面倒でございます。深い漢文の素養があつても、なかなか面倒のもので到底一文不知の尼入道では解りません。吾々でもどの辭典で引かれたかちよつとこれはわかり難いといふくらゐ、それほど面倒なものです。それを蓮如上人はこの親鸞聖人のむつかしい教を、所謂實際的に直截簡明にあらはされて、たゞ理窟無しに稱名念佛するんだ、この念佛で助かるといふことを信するんだ、信するといふのは如來をたのんでまかすんだ、といふ風に示されたのであります。といふことは、蓮如上人のお胸の中にどれ程の御決心がありましたらうか。だから、誰にでも齒が立つて親鸞聖人の教がわかり出した。一方眞宗の教義は決してそれ一つぢやない。眞宗の教は、現在と未來と二方面があるんだから、未來の安心によつて現在生活の上にも大なる變化を生ずる、といふことを力説されたのが蓮如上人です。それでは現在生活の上にはどう行くかといふと、「國法をまもり、人倫道德を行ふべし」……即ち國家社會に對しては「王法を先とし仁義を本とする」、また、國民としての責務を果す爲には「かぎりある年貢所當を、つぶさに沙汰をいたす」、これが眞宗教徒の一大任務であるといふのです。これが他から命令されるのでなくて、往生の安心ができる心地よ

く自分に自然につとめられるのであります。だから、蓮如上人によつて出て來ました眞宗は、たゞ吾等の淨土往生だといふことだけでなく、それを現實に生かしてこの行爲の上の指導力となつて自然に働くので、そこに宗教本來の面目を現はし一つの太い線を劃されました。念佛者は佛の大願業力にまかせて念佛を喜ぶ所に、往生一定御助け治定だ、その上は人生々活に於ては王法をさきとし、仁義を本としかぎりある年貢所當をつぶさに沙汰をせよ、そして商賣をし奉公をもするがいよ、と示されましたから、茲にはじめて、眞宗教義が宗教の深い理論から浮び出て、所謂現實生活の宗教として、人生々活のレールの上に乗つたのでございます。私は、かうして蓮如上人の教を眺めて居る上に於て、感慨無量な點があります。例へば上人が仰せられたその一つ「王法をさきとし、仁義を本とすべし」これは飛んでもない偉いことはいふてあります。一體、皆さんは御承知でありませうが、蓮如上人の御出世になりました中心の時代は、あれは應仁の大亂の時でございます。つまり足利の治世で室町の末の代でありまして、天下麻の如く亂れて居る時であります。況んや、當代の人といふものは、足利將軍あることを知つて朝廷のあることを知らない、といふほどの變態的な妙な時代であります。誰しも歴史を繕いて讀んでみますと、始ど現代人の想像がつかぬほどに、あの時代の空氣は、異色を帯

びてゐるのです。私、子供の時分に好きで『日本外史』を読んだ。十四歳の時であります。その時、教へる先生もなか／＼やかましい先生だつたから、勤王論が頭にこびりついて今でもとれませんが、足利の代に及んだ時に書物を覆ふて、悲憤慷慨したやうな、場面が度々ありました。かういふ話があります。光嚴院くわんげんが嘗て、御所をお出ましになつて行幸なすつた折に、足利の武將の一人である土岐頼遠といふのが御列を横断したものですから、直ちに護衛の武士が咎めまして、馬から引ずり下ろさうとした。當時、土岐頼遠はしたたか酒を飲んでゐましたので、「院」と「犬」と音が似て居る所から、「あゝ院か……犬か」といふて御車に矢を射つた。そんな無禮をした爲に、これを見兼ねて尊氏の弟の直義が、土岐頼遠を殺した、といふやうなことがあるのでございます。ところが、京都に居ります街の人々はそれを見て驚いた。どう驚いたかといふと「ハア、院の御所をお出ましになる時には、馬から下りんならんのかネ。そんなことしたら、將軍様が來たら地べたに匍はんらん、えらいこつたなア」といふて驚いたといふくらいで、將軍あることを知つて禁廷あることを知らなかつた、といふやうな時代であります。それほど朝廷は御衰微の極に陥り、御所の築地は皆碎けまして、三條の橋から禁中の内侍所の燈が見え、左近の櫻、右近の橋の邊では庶民が酒を飲んだり、茶店を出すといふほどな、

實に何とも申上げやうのないひどい御有様でございました。街の人が「百人一首を書いて頂きたい」「伊勢物語を書いて頂きたい」といふことを紙に書いて、多少の潤筆料を添へて御所の入口の御簾に掛けて置くと、兩三日経ちますと、尊い御身御自身が御宸筆を賜はり、その料によつて朝廷の日常の供御が行はれたといふやうな、洵に恐ろしい時代でございますが、八家九宗の人はたゞ足利將軍の恩恵に浴して寺を建てよう、僧官を得ようといふことにのみ没頭してゐた。その時に蓮如上人は敢然と起つて「王法をさきとし、仁義を本とすべし」と宣言されました。茲に社會の動亂の直中にあつても、國家の大本として禁廷を大切にしなければならぬ。國民としては國民の義務を果さぬやうでは問題にならぬ。眞宗教徒としては斷じてそれを破つてはならぬ、といふ風に、この宣言によつて、生活の上に大なる指導原理を與へて下されたので、これが眞宗の俗諦教義となつたのであります。かういふ立場によつて眞宗はズツと一般民衆の宗教となつて來たのでございますが、この「王法をさきとし、仁義を本とすべし」といふ言葉に就ては例へば、蓮如上人の次の代（實如上人）に朝廷で後柏原天皇が御即位式を擧げさせらるゝに當りまして、その御費用が足らなかつたので、山料の御坊へ蓮如上人存生の時に既に「王法をさきにせよ」といふ志で以て禁廷を大切にされた、だから、本願寺から献金をす

べきである、といふて朝廷から御使ひが來ましたから、その時に黄金一萬兩を奉つて即位の大禮が行はれたといふやうなこともあつた。だからこれは空言ではありません。これは偉大な力を有つた宣言でございました。それ以來眞宗はこの信念でもつて進みズツと推して來たのであります。

ところが、現代の眞宗の傳道者の説いて居ります所を見ると、折角、念佛の簡易化されたのを、また複雑なものに戻して、蓮如上人が最も簡單明瞭に、「もろ／＼の雜行雜修自力のこゝろをふりすて……」と、いまの『改悔文』迄作られたのを、傳道者は何をするかといふと「もろ／＼の雜行雜修」といふ説明をし講釋をして簡單なものを複雑にして、百千萬言の言葉を入れても解釋出來ぬやうなことにして了ふた。變なことになつて了ひました。そして、また一向に王法や仁義の問題を口にせぬやうになりました。一方に眞俗二諦といふて居り乍ら、その實現が無いのです。私はズツと蓮如上人以後徳川時代の宗學者の著書を眺めてみますのに、矢張りそれがあらはれて居りません。これは實に、三百年の徳川の治世の下にあつたから、かうなつたと思ひます。何としても徳川三百年の中心點は江戸の公方様（公方）にあつて、京都の禁廷は裏になつてゐました、だから、朝廷のことを申すのは、江戸に對して憚る點もあつたでせう。

その言葉が裏になつて、おほびらに話させられなかつたのが原因でせう。これはひとり佛教だけぢやありません。儒教の方でも神道の方でも、さうなつてゐたんで、これではならぬといふ所に反動思想が出て、例の勤王倒幕の思想が頭を擡げて參りましたから、結局、朝廷が表へ出られるやうになつたのでありますが、こゝに眞俗二諦の教義が表へあらはれて參りました。それまでは眞宗教徒が教義を説きますのに、そこに遠慮があつたのでないかと私は推定して居るのです。恐らく、この推定は動かぬのでないか。儒教を眺めても何を眺めてもさうなつて居ります、處が蓮如上人の眞宗の俗諦教義が魂が抜けて、死んだ先の往生の一大事だけを説くが眞宗の説教だといふやうなことになるましては、誰いふとなく、「眞宗は未來教だ。現在の人生には必要は無い」といふやうになつても致方ありません。今の世に時めいて居る人々でも、そんな風に考へて居る人がある。然しその批判の彈は中りませんが、さういふ工合に天下の人は眞宗を誤解して見て居りますから、これは吾々眞宗教徒たる者の、大なる考慮を拂はなくてはならぬことです。

由來、親鸞聖人は、念佛行者は往生の大事を決定とともに、尠くも念佛に理解ある者なら、朝家の御ために國民のために盡さなくてはならぬ。世の中安穩なれといふ點に一身を捧げるや

うに、といふことを明確に示されて居ります。親鸞聖人は「朝家の御ため」といはれましたが蓮如上人は「王法をさきとし」といはれた。さうして聖人の「國民のため」といふのを蓮如上人は「仁義を本とせよ」といはれて居ります。それは『大無量壽經』の教理が、親鸞聖人蓮如上人の上に流れて来て居るのであります。親鸞聖人の上では、信仰の問題であり宗教の奥義であるが、蓮如上人の上では、一般民衆の生活を指導する傳道教義となりました。だから、現在の眞宗教は親鸞聖人によつて根を下ろされましたが、それを簡易に何人にもわかり易く説き明かされたのは、蓮如上人の偉大なお力によるのであり、それによつて眞宗は今日の大をなして居るといふことを忘れてはなりません。かういふ實際の歴史を知らぬと、直ちに親鸞聖人の書物といふことになりませんが、それは一般民衆では齒が立ちません。『正信偈』一つにしても三、五年かからなくては本當にわからぬといふ風で、それを丸呑みにして何もわからぬことにして平然として居るやうな有様。この頃も私はいふのですが、一番易い『和讃』でいつてみても、『彌陀成佛……』の一首、これくらゐ知らぬ者は無いといふけれども、私でいふと「彌陀成佛」の『和讃』を知つて居る者は無い。問ふてみると、「彌陀成佛は彌陀成佛ぢやありませんか」といふ。阿彌陀様が佛となつたんぢや、といつたらそれでいゝやうであるが、阿彌陀様は

佛ぢやないか、その阿彌陀様が佛になつたといふのは、一體どんな佛になつたかといふことになるかわからぬ人が多い。わからぬまゝ通つて居るのです。況んや、「いまに十劫をへたまへり」、これがわかりません。中學校の生徒でなくてもそんなこと小學校の生徒でもわかるといふ。阿彌陀佛となつて十遍強盜をして居るのだ、(笑聲)……成程、『漢和字典』を引いてみると「劫」はオビヤカスと訓み、おどし奪ふと解してあるが、そんな風に讀んで居つてはわかりやしません。「法身の光輪きはもなく」これも佛敎の學問をしない者は「法身」を法律の身と思ふ人がある。阿彌陀佛が法律の身といふのでは、何だかわかりません。さうなると、法身、般若、解脱の三徳、或は法、報、應の三身の話をしなくては、あれは通れません。嘗て私は京都で二晩に亘つて講述しましたが、その時はじめて皆さんに「法身」がわかつたやうでした。それくらゐ話さなくては、あれは通れないのであります。佛敎はなか／＼わからぬのですもつと易くわかるやうにして呉れといふたとて、それよりいけない、人間をどれだけ簡単に説明をせよといふても、両手兩足と胴體をいなくては人間はわかりません。尠くも、佛敎をいひ出す以上、佛敎の原理だけは理解しなくては、これはいけないのです。簡単にといふから困るところが、そこを蓮如上人は全然理窟無しに、聖人のむつかしい宗教は宗教でいゝ、親鸞聖人

の精神は、念佛を喜んで行くのである、吾等は浄土へ行けるのである、往生の行人は安心して業務の責任を果せ、勇んで勞作に従事せよ、世の中のことは何でもやれ商賣もせい奉公もせいその代り王法をさきとし、仁義を本とせよ、それが碎けてはいかぬ。かういふ風にお示し下された。これが蓮如上人の宗教であります。この蓮如上人の御態度が後になつて、それをまたもうひとつハッキリ行かうぢやないか、といひ出したのが明治の初年であります。實は蓮如上人では「眞俗二諦」とは申されぬ。明治の初年に、蓮如上人の念佛の方を眞諦であらはし、蓮如上人の王法をさきとし仁義を本とするといふ方を俗諦であらはした。かやうに、「眞俗二諦」といふことは、明治になつて初めていひ出したのであります。

すると、親鸞聖人が傳授されたところの浄土眞宗の教義は、七百年流れて來る間に、大變化が二度ありました。蓮如上人に於て一度、それが前に申しました事柄で、それから明治時代にもう一遍鮮明になつて眞俗二諦となりました。これは鳥の兩翼車の兩輪の如しといふたものであります。兩輪といふと一つ一つ別々の立場があるが、しかし片方の輪だけを見てゐては一體車といふことが解らぬ。この兩輪を一つと見るところに生きた宗教がある。このレールの上で教を説かうといふので、明治の初めにギユツと押へて置いたのに、明治以後から大正、昭和に

這入つて、一般説教者の話を聞いて居ると片輪です、兩輪ぢやありません。念佛、信心だけで濟んで了ふて、「この上は王法をさきとし……」と、ちよつと裝束の劍先ぐらゐ附加へるといふのでは仕方ない。俗諦教義をいふのは眞宗として本當でないといふなら、それなら車の兩輪なんかといはぬがいゝ。長い／＼問詰つて居る信者でも、片輪で動いて居りますから、極樂へは行かぬといふことになる。俗諦の方を忘れては行けません。こんなことを私が申しますと「河崎の話はどうも窮屈でいかぬ」と、しまひには私の悪口をいひます。どだいおかしな事になつた。さうして一方に於てどうやといふたら、「そんなむつかしいことはせずとたゞのたゞや、悪いことは私がする。煩惱熾盛の衆生だから仕方ない、後世の話は阿彌陀様がする、大手振つて行つてやる」これでは無茶苦茶だ。ところが、本當にさうなつて居る。大抵皆もその仲間だらう。(笑聲)平氣で間違つたことをして居つて、「南無阿彌陀佛々々々々々」とやつたところで、それは空念佛、マア南無阿彌陀佛でもいはなくては、ちよつと體裁が悪いからとか有難屋に見て貰はうと思ふ時「南無阿彌陀佛々々々々々」とやる、私は厭き／＼して居る。その有難いになると墮性や反動性がある。合の手のやうに、傳道者の方で「ああ……」とやると、向ふで「南無阿彌陀佛々々々々々」とやる。また、あれをいふて貰はぬと後の説

教が出来ぬから、三味引と聞き手と二人寄つて合の手を入れて、變なことをやつて居る、傳道者が多い。これちや眞諦もわからぬ、俗諦など問題でない。「凡夫このまゝ……」さういふことにしてふて、蓮如上人の御苦勞を無にしてふた。また、折角に眞宗教徒はかう行くんだ、と明始の初めに先輩が苦勞して數いて呉れたルールに乗らずに、兩輪が片輪になり、兩翼が片翼だけになつた。困つたものです。「人よく道を弘む。道ひとり弘まるにあらず」これでは教は把握されないし人も濟度できない。どんな尊い道でも、道を説く者が注意しなくては光を發揮することはありません。

マアかういふ風にして流れて來て居る間に、急變の時代の中に乗り込んだのですから、吾々は屢々考へたのであります。眞宗教義を皆が寄つて何んだかんだと理窟だけいふて居つて、而も觀念の遊戯だけにして、しまひには極樂があるか無いか、と行きもせぬ者が相談をして居るいつも私はあゝいふ問題を聞いて、かう思ふのです。鼠の一番の仇敵は猫である。猫は忍び足で黙つてやつて來るから困るといふので、鼠が集まつて夜通し相談をした結果、猫の首に鈴を付けて置いたらよからう、さうしたら忍び足で來ても、チャラ／＼音がするから、音がしたら天井へ逃げたらよい、といふ結論に達した。その結論には満場一致だ。ところが、サテ誰がそ

れを附けに行くかといふ段になると、鼠はみんな行かない。行つたら猫に喰はれて了ふから。大抵、極樂の相談もそんなものです。あるか無いか腹切つて行つて見たい、が、皆死ぬのが厭やだから、いつ迄経つても議論が盡きません。さうして夜明して置いて、安心の深い話をしたとて、深いも浅いもない、それは鼠の相談ちや、鈴を附けに行きやせんからあかぬ、かういふ有様を見て居ると、私は厭やになります。けれども、折角尊い教があつて藥が効くなら、ブツスリどこかへひとつ注射をしなければならぬものだナ、かういふことを吾々は深く考へて居つたのであります。さりとて自分一人のものぢやありませんので、皆寄合ふて居る中に種々の議論もありますし、そのうちに水が流れたら大きな川が出来るわい、とヂツと見て居る間に、その大きな溝が出来た。國家非常時の大問題にぶつかつた爲、細々まろくだけれども精神立國の溝を掘りましたり、同信報國の運河を造つたりして、そこで、念佛を信ずる者に呼びかけて行つたところ、幸ひ宗門の上にも大きな動きとなつて現れました。けれども、「あれは宣傳だ」いふくらゐて、舊態依然として居る坊さんもありました。ところで今度、法主台下御自身が奮ひ起たれまして、ひとつ眞宗教學の刷新をしようといふ、大なる道にお出でになりましたので、もう吾々はヂツとして居れなくなつたのであります。ところが、愈々御巡教といふことに定まり

まして、名古屋邊りでも、御親教が有難いといふので何千人の方が寄られました。ところが恐らく御法主が出ておいでになつて、「往生の大事は大切だから、念佛を喜んで浄土に往生せられよ」といはれるだらう、と聞かぬ先からさう定めてみたんでせうが、さうではない。今度の御親教は「方今内外多端である。この際眞宗教徒たる者は宗意を顯揚して皇運を扶翼し奉らなくてはならぬ」これが御親教の中心です。ところが、「方今内外多事多端であるこの際、宗意を顯揚して……」など、いつたら、お爺さんやお婆さんにはわからぬ。「眞宗教徒たる者は眞俗二諦の道を守り、聖人の遺弟たる者は盡忠報國をしなければならぬ」といふが、しまひの教であります。それが眞個に解るであらうか、日常生活に活かして呉れるかどうか。皆が寄つて呉れるのは有難いが、ヒョツとするとおかみそりにして了ふ。これでは困るぢやないか。併し、そんなことをいふても仕様がなないが、法主台下、御裏方が御苦心なさつて下されてあの御主意を、吾等は八百萬門徒の方々に傳へなくてはチツとして居れません。蓮如上人の時代の人々が王法仁義の立場に立つて、國家に貢献したやうな、さういふ美しい信者を今の世の中に私は造り上げてみたい。蓮如上人が念佛を簡易化されたのを複雑にして了ふたが、それを元の簡単な所に戻して、上人の教のまゝに素直に受容れて、よくその分を守り、皇運を扶翼し奉

り、盡忠報國の行動が出来るように、二諦相依の信者を造り上げてみたい。さうしなければ聖人の弟子の一人として申譯がない。日本國家の一員として申譯がございません。それならどう行くんだといふことになるが、そこにレールを敷かなくては機關車は動きませんので、茲に吾々は屢々寄合つて論議に論議を重ねた結果三本のレールを敷いたのであります。それが臨時委員として作り上げたところの、この「同朋箴規」三箇條でございます。何も珍らしいことをしたのぢやありません。そこに眞俗二諦の本當の精神を發揮し、蓮如上人の所謂念佛と王法仁義の教を活躍さして行き、更に遡つて宗祖聖人が朝家の御ため國民のために、念佛するやうにと仰せられた思召に隨ひ、動亂せる國民の思想の上に、動亂せざる眞の堅實なる信念と思想を養成して、國家安穩に、陛下の宸襟を安んじ奉るやうにせねばならぬ、それが如來聖人の御意志を體現して行く眞宗行者の御恩報謝の態度である、と信じた土臺からこの結論が生まれて、嚴肅にこれを發表された譯であります。

第二講

只今申上げましたやうに、眞宗の教義の中心は萬古不易で動きません。けれども、一般傳道

の上に於ては、動いて居ることは否定出来ぬ事實であります。蓮如上人によつて動き、明治初年に動いてゐる。病に應じて薬を與へるやうに、教義の説き方もその時代々々の人に適するやうな説き方をしなければなりませんから、それで、さういふ風に動いて來たわけであります。マア教理を研究する學者は病理學、傳道者は臨床學の方ですから、傳道者はその病に適する薬を盛つて行かなくてはなりません。この點から見て、親鸞聖人は病理學に、蓮如上人は臨床學に適して居られたといふていゝでせう。そこで、蓮如上人の時に、親鸞聖人の教が誰にもよくわかるやうになつた。さういふ變遷をもつて來たのであります。ところが、何か知らん學者は偉いやうになり、説教者迄が學者の眞似をするやうになつて、これをワヤ苦茶にした。さういふことをしてはいきません。説教する人、講演する人は、その範圍で嚙んでふくめるやうに出て行かなくてはならぬ。大學病院の中でも、病理を研究するだけで臨床の出來ぬお醫者は、病人に對して何もならぬ。畢竟、傳道者は臨床醫家ですから、病人の床の側に來て脈を檢しよく診察をして、その病に適合する薬を盛らなくてはならぬ。現代の缺陷がどこにあるかといふことを突き止めて、『大無量壽經』の薬が効くなら、これを盛つて服ませなければならぬのです。そこに現在、眞宗教徒の努めなければならぬ大きな任務があると思ふ。そこでこの薬を盛ると

ころの處方箋といひますか、それを書いたのがこの三箇條の「同朋箴規」である、と、かうお取り下さつたらいいのでございます。

大體に於て考へますと、初めの「己を捨て、無碍の大道に歸す」とある一箇條は眞諦でありまして、次の「人生を正しく見て禍福に惑はず」、「報恩の至誠を以て國家に盡す」とある二箇條は俗諦なんであります。その意味で眞俗二諦、これで行くのです。蓮如上人が念佛を信ぜよとおつしやつた、この信心念佛は初めの一箇條、それから、王法をさきとし仁義を本とせよ、と仰せられた問題は、次の二箇條に出て居ります。内容は少しも異ひません。あらはす言葉の上の文字が異つて居るだけである。要するに、「眞宗信者として一體、君は何を信じて何をするんだ」と人が問ふた時、「眞宗信者はこの三箇條を實行するんだ」かう行きたい。丁度、蓮如上人の長々の御化導をエキスされたのが『改悔文』、あれが眞宗信者の信條……といふのと同じに、一面からいふと、これを吾々は現今の『改悔文』……かう行きたいほどに、この三箇條を尊重して行かうといふのであります。でありますから、講釋したら長くなりますが、一應だけは、三箇條の内容は私がかう頂いて居るといふことを申上てみたい、これから私の頂いた味ひを申上げるのでございます。

己を捨て、無碍の大道に歸す

これは私は「己を捨てる」、「無碍の大道に歸す」かう二つにハッキリ分けて見たらいいと思ふ。さて、己を捨てるといふは、どうするんであるか、今晚はこれだけひとつ卒業したらいいでせう。名古屋ではかういふ言葉を使ふかどうか、私は名古屋へよく来て居り乍ら、餘り聞きませんが、私は兵庫縣の生れですが、兵庫縣では「おのれ」といふ言葉をよく使ひます。それで考へ違ひすると危ない。「おのれ、覺えて居れッ」あの時の「おのれ」は自分のことぢやない。「おのれは何んと思ふて居る」と、疝癪を起して喧嘩をする時の「おのれ」は、いつでも自分のことでなく相手のことです。早合點して今晚歸る人があるか知れん。己を捨てよだからいゝ棒を貰つたと思ふて持つて歸つて、「貴様は出しやばつていかぬ」と振廻されたいへんです。他の言葉では、「自分を捨て」としてみてもちつとハッキリしない。漢字で「己を捨て」とすると一番強く響く。お聖教の上には「おのれをわすれ」とあります。これはよくいひます。この間も魚津で「己を空しくして、とされた方がよかつた」といふ話もありましたが、どつちやでもよろしい。吾々は最も強く響く方の言葉を探つたのです。今の人はいゝ加減に撫

でゝ居つても効かぬ、慣れた薬では効かぬから、外科手術で以て一かばちかでいかねばならぬサア己を捨てるといふたら、何を捨てるのかといふと、「あなたの我慢、あなたの理窟、あなたの智慧、あなたの苦勞、何もかも捨てなさい」「捨てるといふてどうするんですか」「口に出していはぬやうにしなさい」「眞宗の信者は己れがこれ程やつたのにも何んともいはぬのか」「いはぬのぢや」かうです。長い間苦勞したのに……それもちよつとも思つてはならぬ。親父の苦勞を忘れるなど、息子によくさういふが、あれは捨てなくてはいかぬ。己を捨てるのです。大抵、家の中の喧嘩を見て御覽なさい。己の角の突き合ひです。「私ほどの苦勞人は無い」かうやるんです。「ちつたア、私のことも思ふて呉れ」とかういふんです。それがいつでも家の中を引ツくり返す。碌でもない己の顔を出すからいきません。ちつと引ツ込めなさい。スツカリ己を捨てなさい。己を捨てましたらどうするんです、といふたら、相手の爲に骨折りなさい。偉いことです。こんなことは人間で出来ません、といふ。さうぢやなア、男は出来んか知らんが女は出来る。先生はまた女を苛めるか、苛めるぢやないが、女の人は皆やつて居る。己を捨てゝそれでいゝ氣になる。どういふ所に捨てゝ居るかといふと、子供の世話をするのを見て御覽、あの時は己を出して居るか。己を捨てゝ居る、子供が第一の位置に居り、親はといふ

たら第二、第三、子供の爲には下女、下男よりもつと下です、何かといふと、食ふて吐き出した物でも黙つて食ふし、子供の大小便の世話もするし、大小便をやつてやつた後で、手を洗はんで御飯を食べる……：……覚えがあるだらう。(笑聲)吾々の家でもそれをやつて居る。何んでもない。あれだけはお膳のふちで垂れ流しでやられたても、ハアハアと感心してるだけで何んともありません。迎もぢやない、あれは佛様ぢや。

如來の作願をたづぬれば 苦惱の有情をすてずして

廻向を首としたまひて 大悲心をば成就せり

あれです。佛様になつたら、苦勞して惱んで居るものを見て居れぬから、よく世話をする所に大慈悲が動いてゐるのです。あれが己を捨てた世界、お母さんになる人は己が捨らぬ道理はない。あなた方は己が捨てられぬといふことは、お母さんにはなれぬ人である。お母さんが子供の世話をして行くあの氣持、一代の間嬰兒おんごの世話ぢやと思つてやつたら何んでも出来ませぬ。電車、汽車の中で美しい着物を着て居る婦人は、子供を抱かぬ時はツンとすまして居るが、抱いた時には恥も外聞も無い、懷をパツと開けて大きな乳を出して吞ましてゐる。また、汽車の中でも平氣で襪ひざを取替る。取替へたのを捨てるかと思ふと、油紙に包んで袋の中へ入れて持歸

る。(笑聲)あゝやつて居るのを見ると、私などいつも、「あれが佛様だナ」と思ふ。苦惱の有情をすてぬ佛様のすがただと思ふ。これだから女は濟度される資格があります。佛になれる種子があつた。あのまゝ伸びて行つたらいい。覚えがあるだらう。「一生の間、嬰兒おんごの守まもり」いふたら、「さうです」「あなた、年の行つて居る者を嬰兒おんごとは思へませぬがナ」「違ふく、年寄つた者だとして天降つてでて來たか、あれは嬰兒おんごが大きくなつたんぢや。嬰兒おんごだけ世話して、年寄つたから世話せん……：……それではあかん」。さういふと、ちつとは「私が」とれて行くだらう。みんな、嬰兒の世話で一生を通るんす。縁の下の力持をやる、捨石になる、それさへやつたら美しい人間がそこに出来る。己を捨てるといふはみんなそこへ行くのであります。ところが、今の者は段々子供の世話をせんで、白粉附けるにかゝりはておやぢの手を引いて子供の手を引かぬから、ちよつとこれは困る。尠くとも眞宗行者だけは、娘に己を捨てることを教へなければ、佛の道に生きるとはいへませぬ。いやきれいに見せることも出来ませぬ。阿彌陀様は衆生濟度することにかゝり果てゝ居られる。全くそれは不思議な程であります。親が子を抱く以上でありまして晝夜一刻も休みはされませぬ。

彌陀成佛のこのかたは いまに十劫をへたまへり

法身の光輪きはもなく 世の盲冥をてらすなり

休みなく衆生を濟度にかゝつて居るその佛を憐れ、その佛に私淑するのだ。その佛の心を我が心にするんだ。それが佛教に生くる所詮ではないか。この信念から己を捨てる大なる藝は出て來、國家の御奉公の上に大きな力がきつと出て來る。眞諦の念佛を信じた所に、そのまゝ俗諦の世界が出るのだから、眞俗二諦は離すことが出來ない一體の生活原動力となる。私はさういふ念佛を喜ぶのです。男だつて矢張りそれは出來ます。男だつて己を捨て、一生懸命に周圍の者を世話してやるんです。恩をきせずには世話をするんです。なさは人の爲ならず、それが廻つて自分の爲になる。いろ／＼なことがこの頃は世の中に出て來る。鐵砲かたげんでも、防護團や國防婦人は國防の世話をする。國防は外にも向ふが内へも向ふ。その世話する力を家の中にもつと打樹てたらどうか。その氣でをつたら必ず家は工合よく治まる。家の治まる所に町が治まる。町の治まる所に國が治まる。すべて、うはつらだけに流れたら駄目であります。現代の世の中が治まりが付かぬのは、己を大切に捨て捨てる者が居らぬからです。そこに、いろいろの對立の關係がある、争ひが起る。みんな自分だけを大切にして相手の上を見ず、世の成り立ちを誤つて一致してやる協調の力を失ふから、しくじるのです、吾々は己を捨て、空にな

るのぢやありません。己といふ小我を捨てると思ひもよらぬ大きな境地がある、晴々してゐて無限の力強さが湧く天地がある。そこは自然に「自」と「他」とが融合して、主客圓滿にピッタリ行く協調の世界があります。親一人子一人、その各々が勝手の世界に居らず、親と子が一つになる時は、親は子を憶ひ、子は親を念ふ、そこには己がない無我の世界に這入つたすがたがある。吾々大乘佛教徒はこの無我の世界を掴まへなくてはならぬので、これをあらゆる方面に生かさうとするのがそれが根本の面目です。小我が無くなつて、大我の世界がこゝへ出る。一分を盡して然も全體に通ずる無碍の世界である。その一分の微力は二倍にも三倍にもなるのであります。蓮如上人が、「佛法は無我と仰られ候」といはれる、それは國にも家にも用ひられてよい。私のことはどうでもいゝ、皆マア喜べ、皆安心せい、といふ氣にみんながなつて呉れたら、貧乏、金持、どうでもいゝので、そこに一家一國揃つて喜んで美はしく行ける。その極意が眞宗の教義の中にちやんとあります。その手本が阿彌陀様です。阿彌陀様は獨り極樂で晝寢をして居るのでなく、衆生濟度の爲に休みなく動いて居る阿彌陀様、これが佛です。その佛に攝取されて、その佛になりたい者が、自分だけ樂をして居つて、他は困つて居らうが頓着ないといふなら、極樂を戸まどひして茶の木畑へ這つて了ふものでないか。それは惜しいこ

とに道が違つてゐます。智慧の無い徳の無い吾々だから、さう己を振り立て振廻しても、役に立たぬ。カラツと捨てやうぢやないか。小さな醜い穀にはまり込んでやたらにもがいて、いらだちいきまいたところで何になる。困つたですナ。一番大切な己だからなかく振り切られぬ殊に現代の學問して居る人はこれが出来ません。困つたものだ。現代は己といふものをこそ大切するやうに教へて来た。「自己を發揮せよ」「私を理解せい」などいふ。「どうも同情が無い」などいふだらう。自分を他の上に擴大して己の満足を得ようとして居る。奉仕とか己を捨て、他の犠牲にならない學問がはやるのである。それでたまさかに家の爲に、國家の爲に盡しても何にも自慢するに及ばぬ。ちつとは周圍の爲に自分を忘れて動いてやりなさい。窮窮でも無理でもない。動いてやるだけで立派な佛作佛行となる。それが己を捨てる世界です。ところが世界の各國でもお互に手を引いて平和で行かうといひ乍ら、その後ろでは一寸でも一尺でも自分の方へかきよせやうとする。きたない我情がうじや／＼してゐる。己がなかく捨たらない。人間はお互に笑ふて仲好く暮したいといひ乍ら、自分の顔が立たぬと疥癩を起す。その己をさらりと捨てたら笑ふ世界が出る。すると今度は、「私一人、どうして辛抱せなならん」とまた力んでいふ。それが己です。力まんでよいあなた一人辛抱したら後の九人が喜ぶなら、だ

まつて一人犠牲になつたらいい。その實それは空しい犠牲にはならぬ。自然に悦びが廻つてくる。また他と相談してから辛抱するのではない。我行精進忍終不悔と、佛の道をまつしぐらに踏み進むとき、自然に我一人忍んで行かうといふ智慧が生れる。それが佛の大きな力であり、この力は今のこの足どりの上に現はれるのであります。かういふ所へ出て行けたら世の中は工合よく活き活きと向上するのです。お互に一家穏やかに圓滿に暮さうといひ乍ら、ひよんなところまで歩み迷つてゐる。狭い一人だけの穴を掘つて、その穴の中へ這入つてもがいて居るからいきません。私は家の中で己を捨て、「私の體が役に立つなら、どうなと皆思ひ切つて使へ」といふ。それが一番いい。「私を楽しませやうに、お前等動け」といふから、なかく動きません。さうぢやない。「私、出来るだけ動いてやるから、サア／＼何んなり用事を持つて來なさい」といふと、その割に持つて來ないのです。ケチ臭い根性はやめなくてはならぬ。それについて、この間も兵庫縣で、私より年の寄つた七十臺の、相當財産もある人がやつて來て、「先生、息子を大學から出した。ところが、今の若い奴は意氣地が無いので、まだ親爺の脛を嚙つて、この爺をえらい目に遭はせます」かういふのです。さうして、その息子が私の所へ來たら、何んとかいつて貰ひたいといふやうなことをいふ。それで私はその人にいふてやりま

した。「私もよう脛を噛つて居るがネ。お互にやつて居る。これはお互にあかんよ。死ぬ迄脛を噛られるよ。噛らしたらいゝがね……」
「どういふ譯です」。「教へてやらう。君、蠅螂がまごりを知つて居るかい……あれは面白い奴だ。君は知つて居るか知らんが、なにも學問だからいふが、あれは一年に一遍つるむ。すると、雌蠅螂の腹に子が宿る。子が宿ると雄は雌にその場で食はれて了ふ。本當に命がけた、父親を食ふて、母親が腹の子を養ふ。なか／＼あれは大慈悲の親だよ。君等はまだ雌に食はれただけでも悦ぶがよいなア……」
（笑聲）といふたら、「ようぢや」といふ。「それぢやから、息子が脛くらゐ噛るんなら、それだけ仕合せだ。自分達の生んだ子だ、一生苦勞したらいゝ。それが親様だ。佛様に近かい。その氣になつて行けば、家の中は小言はないよ。息子も立派になるよ」
「もう先生わかつた。一生いはん」「いはなんだら、いゝお父さんだといふて、皆が大切にする。その方がいゝ。大きな慾を出せ。小我を捨てて大我の世界に這入る時、美はしい家が出来ると」
「ようわかりました。長い説教を聞くより、蠅螂の話でわかりました。もう何んともいひません」と、その人はいふて居りましたが、これは皆さんに強ひるのでない。河崎自身は茲に肚を据えて居るのです。子供のことにも愚癡は出ぬ。そこにはじめて親の力も出るし、家のことにも不足はない。そこに貧乏は貧乏乍ら通れま

す。それだけの腹と親切で行つてやれば、みんなが不足や小言は無い、こだわりのない潤ひのある世界があらはれる。洵に有難いものです。財布でも隠さうとすると探し出すが、出しツ放して置いたら、「失なへたらいかんが」といつて息子が心配する。己が捨てた時に、彼と我と一の世界が生れる。彼と我と二つに分けて居る所に、ゴツ／＼した突當る世界があり、お互に不足小言で日も足らず、嫉み妬みで夜も寝られぬ。一分の心の持方で千萬里の道が違つて来る。かういふ眞理、それをちつとでも實際的に活用すると、何のことはない、對立はなく、衝突は無く、美しい一つの天地が拓けて來るといふことになるので、これ實に「己を捨てたる」風光であると私は思ひます。

第二は、生活の上で己を捨てるではありません。信心の行者として、念佛に對する態度に於て、己を捨てゝ行かなくてはなりません。蓮如上人が「はからひをすてよ」と、おつしやつたのは、これをいはれたのであります。「どうもわかりません。薄紙一重の所が」などゝよくいふ人がありますが、己の智慧など出さんでよろしい。わかるわからぬのこちらの批判であつて、そんな小ぼけな智識に乗せた上で信ずるのでない。吾々の尺度しゆどでは佛の大きな肚は村度は出來ない、己を捨てゝ教の前に頭を下げて跪く。それで澤山である。さうすりや念佛して助か

るぞ、といはれたら、さうでありますか、と一遍にシユツと行く所に、往生一定御助け治定の力が、そこに湧く。我が智識以上の力であるから、何とすることも出来ず、しやうもない。さういふ態度をとるのが、眞宗教徒の通る道であります。眞宗教徒は生活の上に於ても、信仰の上に於てもいぢけた根性はもたぬ、さつぱりしてコセノゝしたことはやらぬのです。竹を破つたやうな氣分で「よし、まかす」と出て行くのです。まかせた上は極樂へ連れて行つてよし、何なら地獄に放り出してもよし、あなた任せ御自由になされましとさらりと己を捨て、佛の前に跪けば、どんな人でも大安心で、直ちに佛の攝取の世界に這入ります。そこで、どう行くんだといふと、次の「無碍の大道に歸し」といふ言葉でございますが、これに無我の風光があらはれます。それを話しますとズツと長くなりますから、これは明朝引續いてお話することに致しませう。

第三講

昨晚のお話に於きましては、總論を終つて第一條の「己を捨て、無碍の大道に歸す」といふ下で、「己を捨て」といふことに就てお話を致したのでございます。

私が、この三箇條を他でお話致しまして、一番質問を多く受けましたのは、「この三箇條の中に佛がない念佛の文字がありませんが、これでいゝのですか」と、かういふやうな問が出るのです。これはよく氣が付いた問かも知れませんが、私の感じではこれに佛はある。これに念佛がある。これに信心がある。これに佛法があるのです。同じ着物でも袈裟もあり、羽織袴もあり、モーニングもあるやうに、それが時代に適するやうに言葉の上に注意を拂つたのであります。さてその中で一番大切な問題は、念佛者として態度を定めなければならぬ、「それが己を捨てる」ことであります。容易ならぬ問題でございます。だから眞宗教徒として這入り易いやうな道ですか、或は容易にこれは這入れぬか知れません。吾々見て居りましても、遠慮無いひみますと、多年の間説教を聞き法座に列り乍ら、信心の護られぬ人がザラにある——といつてもいゝくらゐです。信心が護られませんか、法義の上にての念佛行者の態度があらはれぬといふ風で、それはどうかといふと、これは易いやうだが、矢張りそこには、最後になつたらすつかりおまかせし切つて、そこに一の活路を開く、それが白道を歩むのですから、これはなかく入り易くして入り難いのでございます。無我と肚を定めてかゝれば易行易修ですが、自分といふものをもつて居りましては、これはいけない。だからから、昔から教の前には、「己

を忘れなければいかぬ」、「己を空うしなければいかぬ」といふ、それを今度もう一つ力強くいつて、「己を捨て、」と呼びかけたのでございます。現代人はどこに缺陷があるかといふたら、「我」の執着、己を捨てずして榮耀ヨウウが貝の中に閉ぢ籠つたやうになつて、俺が一番肝腎で、俺が一番大切に、彼は過れり我は正しとする所に、そこに反撃があり衝突が起るので、これが現代のすがたでございます。それで皆が非常時は厭や、動亂の世界は厭やと世界全體がその心持で動いて居りますが、平和會議といひ乍ら、その平和の極致は己を捨てる所にあるのにこの簡單なことができぬ自分の方は向ふに進出しても、向ふの方はこちらに喰ひ込まぬやうに制限して、さうして、平和を得ようといふのだから、それでは駄目です。己といふものを強く有つて居り、一指も觸れさぬやうにして周囲の者と協調しようとしても、それは駄目で結局争ふばかりありません。親鸞聖人は、邪見憍慢の惡業生は信樂を受持すること難い、といはるゝ。この己を立てる者は佛の前に問題にならぬ、といふ嚴肅な言葉である。己を一遍投出して相手の爲に生きて大なる布施の行をやる、かう行きたいのです。そこ迄行かなければ本當のものはお出ないのである。日常の行ひだけでない。法義を聞かれます上に於ても、己を立てられますから教に這入れません。私の意見に合はぬとか、そこが理解が出来ぬとか、自分の行届かぬ智慧を阿

彌陀様の方に持つて行つて合はさうとするから、迷つた智慧とさつた智慧は、木に竹を接がうとするやうなもので、逆も合はぬのであります。それで惑ひや疑ひが出て来てはてしがない吾々は佛の前に己を捨てるのです。たゞすなほに、「ハイ」と受けるだけの氣持がなければ、この教に這入れません。そこに行けないといふのは、己を捨てぬからであります。

この會館に御因縁の深い南條博士が、よくお話をなされた言葉があります。曇鸞大師の言葉の中に、「虚にして往いて實にして還る」の四字でございまして、私は座右の銘として書いて置きたいほど、これを有難く思ふのです。例へば酒を買ひに行きます時に、酒の瓶を綺麗に洗つて一滴の水も残つて居らぬやうにして、その瓶を持つて買ひに行けば、一升徳利なら一升の酒が一滴も残らぬやうに這入ますから、即ち實にして買つてかへれる。けれども、酒買ひに行く時に若し、一勺なり二勺なり水が瓶に這入つて居ると、買つてかへる酒が一勺なり二勺減りまして、酒の味も變る。それで、買ひに行く時は、空の乾いた瓶を持つて行かなければなりません。佛の教の前に行くのには、酒買ひに行くのだといふ氣持で、こちらの心の瓶を綺麗に洗ふて空にして置く、さうしたら、いはれただけをスツカリ満足して入れて持つて歸れるといふのが、「虚にして往いて實にして還る」といふ言葉の味はひです。ところが、現代の人は、な

か、虚で行きません。自分のものを有つて居ります。乞食の宿替のやうに碌でもないものを持つて居つて、僅かな智慧をはたらかして、これを理性で批判しようとか、常識で判断しよういや面子がどうのこうのと云ふから、世間が六ヶしくなり、佛教を百年聞いても駄目です。そこで吾々は、端的に道を進んで行かうといふのです。信ずる人もあり信じない人もありますが信じない人には僕は附いて廻らぬ。それは酒飲みは酒飲めばいい、餅食ひは餅食へばよい。酒飲みが餅食ひと喧嘩しても果しがつかぬ。餅食ひが酒飲みに小言いふてもあかぬ。多くの人はバラ／＼に地獄、餓鬼、畜生、と銘々好きな道中をして居りますが、私はみんなと一緒のお付合ひをするのはいやです。私は一人行きます。釋尊も「獨生獨死獨去獨來」とおつしやつた。そこが宗教の強い處です。仰せのまゝに随ふこの一つ。往生の大事はお前どう行くんだといふなら、私は阿彌陀如來の念佛に救はれる——これ全く信じて疑はない。それに面目がたつのかお前の理性に合ふのか、算盤で割切つたやうな答へが出るのか、他人の評判、面目、理性、それ位の尺度ではない、割切ることが出来る出来ぬは別の問題、答が出る出ぬは別の問題、如來の智慧海は深く廣くして測り知られない、二乗の聖者ですら、忖度することが出来ないといふ況んや、凡夫に於ては不思議な世界であるから、仰せのまゝにたゞ彌陀に助けられると肚を定

めて行く、その大なる力で行くのです。忠義の講釋を聞いて結論が出なければ腹が切れぬでは忠臣にはなれぬ。己は捨たらぬのです。己を捨てるといふ、この大きな肚の据りが出来なくては、國家も活きなければ、家庭も活きなければ、宗教も活きない。私共は家庭に於ても、家の爲に一身を捨てる。一族の爲に我が一身を提供する。私は親ですから、私がヘコタレたら親爺は落第しなければならぬから、棺桶に這入る迄私が世話をしてやる、といふその決心態度があつたら何でもない。さう肚定めて行くのです。世の中の入はよく「子供が多いから苦勞する」といひますが、そんなこといふたらお釋迦様に叱られます。「何んで生んだ」一番ハツキリして居る。だから、私が生んだんで、私が世話しますから佛様に迷惑はかけません。その爲に命をとられても骨を折られても議論はありません。自業自得です。これだけの肚定めて己を捨てる所に、親爺に光明が耀いて家の中が光るのであります。阿彌陀様は己を捨て、十劫正覺の曉から、吾々の爲に一遍も休みなく苦勞なされて、ちつとも小言をおつしやいません。この阿彌陀様になりたいと憧れる眞宗教徒の私共ですから、人生の苦勞くらゐは通れます。己を捨て、一族の爲に盡すといふことは、誇りでも何んでもない。これは夜が明けて明るくなると同じ、議論をせんと行ける世界で、その世界へ出るんです。「私共後にしてそつちからやりなさい」と、

いつでもさう行けばよい。己を立て、周囲を犠牲にしようとする。それは非常に誤まつた考ですがこれが深く現代人に食ひ入つてゐます。だから若い者は息子迄、ちつとも親は私を理解して呉れないとか、同情が無いとか、求むる所が多い。現代人の通弊は求めることが多くて、與へることが缺けて居ります。貰ふものは當然、與うるものは恩をきせるといふのですが、願くは求むる乞食にならず、與へる長者になりたい。家の中でも國にしてもさういふ氣分でこのレールに乗りますのが、己を捨てた世界です。これくらい申上げて、昨晚のお話の補ひと致したいと思ひます。

で、己を捨てましたら、空になつて了つたやうですが、水一滴も這入つて居らぬ空瓶提げて酒買ひに行つたら、瓶に一杯の酒を入れて持つて歸ると同じで、空になつて居るのぢやありません。今迄の間違つたるさういふ考へを捨てる所に、正しい強いものを一杯入れて歸るのです。その入れて歸る道を説いたのが次の「無碍の大道に歸す」といふ言葉であります。これは酒を買ふて歸る世界でございます。ところが、この「無碍の大道に歸す」といふのを、つまり「己を捨て、阿彌陀如来の前に跪く」としたらどうかと注意を與へた人もあります。或は「己を捨て、南無阿彌陀佛の中に入れ」かういふ工合にしたらどうか、といふ批判も聞きました。ある

人は、ちよつと變つた男ですが、この三箇條は洵にいゝが、「己を捨て、南無阿彌陀佛」と、かういふ風にしたら尙ほよかつたらう、と批判して居られたことがあります。御尤もである。吾々もそれは知つて居りますが、「吾々は己を捨て、南無阿彌陀佛」といはず、「己を捨て、無碍の大道に歸す」と言葉を新たにしたらわけで、これは南無阿彌陀佛であります。私は多くの眞宗教徒が、餘りに南無阿彌陀佛を冒瀆したことを、甚だ不愉快に思つて居るものです。尊い念佛をば碎いて、下手な料理人が作身を作るやうにクニヤクニヤにしてふた。有難い念佛を息子や嫁と喧嘩して負けた時にあてこすりに使つたり、疔癢を起したり、クシヤ／＼と小言いひつゝ、誰かにあたる積りで「南無阿彌陀佛」といつたり、風呂に這入つて足手伸ばして「ヤレ有難い極樂ぢや、南無阿彌陀佛」といふたりして居るが、「下に火の燃えてあることがわからんかい」と私はいひたい。そんな上調子上すべりの念佛に佛は苦心なさらぬのである。それには人々は念佛を無茶苦茶にして居る。そんなに念佛をマア餘り皆が變なことにして居るから、これは御免蒙つてもつと眞實にふれるために、茲に「無碍」といふ言葉であらはして來たわけです。「無碍が何んで念佛ですか」かう直ぐ來られますが、それぢやからいかぬ。無碍が念佛といふことがわからんぢや困る。それでゐて長い間眞宗の説教を聞いたといはれますと、臍が

茶を沸かす。皆さんのお内佛の眞中に佛の御繪像、或は御木像をお祀りしてあり、その右と左にある御懸字に何んと書いてあります。あれは眞中の佛の偉大な力が書いてあるのです。「歸命盡十方無碍光如來」「南無不可思議光如來」と書いてあるでせう。これによつて眞中の佛が説明されてあるので、この佛のお力で救はれる。すると、「南無阿彌陀佛」のお力を知るには「無碍光如來」と申す方がよく解る。佛に違ひはないが云ひ現し方に違ひがあるだけであり、一切の障礙物を打破して、どんなものでも我れ救ひあげるだけの絶對の威力を有つて居る、といふことをあらはされるのが無碍の光、それが無碍光如來です。だから親鸞聖人は、「和讃」の上でも、到る所に無碍光の徳を讃嘆なされて居るのでございます。二、三の例を挙げますと、

無碍光佛のひかりには 清淨歎喜智慧光

その徳不可思議にして 十方諸有を利益せり

と讃嘆なされたり、或は、

盡十方の無碍光佛 一心に歸命するをこそ

天親論主のみことには 願作佛心とのべたまへ

願作佛の心はこれ 度衆生のころなり
度衆生の心はこれ 利他眞實の信心なり
と、讃嘆されてありますが、それではかういふ風に「無碍」といふ言葉は幾らもあり、この無碍光の感化を受けたものは、所謂念佛の感化を受けた者は、どんな効果があらはれるかといふと、

無碍光の利益より 威徳廣大の信をえて

かならず煩惱のこほりとけ すなはち菩提のみづとなる

讃嘆なされてあります。また、

盡十方の無碍光の 大悲大願の海水に

煩惱の衆流しぬれば 智慧のうしほに一味なり

と申されてあるのです。たゞ茲に擧げたのは五首に過ぎませんが、まだく、幾らでも擧げることが出来ます。大體この御讃嘆によつて「無碍」のお言葉の見當がわかります。阿彌陀佛の衆生を救済し給ふ偉大な力をあらはす言葉として最もこれは適當です、また「阿彌陀佛」といふ言葉は、はたらきではなく佛のお徳を讃嘆した光明無量だから阿彌陀佛といふ、壽命無量だか

ら阿彌陀佛といふと、『阿彌陀經』にありますやうに、佛のお徳であります。そして、このお徳のある佛をたのみたてまつるから「お頼み申します」といふことが「南無」と云ひ「歸命」といふ言葉となつて居るので、「無碍光」はこの阿彌陀佛の偉大な衆生救済の力をあらはしたものの、この阿彌陀佛のお力が吾々人生に加はつたのが無碍の大道となるのであります。このお力によつて救はれると、人生は大手振つて歩けるといふのが、親鸞聖人の頂かれた信仰で、所謂『救異鈔』の七節はそれです。

「念佛者は無碍の一道なり。そのいはれいかんとなれば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪惡も、業報も、感ずることあたはず、諸善もおよぶことなきゆへに、無碍の一道なりと。」

吾々はあちらに行つては打ち當り、こちらにいつては行き當てつ困つて居る。そこに、苦しみとか、悩みとかいつて居るのでありますが、一體言葉は生きて居りますから變つて行きます。近來は「行當る」でなく、頻りに「行き詰る」といふ。これは近代人の代名詞くらゐになつて居るといふ風で、政治も行き詰り、教育も行き詰り、宗教も行き詰り、何もかも皆通じが付かぬやうに、脹滿のやうになつて行詰つて居る。有碍うがいです。障害物に出會ふてよう行かぬといふ風

であります。行き詰まつたらぶつかつて突き破つて行つたらいいぢやないか。僕等には行き詰りはありません。念佛者は無碍の一道——この大きな力を以て進んで行くんです。この間もさういふ話をしましたら、「先生も、大分年が行つたから弱つたらう」といふ。成程、この頃も腰が痛くなつて伸びないので、甚だ困つた。知つた人が灸を据えて呉れたので、どうやら腰が伸びて來たが、まだちよつといかぬ。どうせ年と共に行詰るやうであります。併し、「私は君等のやうに行き詰まらぬ」といつた。打開の道がある。不足や小言はいはぬ。新しい自動車でも乗換ないで十萬哩も百萬哩も走れるかい、旅から旅へ六十七年の間使つた體だ、あつちこつち機械が損じて、古自動車のやうになつて居つても、乗換は出來ぬから、しまひ迄乗つて行かなくてはならぬ。そのうちにガソリンが這入らぬやうになりタンクも役立たぬやうになるだらう。さうなつたらどうなる。行き詰るかといふと、決して行き詰らぬ。外へ出んで家に居つて適ふだけの用事をする。孫の世話もしたらいい、庭も掃けます、草も引ける。それもいいけぬやうになつたら……行き詰まらぬ。机のふちに坐つてゐる。机のふちにも坐つて居れぬやうになつたら、棺桶が待つて居る。ちつとも行き詰まらぬ。どうせ生れた時に盥で洗つて貰つたから、また盥に這入るんだ。盥で湯灌して貰ふたらいいのに、この頃はアルコールで拭い

たりする。私は湯灌が好きです。湯で洗つて貰ふたから、湯で洗つた方が綺麗になつていゝでないか。それは衛生的だとかいふので、死んだ親でも微菌は厭やだから消毒する。それでアルコールで拭く。それも家内の者に拭かさんで看護婦に拭かす。不孝者の寄合ひだ、厭やだなアと思ひます。私はマアさう行くんだから、行き詰りはもぢません。死んだ先はどうかといふなら、散るときが浮ぶときなり蓮の華だ、阿彌陀様がちやんと待つてゐて下さる。親の元へ歸るのだ。私はもうそれでいゝ。親がある以上、また歸る家がある以上、何も心配せず親にまかせたらいゝ。こゝに安心すると世間のどんな苦勞も生死苦海に居るから當り前ぢや。苦勞すりやこそ味ひがある。子供で苦勞するのも好きで生んだんぢやから仕方ない。「汝に出でたるものは汝が解決せよ」この大なる決心覺悟さへもつたら、人生に行き詰りはない。その大きな力に這入つて行くのが「無碍の大道」です。阿彌陀佛は行き詰りが無い。諸佛菩薩は餘程偉いが、惡人凡夫の前には行き詰つて逃げて行く、阿彌陀佛だけは、どんな罪惡生死の凡夫も俺が救ふて、俺が正しく佛にしてやる、とおつしやる。吾等の親元は丈夫である。どんな苦惱も皆解消する。茲にすべてが打開されて行く「無碍の大道」がのべられてあるのです。この偉大な佛の力を念佛の中に與へて下さる佛の仰せを頂いて、吾々はこの大道を進んで行きたい。この教を

第一義としてこの教の前に頭を下げて行きたい。人生を正しく見て行くといふことが出来るのです。さればとて、この教の前に頭を下けたとて、下駄の鼻緒を上げることは佛は教へて下さらぬ。飯を炊くことも、ビタミンのA・B・Cも教へて下さらぬ。けれどもそれは自然に覺えるやうになる。阿彌陀佛は俺は本當に佛にする魂の世話をするのだ。後のことは他の者が世話するとおつしやる。だから、世間の教育は、鼻緒を上げたり、飯を炊いたり、金を儲けたり、様々なことを教へて呉れるので、吾々の迷ひを轉じて悟を聞いて行くといふ根本は、その世間の知識からは出ない。算盤からは割出せません。ビタミンの中には無い。顯微鏡の中にも無い。これこそは佛の世界に屬することでありますから、これをたどつて行くのです。私は強いて押賣はしませんから、好きなら聞いたらいゝし、厭やなら聞かんでよろしい。あなた方が地獄に墮ちようが極樂に行かうが、こつちはちよつとも心配せぬ。心配したら神經衰弱になる。私は私でズツと行く。だから、世間にも矛盾しません。衝突はちよつともない。それは着く場所が定まつて居るからです。けれども、どんな先生に尋ねても、生れた前を、死んだ先を教へて呉れません。たゞ佛のみが「俺が連れて行く」といはれるから、「然るべく願ひします」とハツキリまかせて了ふ。それを今の人々は勿體振つて、「連れて行つて下さるか知らん……」

と、もう一遍念を押す。「間違ひありませんか」と念を押すが、阿彌陀佛は十萬億土で今現に在りて説法したまふと教へられて居りますから、どんな智識があつても、それが役に立つんじやない。それ以上の根拠があつて引き取られるのが佛の大道であり、この大道の前には世間の制約、拘束は物の數にはなりません。吾々は聾で耳が聞えないから仕様がな。經典に書いてあるとほり如來の教法を信ずるより途がない。そこで佛と自分とピッタリひつついて行かうぢやないか、さうしたら一切の障害物はない。そこ迄御一致が願ひたい。「無碍の大道に歸する」んです。これが善人も悪人も愚者も聖者も行ける道で、智慧ある者も智慧無い者も行けます。けれども、腹一ぱいの時は、どんな御馳走があつても箸を取る氣がせぬ。だから、古の聖者はいふたのです。「世間の智慧の勝れた者は、佛教は聞けぬ」と。甚だこれは困つたことだが、世間の智慧よりもう一段偉い教ですから、世智辨聰は教を理解することが出来ぬ、と示されて居るのです。で、私共は、あれはあれ、これはこれと區別しなくてはならぬので、阿彌陀佛に息子の相談を持つて行つてはいかぬ。阿彌陀佛には最も深い魂の問題、往生の大事だけお救ひを受け、さうハッキリと肚を定めて人生を渡る、さうするとそこに御利益を蒙る……といふと、豊川稻荷のやうに聞えておかしいが、そこに無碍光の利益があるのです。

無碍光の利益より 威徳廣大の信をえて

かならず煩惱のこほりとけ すなはち菩提のみづとなる

と、私は洵にこれが有難い。これが無ければいけません。

盡十方の無碍光佛 一心に歸命するをこそ

天親論主のみことには 願作佛心とのべたまへ

願作佛の心はこれ 度衆生のこゝろなり

度衆生の心はこれ 利他眞實の信心なり

佛になりたいといふ考へは、あれを濟度したいといふ心である。そこに、小我を捨て、大我の世界がある。この世界に私は這入る……這入つて居るといひたい。それが信心の行者、それが佛教徒です。決して自慢をするんぢやありません。私は一昨年三月から全身濕疹に罹つて縋帯で體を巻いて了ひましたが、昨年その中にゐて當會館でお話をしました。昨年七月になつて漸く病が解消したのです。「今年はどうか」と、只今もお尋ねを受けて、「マア大したことありません」と申しましたが、私は遠慮しません。大したことがなければ大したことかない、治つたら治つた、これでいゝ。だから、念佛が理解出来たら出来た、教法が理解出来たら

出来た、といふことは決して誇りでなく、これは正しき告白であります。さういふ點からいふと、無碍の大道を歩む人々の利益の非常に有難いことがわかるのでございます。

盡十方無碍光の 大悲大願の海水に

煩惱の衆流歸しぬれば 智慧のうしほに一味なり

私はいろ／＼の問題にぶつかりますが、いま皆さんがお読みになつた『歎佛偈』にも、阿彌陀佛は十劫正覺から忍受不悔——忍んで後悔せずに行くといはれてある。それにあやからうとする吾々は、どんな苦難にぶつかつても悲鳴を揚げません。これが人生だ、これを乗切つてやるんだといふのが、煩惱の衆流が海の水に這入ると、智慧のうしほに一味になる所で、そこに佛の光が出る、教法が我れを指導して呉れるのである。「私共は苦しい。前途は暗黒ですがどうしたらいいでせう」と、聖人の前に跪き、如來の前に訴へたら、「それが當然だ。汝、生死苦海の中に游泳して居るのに、波の上を安樂なりと考へるのは間違ひである、さればこそ汝に永遠に生くる道を教へ、無碍に生くる念佛を與へる」と仰せらるゝので、はじめてそこに氣が付いた。だから吾々はどこ迄行つても苦難の中を泳いで行くのであるから、それは樂ではありませんが、念佛はこの苦海を乗り切る水先案内となり直ちに大悲大願の海水に煩惱の衆流歸す

るところ智慧のうしほに一味になつて、吾々はひるまず溺れずにその苦海をわたりつくすのである。ところが、多くの念佛行者は取らぬ狸の皮算用で、極樂へ行つてから……と考へるが前途遼遠な先方ばかり憧れて脚下を忘れては駄目。先づ脚下にうろたへぬ者でなくては本當のものはありません。貪瞋煩惱のなかに、男々しく白道を歩む所に、無碍の力が出るのである。食欲の水に溺れず瞋恚の炎に焼かれんで、汝白道を歩めよ。人生は樂でない、生死苦海である。四苦八苦の中に於て念佛し、念佛の上に大手振つて進んで行け、といふが吾が祖先の血肉となつた眞宗教義であります。だから、わが眞宗教徒の前には、苦勞、面倒、難儀、惱み、などいふ障害物はいくら出ても邪魔にならない。念佛はスツカリ打開して呉れるから無碍の一道を歩いて行けるので、念佛はつねに不斷に吾を鞭撻して呉れるのみならず、激勵を與へて呉れます。だから吾々は、如何なる苦難の中でも「已を捨て、無碍の大道に歸す」といふ大決心と覺悟を以て精進してゆけるのでございます。

まだ／＼申したいことが幾らもありますが先づ私はザツと骨組だけ申上げました。私自身を捨てるんです。已を捨てるんです。已を捨て、も空になりません。佛の教を一杯入れるのであります。「行き詰つた」となげく人に「無碍に行けるよ」この信仰を得たゞけでもすぐれた意義

があるのでございます。茲に私一流の第一條を説いたのであります。

第 四 講

大體は只今申しましたやうに、南無阿彌陀佛といふことは、佛の偉大なる御徳を讃嘆したのです。つまり光明無量、どんなに暗い闇でも光明が一度來らば、その闇は一時に解消する、智慧の光をもたぬ人間の矛盾動亂の心情も、一度如來の智慧にのぞかれるとその御智慧のうしほに一味になり、同體になるのであります。壽命無量、人の存在は徳を積むことでありますが、なか／＼思ふやうには行けぬ、その弱さ醜さを親の慈悲で抱いて出來難い徳を少しでも積ませて下さる。如來のお慈悲に攝取されて、人生を歩みつゞけるそれが無我の徳となり、人間のつとめとなさしめられるのであります。この力は佛のお徳による故に佛徳の力用なのであります。佛は全智全能の神といふやうな、あやふなものではありません。明らかに念佛に出て居りますこの佛が、衆生救済にどういふ力をあらはし給ふかといふ、それが歸命盡十方無碍光如來で一切の惡業煩惱をそのまま化して功徳にしてやるといふ大なる力、こんな力は地上にはありません。然もこの私にこの道が開かれるのですから、如來智慧の御光は隅から隅迄照し徹底して

道に生し給ふのが不可思議光如來である。例へば食物があつても、それが届かなければ何にもならぬ、届いても口に合はねばならぬ。口に合ふても滋養がなくてはならぬ、そのすべてを具備したものが念佛であり、その生きて働くすがたを示されるのが無碍光佛であり不可思議光佛であります。無碍といふことは、これは人格的にいふたら、阿彌陀佛です。阿彌陀様といふことは、無碍光如來といふのと同じことなんでしょう。河崎、或は河崎顯了といふ時は一人の人間で、畫や書を書く時は松軒といふ雅號を用ひます。責任ある場合には顯了といふ名を用ひる。で、阿彌陀佛のお徳をいひます時には南無阿彌陀佛、阿彌陀佛の救ふて下さるお力を説く時は無碍光如來、かう行くのです。だから直接救済を受ける佛ですから、その最も親しい無碍光如來、これを出したので、それは強い力をそこに示して居るわけでございます。前に申しますやうに、親鸞聖人の『和讃』の中に、到る所に「無碍光々々々」と出て居ります。これを箴規の上に出して來たのは、一方に於て、世の中の人之餘りに「行き詰つた」といふから、それに對して一服の清涼劑を與へてやりたいといふ意味も有つて居る。一軒の家でも親子兄弟夫婦が互に小我に執着したら、それは必ずバラ／＼になつて勝手な道を辿り喧嘩が出来る。世間のすがたを見ても小我を立てました時には、必ずバラ／＼になつて、互に唾み合ひ、行き詰

るのです。吾々の體に就て見ましても、手は手、足は足、頭は頭、眼は眼、耳は耳、口は口、胴體は胴體、内臓は内臓、といふ風に自分の立場を守り體全體が一緒になつて動く時、そこに健康な體があるわけで、どこか一つ勝手を云ひ出すと忽ち身體の具合は悪くなる、その體は不健康である。足がなまけて動かなかつたら火事だといつても走り出せぬから、焼け死んだりする。「長い間見て居るから、私だけ休む」といつて、眼が休んだら何も見えやしない。一生懸命呼吸をして居るから命があるが、呼吸が休んだら三十分間経たぬうちに窒息だ。皆一緒になつて、食ふ奴は食ふし、歩く奴は歩くし、持つ奴は持つし、呼吸する奴はするし、調子揃へて動いて居るからいゝ。そこに生きた手本がある。家庭の中でも私は私、お前はお前、と勝手なことをしては、バラ／＼になるからいきません。こんな時には體の働きを見ることぢや。みんな勢揃へてやつて居る。お尻などは氣の毒なもので、一生あんな臭いことをやつて居るが、ちつとも小言をいはずにドツツリやつて居る。(笑聲)あの見本を見て人生に處して行つたら何んのことはない。餘り厄介なことが來たら、尻の番に當つたと思ふがいゝ。世の中は大抵いゝやうにしてあるから、不平小言を云はんでよい。他人はよいことばかりしてゐるやうに見えても、さしてよいこともない、大抵はちよぼ／＼である。そんな小言を云はんで平氣で念佛の大

道を歩け、さうしたらどんな道でも行ける。無碍——これは洵にいゝお言葉だと思ひました。矢ツ張り佛様は私より偉い、いゝことをおつしやつた。これで行つてやらうといふのが、この言葉の生きた私共の強い感化です。「盡十方無碍光の、大悲大願の海水に、煩惱の衆流歸しぬれば、智慧のうしほに一味なり」成程、さう行くんぢや。可愛くてならぬといふ子供に對する親の大慈悲は、健康の子供も可愛い。都合ようやつて行く子供も可愛い。病人の子供は尙ほ可愛い。歪んで手にをへぬ子供ほど可愛い。眞の親の慈悲の前には善惡邪正はありません。可愛い一つであります。そこに、煩惱の衆流が流れ入つても智慧のうしほと一味になる、といはれた世界があるんです。それが宗教の教養を経た者の悦びであります。だから、その前には邪魔もありません。病人は病人で味はれる世界に生きるからそれもいゝ。健康それもいゝ、出来る子供それもいゝ。低能兒それもいゝ。親ぢやもの俺がひとつ世話するんぢや、さういふ大きな氣持が出るやうに、佛は常に一切の群生を荷負して捨てたまはぬのです。この信念に生きるものは、この世界に出て國家の政治を料理したら國家は興隆いたします。商賣は商賣で生きられるは、この世界に湧いて出る言葉であります。かくて諸方から説明して行く時に、中心となつて居る

念佛が、愈々「無碍」の光を放つことになるのでございます。
次に第二條です。

人生を正しく見て禍福に惑はず

これに對しても、いろ／＼な批判があります。「人生」などいふやうな近代語を入れて、社會に迎合せんでもいゝぢやないか、といふ話もありましたが、迎合でも何んでもない。時代人の言葉をそのまま消化して眞實の言葉にしたらいゝ。時代は動いて居るので一所に止まつて居るわけにいかず、その波に乗つて誤まらぬやうに味はつて行かなくてはなりませんから、かういふ言葉を使つたのです。話は外れますが、私はしみ／＼この頃感じて居ります。言葉といふものは動く。私共明治時代には「私の胸が承知せぬ」「マア君も、胸に手を當てゝ考へてみよ」などいひました。ところが、段々西洋かぶれして、明治の晩年から大正にかけて、胸が免職されて頭になつた。「あいつは頭のいゝ奴だ」などいひ、子供に迄「お前は頭がいゝ」といつて子供を福助にするから、頭だけよくなつてよう歩かぬ。逆上のぼりて了ふんです。それで行き詰つてしまひます。すると今度は、先頃から頭がまた胸へ下り來よつて、「心臓が強い」(笑

聲)といふやうになつた。これは逆も危ない、そのうちに心臓麻痺を起すか知れぬ。私はどうせこいつは行き詰ると思ひます。それよりも「肝臓が強い」くらゐにして置いた方がいゝ。肝臓麻痺は無いから、マアさういふ風ですから、今更「心臓が強い」といふ奴に、「胸三寸」といふたとて、また、「頭がいゝ」といふたとて通用せんだらう。だから、胸が頭に行つて、頭が心臓に下りて來たやうに、言葉は時々かはる、かはつてよい。ものゝがら變らねばよい譯です。だから、「娑婆」も「人生」と變はつて來たから、社會に迎合でも何んでもない、もうそんなことは超えなくては仕様がな。そこで「人生」と出して來たわけで、その方が現代人にはわかりがいゝ。で、二條の初めは「人生を正しく見て」とあり、終りには「禍福に惑はず」とある。『大無量壽經』には「吉凶禍福」とありますが、「吉凶」だけを抜いたんです。禍福に惑ふのは、要するに人生を正しく見ぬからだ、人生を正しく見たら、吾々は迷ふ世界も惑ふ世界も無いのです。それが一體佛教なんですから、これをもう一遍ハッキリ再認識をしなくてはならぬといふのが、この一項を入れた譯でございます。これも物好きぢやありません。蓮如上人の『御文』を繕いても、前に申上げましたやうに、王法をさきとし仁義を本としなければならぬとか、或は吉日良辰をえらんでならぬとか、いろ／＼人生を正しく見る道が説かれてあり

ますが、説教では餘り申しませんから、もつとあそこをハッキリさせて、人生を正しく批判しようぢやないかといふのです。そこでひとつ私の見る所を申し上げますが、かういふ時には、要らぬお經の講釋などしても問題になりません。私が考へますのに、現代の宗教を説く人はどうも深く講釋に入つていかない。講釋が學的になり研究的になつて、議論の積んだり砕いたりになつて、結論になか／＼達しない。そんなことはせんでよろしい。佛が講釋し切つたものをそのまま用ひたらい。いはれたまゝに人生を眺めたらいいのです。一體、佛教といふものは、この間から私は考へて居りますが、これは簡単なもので、中心は三つよりありません。一は「自」を明らかに知ること、即ち私を明らかに知ることです。それから私と一緒に居る他の人がどういふものか、と「他」を明らかに知ること、さうして、次に「業」を知る、自と他の二つが動いて行く能動性がどこにあるかを明らかに知ること、これをハッキリ知つたらそれでいい。自、他、業……自と他が動いて行く全體は業の力で動くので、この三つだけ知つたら人生は明らかにわかります。そこで、現代の人の人生の眺め方と、釋尊の教義を信ずる吾々佛教徒の人生の眺め方とは、全く正反對でございます。

だから、現代人は佛教を理解するといふことは、これはなか／＼容易ならぬことだと私は思

ふことです。私共も初めは事毎に見方が異ふから、なか／＼信ぜられなかつたのです。ところで、吾々が人生を正しく見るといふことは、釋尊の教によつて、もう一遍再認識をしようぢやないか、と現代語でいへば、さうもいふべきであります。大體がこの人生の見方は、人生はどうしたら理想の生活が出来るか、平和に暮すことが出来るか、一生の間を安樂に生活が出来るかといふと、それを言葉でいふたら、文化が向上するとか、制度が完備するとか、國運が隆昌に向ふとか、いろ／＼な言葉であらはせますが、これを一言にしていふと、この人生の中にどうしたら幸福に暮せるかといふことであつて、それが人生の目的だ、と考へるのが現代です。だから、學校などを見ましても、教育した者は不完全なものでは出さぬといふ。優等生、完全な知識人だ、と保證迄附けて出しますから、出た者は男は皆秀才、女は皆才媛、生活はといふと、文化の向上した理想的な生甲斐ある生活、これが現代人の目標らしい。ところが開けて見てびつくりの状態で、どこにも幸福の實が實つて居らぬ。あちらにも不平こちらにも小言、そして行詰つた行詰つたといふ。これはどういふ譯か。大聖釋尊の見方は世の中の見方と反對で、人生は文化……そんなものは蚊が「ブン／＼」と啼くやうなものだ、人生は五濁の惡世である、幸福など地上にはないとピシヤツと押へられて居ります。

數萬歳の有情も 果報やうやくおとろへて

二萬歳にいたりては 五濁惡世の名をえたり

熱に浮かされてゐるものに冷水をぶちかけたといふ形です。この、「人生は五濁惡世なり」とは手強い教宣ではありませんか。如何にもこれは人生を深く見るのであります。現代教育では人格向上した完全な人物……といひますが、それを佛は濁惡邪見の衆生の寄合と見られる。迎も變なものです。「濁惡邪見の衆生、十惡五逆の罪人、五障三從の女人……」といふ風に頭から叱り付けて了ふ。「あんなことをいふから、今の紳士淑女やいふ人は寄つて來んのだ、あれはどうかせんならん」と、佛教の内輪の人でいふ人もあるんです。けれども、私は不贊成「君はいゝか知らんが、お釋迦様はさういはんから何とも仕方がない。若し訂正してもらふなら一度出て來てもらふがよい」といふ。住む所は五濁の惡世で、濁惡邪見の衆生で構生して居る人生を、それを善盡し美を極めて、秀才と才媛と人格の向上した人で造る世界のやうに見て居り、五濁惡世を「文化の世界」といつたり、さうかと思ふと愛の巢とか戀がどうしたとか變な横亡の事をいひ出すから勘違ひだ。人間と鳥と一緒にして了ふ。どうもおかしいことである。若しこれが正しい道であり、正しい見方であるならば、何故に行詰つたなど云ふことが出

るのか。何故に陥し合はねばならぬのか。行詰つてから云ふのではないが、これまでがこのまゝの人生で理想の生活が出來ると思ふて居たのは、それは低能兒だ。或は逆上してゐると見て差支がない。こんなことで人生が渡れると思ふのなら、餘りに人がよすぎるとも云ふべきである。そこで佛は人生はどういふのかといふと、佛教では、人生は甚だ不完全なものだといはれる、純粹なものでなくて濁つてゐる、明らかなものでなく闇いのだと云はれる、生老病死の四苦を抱いて居る不完全な者、それをよく知らなくてはいきません。正しく人生を見、正しく河崎顯了のすがたを見ますと、河崎顯了なる者は生れて六十七年だが、初めから苦難の中を凌いで、今も苦難の中を歩いて居る。濁がだんく、淨められるどころか、なかくに澄みさうになり。人生は濁れる苦海だ、苦海だから、随つて棺桶に遣入る時迄苦はたえぬ。いつか私の一生の上に樂などありやうがありません、さう肚を定めて居る。ところが面白い、さう定めて行く所に、今迄苦だといふて來たやうな問題が一向苦となりません。樂と列べるから苦がある。樂が無かつたら苦といふことも無い。苦とか樂とかいふものにも引ツかゝらんで濟むのです。「若い間に苦勞したから、年が行つたら、ちつと樂がしたい」といふ人が随分あるが、佛法を聞いて居り乍ら、さういふことをいふ人は、佛法がわかつて居りません。私共は人生を正しく

見、自分を正しく見てゆきますと、若い時より年が行くほど、新らしい變つた苦勞が出るものだ、といふことが解ります。「ハア、また出て来たな」といふ風に、見て居るといふ變つた奴が出る。この間も腰が痛うなつて伸びぬのです。マア痲氣といふのか、お醫者さんの方では坐骨神經痛とかいふが、名はなんでもそつちで附けるが、こつちは痛いだだけだ。お醫者さんはいろ／＼その時によつて名を變へるから、氣もかはるかしのぬが、こちらは病だけは動かぬ。それに誰も同情せぬ。家の中の者迄同情して呉れません。腰の痛いは當り前にする。よぼ／＼して歩くから、「その態見なされ、ちつと伸ばしなされ」といふ。伸ばせば痛い。「撫でて上げませうか」さはつたら痛い。妙なものである。年寄ると若い時には知らん世界が出る。そこで長生きして仕合せだ、變つた世界を見たわい、と思つて居ります。電氣マツサージや濕布をしても餘り効目は無い。灸を据えて貰つたらちつといふ。「先生、熱からう」といふ。「生きて居るから熱い。死んで居たら熱くない」熱い所に生命があるので、熱いのは生きて居る證據だと思ふと、洵に有難い。熱いのは何んでもない。ちつと熱いのが効かぬと、死んで居るのでないかと心配する。さういふ所に若い時には知らぬ景色があります。マアこれで年寄の仲間入したと思ふ。それは當然の功勞や。それをお釋迦様の所へ相談に行つたら、「人間は生れ

て來る時に、病を抱いて來ると教へてやつたがネ」「さうですナ」「それなら、それが出たとて吃驚せんでいゝがネ」何もいへぬ、一遍に參つて了ひます。佛法がわからぬ人は、病が出たら神様でも出したやうに思ひ何んとかして片づけて下さると思つて頼みに行く。私は頼みに行きません。何んでやといふたら、私が出したと思ふて居るので、自分の出したものを尻拭ひを神様にさせるは勿體ない、罰が當るから私は私で灸を据える。私は灸を据えて體を焼くのは、いづれそのうちに體全部を焼かれるから、その豫行演習（笑聲）だと思ふ。さう思ふと何んともありません。そのくらゐの覺悟で人生に處して行くんです。病がある。それから年が寄る。みんな長生きしたい／＼といふが、これは變なものだ。それに年が寄る、そして死んでゆく、餘り有難くない。けれども、有難うなくても寄りよるから仕様がなない。雑煮餅食べんで居つても、矢張り曆が變つて年が寄るといふ風で、年が寄る時には體がまた平行線で弱つて行く。年が寄らなんだら痲氣は出ない。嬰兒の痲氣はありやせん。（笑聲）けれども、年が行かなんだら、何年経つても小便も大便も母親にさして貰はなくてはならぬ。これも餘りおかしい。一人行かうと思ふたら年が寄るし、年が寄るといふと體が弱くなるし、二ついゝことはない。二ついゝことは極樂に行けばあるから、そこ迄樂しみを残して行く。行かぬうちに樂しむと、極樂に行く

樂しみが無くなるから此の世は苦の中を行く。病氣が出たらうろたへぬ、病氣を正しく見るから迷はぬ、かう行くんです。さうして、最後には死ぬので、これまた「死」が無かつたら大變だと思ふ。「死」があるから有難い。なぜかといふと、眞宗信者は死ななかつたら極樂へ行けぬでせう。それでは信心に徹が生えて了ふ。生きてよし、死んでよし、死の一枚下は極樂だ、極樂へ行つてやらう——と、かう肚を定めて置く。さうしたら、病の中も平然として行ける年が行つても死に臨んでも、平氣であります。

この間も、私共年の同じやうな者が二人寄りまして、「お互に年が行つたなア」といつて話し合つたんです。「僕は六十七になつたが、君も六十五になつたか」と私がいふと、「先生も先が短かいナ」と向ふでいふ。「君は、僕の先が短かいといふが、一體、どの尺度もさしで測つたのか」(笑聲)相手は鳩が豆鐵砲喰つたやうな顔をしてゐた。「それでもあなた、曇鸞大師は六十七で死んだんでせう。六十有七ときいたり、淨土の往生とげたまふと『和讃』にある。それでも先が短かいと思ひませんか」「思はぬ」「なぜです」「私の息子は二十六で死んだ。私は六十七になつた。息子の法名の前で、俺も先が短かくなつた」といつたら、息子が笑ふ。私は二十六で死んだが、親爺は佛教を信じ乍ら、六十七で先が短かいといふ、ちよつとハツキリせよと、いふ

から、私はそんなことはいはぬ。息子よりちつと生き過ぎた、といはなくては申譯がない。息子は二十六で死んだが、私の弟の子供は二つで死んだから、伯父さんは二十六迄も生きて怪しからぬ、私は二つで死んだ、といふだらう。長い短かいの年齢はありやせん、とお釋迦様はいふた。尺度で測るな、老少は不定だ——あれだ。さう決めたらいゝので、だから長生きしたからとて、先が短かいといふやうな神経衰弱せんでいゝ。「さうだなア。けれども、聽て段々死ぬのが近寄つて来る。だから、矢張り宗教は死の問題の解決ですなア」「さう物體ぶつて云ふことを止めよ。さう神経衰弱をせんでよい。俺は死の問題などいはぬ。あれくらゐ變な奴はないよ、相手になつても相談に乗らぬ」といひ出したら、「どうも話がわからぬ」といふので、「それでは、君に説教してやらう」といつて聞かせた話が、この正月に私が姫路で聞いた話です。先生の話をよく聞いてゐた、あの何某のお婆さんが目出度い往生を遂げましたといふのである。それは夫に死別した一人の婦人であつて、佛教をよく理解して居る人ですから、今の生活に心配は無いし、後願の憂ひも無い獨り身であるので、何か私の身に適ふ報恩行をしたと思ふが、學問が無い爲に先生にはなれぬし、マア病人の世話でもしようといふところから赤十字社の病院へ行つて、手當も何も貰はんで、出来るだけ病人の世話をした。それだから、

病院長よりも、さらに一般の患者からその人は尊敬を受けてゐた。そのお婆さんが今年の正月家へ歸つて来て、孫を寄せてワイ／＼いふて喜んで居つたが、蜜柑の皮を剥いて筋を取つて口元へ持つて行かうとしたら、コロツと轉けて死んださうです。さうすると皆がいふたんだ。「平生の間、教を喜んで居られたから、何んの苦しみもなしに目出度い往生を遂げられました」とお医者さんはどういふたかといふと、「心臓麻痺だ」といつたさうで、そこで私は、「人生は、あなたどう考へる……私はどつちやも賛成せぬ」といふ。「なぜです」「そんな名目は當人に關係無い。當人は心臓麻痺で死ぬとは思ふて居らぬ。私は目出度い往生を遂げるとも思ふて居りはせぬ。當人はその時に何を思ふて居るかといふと、蜜柑食はうと思ふてゐた。タツタこれだけ、恐らくそれは筋を取つて孫に食はさうと思ふて居る筈は無い。それなら自分の口元へ持つて行かなくてもよい。それがその時の考へだらう、どうか……」といふたら、「それは、さうだ」といふ。「蜜柑は食はうと思ふて居るのに、それに死ぬといふは何んや、知らぬ奴が出て来て突然奪つて行く。ちよつと待つて呉れ蜜柑を食つてから……と云つても、それは待つて呉れない。どうせ死にがけに水で濡らして貰ふ代りに、蜜柑の汁で自分に濡らしたら世話ないが、待つて呉れんでサツサと連れて行く。後に残つて數珠掛けて居る者は、「目出度い往生だ」

といひ、お医者さんは「心臓麻痺」といふ名を付けて居るが、勝手になさい。名を付けられる當人は蜜柑食ふだけ、さうぢやないか」といふたら、「それはさうですナ」と、わかりました。が、私はこの頃さつたのです。このさとりは碎ける時があるか知らんが、一兩年前に私の友人が、御本山の報恩講の折、二十七日のお速夜に「寒かつた」といふて、家に歸つて風呂に入つた。ところが、風呂からいつまで経つても上がつて来ぬから、家人が見に行つたら風呂で死んで居つた。サア大騒ぎで引揚げた。お医者さんは、「腦溢血」だといふ。周囲の人は、「御開山のお速夜に、御禮を申上げて歸られて、風呂の中で死なれたのだから、目出度い往生だつた」と、こういふた。私はそれに對しても、「それは、お医者さんは腦溢血といふ名を後で附けた。御開山の日に目出度い往生だつた、と、あなた方はいふが、本人は目出度い往生も、腦溢血も無い。寒かつたので風呂に這入つて上がつて御飯を食へようと思つた、それだけだらう。側からワイ／＼變なことをいふて居るが、それは當人には關係無い」といつたが、よくわかりませう。他からいろ／＼云ふんですが、その當人には一向關係がない。

そこで私は、この一つの嚴肅なる教訓を眼の前に受けて「死」の問題の解決です。私自身はどう行くんだといふたら、相談に乗つて呉れるものなら相談に乗つて貰ふ。妥協を許して呉れ

るものなら、賄賂を使ふても妥協する。けれども、蜜柑を食ふ間、風呂から上がる間待つて呉れない。相談に乗らない。妥協をして呉れない。そんなものは勝手にせい、俺は相手にならぬ俺は生きて居る間生きて居る——これでいゝ。生きて居る間から死ぬこと迄取上げて、愚圖々々いはんでいゝ。死んだ先が決まつて居ればそれでよい。それ以上は手のつくし様がない。だから手のつくせる方へ力をそそぐのである。生きる間渾身の力を發揮して、國家、社會の爲に盡さうとして大なる使命を果して行く。蜜柑食ふ間も待つて呉れぬやうな、風呂から上がる間も待つて呉れぬやうな、そんなセツカチな奴は相手にしない。だから私は、六十七歳になつて「死」といふことは消し飛んで了つた。もうありやせん。無碍の一道だ。生きて居る間生きて居るわい。棺桶に這入る迄仕事して居る。殊に眞宗に於ては、棺桶に入つたら還相廻向でまた出て来て、残りの仕事をしてやらう、といふ永遠の大きな活動を生むこの力こそ、この宗教によつて養はれた正しい信念です。それほどにハツキリと行く所に宗教の有難さがあるのです。

命終その期ちかづきて 本師源空のたまはく

往生みたびなりぬるに このたびことにとげやすし

これは、法然上人臨終のお言葉です。三たび往來したが今度は樂に死んで行くよ、と仰せら

れてある。だから、上人には七十の坂を越えられても、老境は何等問題でない。生きて居る間正しく道の爲に盡された。それが本當の宗教者であります。現代人のやうに、轉ばぬ先の杖が知らんが、病氣にならぬ先に病氣の相談をしたり、死なぬ先から死ぬ相談をしたり、それをもとにして種々雑多な迷信に陥る。死ぬものを死なぬやうに思うたり、病む身を病まぬやうにしやうとするところに無理がある。それでは問題にならぬ。病になつたら病になればよい。死んだら片が付く。何が片が付かぬといふたとて、死んだ後ほど片の付き易いものはない。死んだら親子の間でも三日と置いておかぬ。もう一遍出て来るな、と上から石で押へて了ふ。何もうろたへんでいゝ。私の親爺はちよつと變つた人で、「死んだとて、世話を受けんよ」といつて、棺桶を拵へて自分の書齋のふちに置いた。ところが、なか／＼死なぬので、もう一つ拵へた。生前によく老僧の話を聞きに來た村の人が、その棺桶を眺めて、「御隠居様のやうな氣で、平氣で居れば結構です。さういふ氣になりたいですなナ」と、感心をしていつた。それから面白いのです。親爺の枕許に大きな美人の畫が掛けてある。別に描かしたのでなく、あの街で出る大きな廣告、あれなんです。さうして、こつちには棺桶がある。「これで、ようわかる」といふ。大抵、來た奴の目つきでわかる。助平な奴はこの畫ばかり見て居る、といふのでありま

す。いまの村の人は棺桶に感心したものだから、「親爺はそんなにあなた、棺桶を褒めるなら、あげよう」「もうよろしい」話が済んでその人は家へ歸つた。すると、後から棺桶が來た。感心したからあげよう、といふので、何んとも仕様がなない。平謝りに謝まつたといふやうなことがありますが、嫌ひなら褒めぬがよろしい。褒めたからやつた。先方の肚を道破するんです。念佛の一道に入つたら、自然にその力が出るわけで、マア私の親爺はさういふ人で、病床に居つて……四十八歳から肺病になつて七十七歳迄生き、二百幾卷の書物を書いて居ります。

で、吾々は相談に乗つて呉れぬやうな問題は、ちつとも相手にせぬがよろしい。自分の手のとどく所に、吾々は安んじて堂々とこの世の中を闊歩することが出来る。それが宗教であります。世は五濁惡世、人は濁惡邪見未完成的な人間の寄合ひ、完全なものは淨土より無い。それでゴテノとして行くがこれでいゝ。琉球へ行くなら草鞋はいて行け、琉球は石原小石原——といふやうな唄がありますが、鹿兒島迄は石原小石原は無いから跣足で行けるが、琉球は石原小石原だから草鞋穿いて行けといふので、石原小石原でも草鞋穿いたら怪我はしない。五濁惡世生死苦海とわかつたら、悲哀煩悶は無い。「なアに、この中を行くんだ」といふ大決心が、人生を正しく渡る大きな力、生れたら死ぬと定めたら、定まつた問題をあゝや、かうやせんでいゝ

死ぬ時に死ぬ、生きて居る間は生きて居る、と行くんです。これでいゝんだ。その草鞋で私共は歩いて行くやうになつたから平氣になりました。親鸞聖人は最後の息を引取られる迄、少しも愚癡も無しに、「口に世事をまじへず、たゞ佛恩のふかきことをのぶ、聲に餘言をあらはさず、もはら稱名たゆることなし」あの力で行かれた所に、私共洵に學ばねばならぬ、慕はねばならぬ道がある。「往生みたびになりぬるに、このたびことにとげやすし」と、おつしやつたこの法然上人の大きな力を握るのです。生きて居る間は生きて居る。平生業成の念佛を有つて居る以上、何も心配はありません。死ぬば體は焼いて呉れるし、魂は阿彌陀佛が引受けて下さるから行先の無いルンペンと違ふ。その大きな攝化のうちに恁々と生きる力を有つて居るのが、「人生を正しく見て」といふ句の體驗味でございます。

次の句の、「禍福に惑はず」といふは、私共は今日迄久遠劫來、二十五有界流轉の衆生でありますから、その經驗は碌でもないことを積んで來た。それが寄つて居る人生だから、五濁の人生なんで、この中を足踏まれ乍ら行くんだ、と覺悟して居るから何んともない。だから、他に向つて要求はせぬ。「どうか私を大切にしてくれ」とか、「ちつとは俺のことも思ふて呉れ」とか、そんなことはいはぬ。我も五濁惡世の濁惡邪見の衆生、彼も五濁惡世の濁惡邪見の衆生

だから、こちらの思ふやうにして呉れぬが當り前だ、して呉れると思ふから、して呉れぬ時に腹が立つ。して呉れぬのが當り前と思ふたら何んともない。黙つて一人行つたらいい。求むる所に苦しみあり、求めざる所に安樂がある。子供にも求めない。女房にも求めない。與へて呉れるだけで満足して居る、かう肚を定めて行く。さう肚定めても、息子も大切にして呉れ、嫁もよういふことを聞いて呉れたらいい分はないだらう……いや、いい分がある。餘りぐるりが大切にして、觀音勢至のやうにしたら、こちらは阿彌陀様になつて立つて居らんならんから、御飯も食へぬから御免蒙る。人生は人生で歩む、斷じて天上界でない。この一つの態度が、現實の世界を渡る偉大な力でございます。そこ迄行かなくては、人生に即した眞宗教義の力はわき出ません。全世界の者は皆苦難を抱いて居るが、それでいい。病氣にもなるし、人が寄れば寄るだけ氣が異ふし、私の思ふ通りにせいといふても、ぐるりの者はせぬ。また、したら困る。私の年寄のやうによぼ／＼と歩け、と息子にいふたら、それはいかぬ。私は齒が悪いから軟らかい物を食ふので、息子に迄食はさうとしたら、息子の胃腸がワヤになるから、「お前は、硬い物を食へ」といはならぬ。若い奥さんが、子供が初めて出来て、女學雜誌でも見て、子供にはウエハースより食はせぬといふ風では、そんな子供は胃袋が薄紙のやうになる。子供を

育てるのでも、理窟に引ツかゝつたら皆ワヤになります。私はさう考へてから樂になつた。「どうせ俺も親の前でガチャ／＼やつて来た。時代後れの俺だ。お互にひとつガチャ／＼で行かうぢやないか」と、息子にでもいつた方が、その方が早う治まる。どつちやも「洵に申譯ない」といふ風に頭を下げて行くより、イビツの者はイビツ同士行くより仕方がない。イビツで行かんと完全で行かうとするからいかぬ。完全を望んでも自分はイビツや。イビツはイビツでいい。昔からいふてある。「似たもの夫婦」と、さう肚を定める。どうせ濁惡邪見と濁惡邪見の寄合ひだから、と、さう氣が付いたらどつちも遠慮だ。「虚偽の生活はいかぬから、赤裸々に出よう」などいふ人があるが、それは大きな誤り、赤裸々に出るなら、着物着んで裸で出るといふことになつて、警察に引ツ張られるし、また、見つともない。矢張り赤裸々はいかぬ。いつでも着物も着せねばならぬし、顔に白粉迄塗らな嫁にやれんがナ。赤裸々ではいけぬ、それが人生だ。さういふことをいふと、「それは年が行つて、あなたのやうになつたらさう行けるが、それも白髪が生えてみるとおかしなものだ」といふ。「馬鹿なことをいふな。白髪ほど有難いものがあるか」「何が有難い」「大學を出た若僧が逆様になつたとて、白髪一本生やせん。老境には入つた光榮、これは白髪が生える迄奮闘して来たといふ、人生の勳章だ。その白髪を黒く

染めて化して居る人があるが、あれはいかぬ、與へられた勳章をワヤにしよる。白髪は白髪で通る。「あなた、杖迄つかんならん」「それは、長生きせず宮中の杖は許されぬと聞いてゐる。あれは有難いことだ。大きな顔をして、杖がつける迄来たことを喜ぶよ。洋服を着た若い者を見るがい。杖がつかないが、年に似合はぬから脇の下に抱へて内密ないしよで持つて歩く。(笑聲)それほど有難い杖をおほびらでつけるやうになつたことを、大いに感謝せんならん」「もうわかつた」といふ。「そこ迄行つたら人生は屈託はない」といひます。すると、一人の若い者が、「それは、年寄の負惜しみだ」といふ。「負惜しみぢやない、負勝ちぢや」といふてやつた。杖ついで動き、白髪は白髪で動き、生きる間生きて終始一貫して、緊張して生活の出来るのが、これが正しく人生を眺めたすがたです。けれども、何しろ吾々は生れ出たお里が餘り氣が利かぬから、地獄、餓鬼、畜生から来たんだから、どうせガチャ／＼も出る。病氣もいろ／＼な災難も来る。食ふものだから下痢もするだらう。通じのつかぬ時もあるだらうが、他から来るんでなく、持つて居るものが動くので、出て来た問題に對してうろたへるのは無用ぢや。汝の業報汝の上にはあらはれる、と決心したら、どんな中に居らうとも、禍福に惑ふやうなことはない。無理に祈願したり、吉日良辰を選んだり、方位方角を云々したり、卜占を信賴したり、そんな

ことは畢竟馬鹿げた邪道であります。人生を正しく見る所に、自業自得といふおのづからなる強い力が出るんです。本當に教理を聞いて行く人は、その世界に出るのであります。「河崎のやうな變物のいふことは……」といふ人があるか知らんが、私は變物でいゝのです。みんなと一緒に居たら「變物」ぢやないだらうが、私は金剛不壞の信心を以て、堂々と生死海を渡つて行かう、と決心して居るので、他の目からは或は「變物」とも見えるでせうが、私としては、そんなことは何んともありません。いや、まだ何かと申上げることがありますが、時間が餘り経ちますから、次に移ることに致します。最後の一條は、「報恩の至誠を以て國家に盡す」であります。

報恩の至誠を以て國家に盡す

現代の眞宗教徒の上に於ては、この力が抜けて居ります。殊に長い間説教を聞いて居る者の上には、茲に一つの認識不足がある。御恩報謝は念佛、これだけといふ風です。蓮如上人の眞精神を頂いて居りません。御恩報謝は念佛だけに止まるなら、「王法をさきとし、仁義を本とす」といはいでもよろしい。念佛を喜ぶ者はこの行動が出来なくてはならぬといふところから、こ

これは念佛の現實化の世界を説いたのです。念佛だけはたゞごとでないを受取つて、そこだけやつて居り、報恩の行に動く時に尻込みするのは何の遠慮から來るのか。眞俗二諦といふて居り乍ら、俗諦の力が抜けて居る。國家は寧ろ俗諦なんで、非常時はどう行くべきかといふと、「生命を捧げて動け」といふのが國家の要求である。宗祖聖人も、「朝家の御ため國民のために念佛せよ」と仰せられました。ハッキリして居る。「國は豊かに民を安ずる」世界が『大無量壽經』に示された世界なんで、釋尊は明らかにこの見解を下して居られます。さういふものを纏めて明治の初めに「眞俗二諦」といふ言葉が教義の上にあらはれたのです。それは車の兩輪、鳥の兩翼の如しで、而もこれら一體になつて動くことがこの消息を得たものである。然るに、どこの説教でも念佛には骨折るが、俗諦教義に骨折る親切がどうも抜けて居りますから、それを今度茲にハッキリ出して、現實生活の上に行動として實現さしたいといふのです。「報恩の至誠を以て國家に盡す」——國家が大切なるが故に念佛は尊い、念佛を尊むが故に國家に粉骨碎身努力してその一分を盡さねばなりません、この肚なら國恩に報い盡さなくてはならぬ。現在、愛國婦人會とか、赤十字社とか、國防婦人會だとか、大きな愛國團體が堂々と動いて居る、この中愛國婦人會は奥村五百子の信念の上に築かれたのである。これは吾々に明らかに、佛

法體驗者の國家的實踐力を示したものであります。しかしこれは既に過去のことである、今日に於てひとり宗門だけが後に寄つてはいかぬから、宗門人よ、願はくはこの報恩の精神をよく了解して積極的に行つて呉れよ、と呼びかけたのでございます。

これに對して一つの小言がある。「國家も結構ですが、如來聖人に對してはどう行くか、佛祖の恩はどこで報ゆるか。寧ろ、佛祖及び國家の恩に報ゆ、或は四恩に報ゆるとした方がよかつた」といつた人がありますが、成程、それは平常時の相談、非常時の今日は國家中心で行かなくてはならぬ。それで佛も決して小言をおつしやらぬと思ふ。阿彌陀佛の本當の精神がわかつたら、阿彌陀佛は人を助けたから人からお禮を受けよう、といふやうな、そんなケチな阿彌陀様ではない。「私の心がわかつたら、他に對して利他行をせい」とおつしやる。それが佛に對するところの報恩といふので、親の前に行つて、「あなたにも差上げたいが、一つよりないから、あの親類の方へ持つて行きます」といふなら、「私の方は放つて置いていよ。世間の義理を缺かぬやうに……」と親はいふでせう。「國家の恩は放つて置いて、俺の恩を報ぜよ」といふ阿彌陀佛ではない。「私の心がわかつたら、私のことは捨て、置いて、汝永劫に再び遇ふ秋の無いめでたい國家に生れて、教を聞いたんだから、それが爲には身命財を擲つて、報謝の

行を運んで行け」といはるゝに違ひない。私共は確くさう信ずるので、この意味でこれを結んだものでございます。これで眞俗二諦の教義をハッキリ踏んで行くんです。これを名づけて「同朋箴規」といふ。同朋とは、御同朋、御同行のこと、箴規といふは、イマシメツ、シムといふ言葉で、お互ひに念佛の大道に生かして貰ひ、明るい人生々活をする同信の友の嗜みでございます。孟浩然の詩に、

人生 静 躁 殊 人生 静 躁 殊 なり
 莫 厭 相 箴 規 厭 莫 相 箴 規 する こと を

相箴規と、互に注意し戒しめ合ひすることが、宗教生活の上にての正しきレールに乗る道だといふので、これは法主台下だけのおひとりのお銘でもなければ、私等門末信徒だけのものでもない。皆寄合ふて互に戒しめ合ひ相慎んで、眞の念佛者として國民生活を實現する爲に敷かれた所々の三條のレールでございます。どうか今後、眞宗教義をお喜びなさる方は、このレールに乗つてこれを實踐するやうに、努力し給はんことを特に念願して已まないのでございます。今回の話は、私の頂いて居る範圍に於きまして、「同朋箴規」の大體の骨組だけを申上げてこれでお許しを願ひます。(完)

昭和十五年十二月二十一日印刷
 昭和十五年十二月二十五日發行

非 愛 心

不 許 複 製

名古屋市中區南伏見町二丁目 福 田 正 治
 信 道 會 館
 名古屋市中區千早町五丁目 中 尾 五 郎
 誠 社
 名古屋市中區千早町五丁目 株式 會 社 一
 名古屋市中區南伏見町二丁目 信 道 會 館
 電話 二〇七二番
 振替口座名古屋 二二一四番

終

4